高槻市文化財年報

平成4年度

I　埋蔵文化財の調査 …… 1

1. 平成4年度の調査

2. 調査の概要

嶋上郡衙跡の調査　中村　剛彰

郡家本町遺跡の調査　中村　剛彰

高槻城外堀跡の調査　中村　剛彰

高槻城舟入川跡の調査　鐘ケ江一朗

安満遺跡の調査　橋本　久和
中村　剛彰

古曽部・芝谷遺跡の調査　宮崎　康雄

慈願寺山遺跡の調査　木曽　広

梶原古墳群の調査　川端　博明

梶原瓦窯の調査　鎌田　博子

II　文化財保護啓発事業 …… 49

III　資料紹介 …… 52

高槻城堀割出土木材の樹種について　徳丸　始朗

高槻市出土の金属製品（一）
－奈良平安時代の鉄製品－　宮崎　康雄

IV　研究ノート …… 62

郡家今城遺跡の軒丸瓦　高橋　公一

脚付き土師質鍋について　橋本　久和

1994年3月

高槻市教育委員会

高槻市文化財年報

Ⅰ　埋蔵文化財の調査

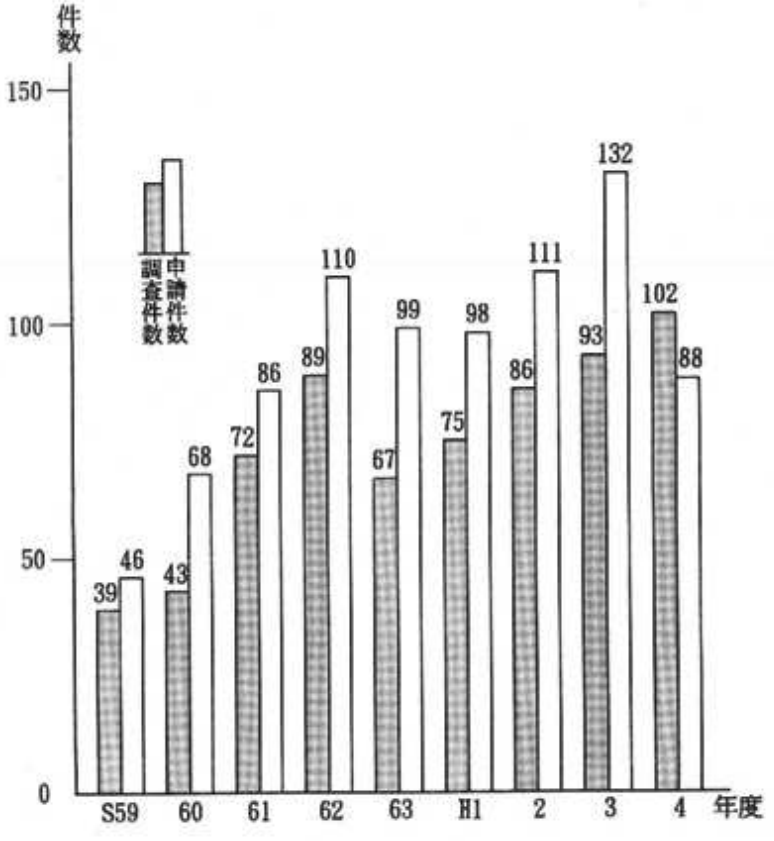
1．平成４年度の発掘調査状況

平成４年度における土木工事等による埋蔵文化財発掘調査申請件数は88件となり、前年度に比べ若干少なくなっているが、調査は102件にのぼり、ほぼ例年どおりの件数になっている。また調査件数が申請件数をうわまっているのは、平成３年度申請分にかかわる調査を４年度に数多く実施したのと申請件数が５年ぶりに90件をきったためである（グラフ１）。こうした状況は近年にみられないことで、ここでもいわゆる「バブル経済崩壊」による開発の沈静化がうかがわれる。

届出別にみると、「個人住宅の増改築」が36件ともっとも多く、昨年度の20件が異例に少なかったことや過去十数年の推移から判断すると、通年の件数よりやや多くなっている。これに対し、「造成工事等」が６件と前年度の14件からかなり減少しているのは経済動向が反映しているためとみられる（表１）。

公共事業関係では、「道路・水路改修」、「上下水道整備」が昨年度の31件からすると漸減しており、市街地における遺跡内での都市基盤の整備がかなり進捗した様子がうかがえる。

遺跡別にみると、やはり鳩上郡衙跡が35件と圧倒的に多く、ついで安満遺跡・高槻城跡の順になっている。地域的には、高槻城跡などの市域中心部や郡家今城遺跡・安満遺跡などの住宅地区に増加傾向がみられる（表２）。また古曽部・芝谷遺跡については、平成３年９月から実施してきた一連の大規模調査が平成４年の９月に終了し、引き続き調査報告書を刊行



グラフ１　発掘調査件数の推移

すべく整理作業に入っている。最後に、平成４年度に実施した調査の概略を一覧表で揚げておく（表３、図１・２）。

個人住宅	共同住宅	駐車場・倉庫等	造成工事等	道路・水路改修	上下水道整備	その他	計
36	9	14	6	15	10	12	102

表１．平成４年度　届出別調査件数

遺跡名	件数	遺跡名	件数	遺跡名	件数
嶋上郡衙跡	35	教行寺跡	1	古曽部南遺跡	1
上土室遺跡	1	津之江南遺跡	1	安満北遺跡	2
氷室塚古墳	1	大蔵司遺跡	1	安満遺跡	15
郡家本町遺跡	5	宮之川原遺跡	1	天川遺跡	1
郡家今城遺跡	9	上田部遺跡	3	安満山古墳群	1
郡家車塚古墳	2	高槻城跡	10	梶原寺跡	1
宮田遺跡	3	慈願寺山遺跡	1		
富田遺跡	4	古曽部・芝谷遺跡	3	合計	102

表２．平成４年度　遺跡別調査件数

古曽部・芝谷遺跡の大環濠（断面の一部）

No.	遺跡名（地区）	所在地	届出者	用途	面積（㎡）	担当	調査期間	備考
1	嶋上郡衙跡 43－F	郡家新町395 23,24	酒井保男	個人住宅	65.53	大船	4.4.1	遺構・遺物なし
2	4－A	郡家本町920	久保田芳邦	〃	54.25	高橋	4.4.8	包含層確認
3	38－G	清福寺町919-7,8	増田泰弘	〃	110.18	〃	4.4.9	〃
4	57－G・H	川西町1丁目1093-3	長澤繁造	〃	175.35	〃	4.4.14	〃
5	45－O・P，55－C，D他	郡家新町260	関西産業㈱	露天駐車場	1,012.00	〃	4.4.27～4.8.21	弥生土器
6	45－N－0，35－B，C他	〃 252,251	〃	宅地造成	1,609.00	〃	4.4.27～4.8.21	『概要17』に掲載
7	45－K・L・P	〃 261	石田勝三	駐車場造成	1,213.00	〃	4.4.27～4.8.21	『概要17』に掲載
8	67－G	川西町1丁目1087-15	高瀬博敏	個人住宅	57.17	大船	4.5.25	遺構・遺物なし
9	48－G	〃 1丁目954-20	高橋勝士	〃	57.51	〃	4.6.10	〃
10	85－P	今城町186-11-12	星野龍司	〃	113.57	〃	4.6.19	『概要17』に掲載
11	74－A・B，84－A・B他	郡家新町・今城町	高槻市長	水道管移設	303.30	〃	4.7.13	遺構・遺物なし
12	24－B	〃 332-1	中本新平	店舗新築	265.00	中村	4.7.20～4.8.12	『概要17』に掲載
13	67－G	川西町1丁目1086-6	内田豊喜	個人住宅	57.17	大船	4.8.5	遺構・遺物なし
14	24－B	郡家新町332-1	長寿英夫	畑地他	310.00	中村	4.8.13～4.9.5	『概要17』に掲載
15	32－A	〃 408	大阪府水道部	鉄塔建て替え	519.00	大船	4.8.24～4.9.14	須恵器・土師器
16	74－O	〃 159-6	吉田昭夫	個人住宅	73.34	〃	4.9.3	遺構・遺物なし
17	28－L，29－E，8－C他	清福寺町	高槻市長	下水道	1,638.00	〃	4.9.9	〃
18	4－B	郡家本町920	久保田芳邦	個人住宅	707.00	中村	4.10.1～4.10.23	埴輪片
19	2－E	〃 718-2,717,他	関西電力㈱	送電鉄塔立替	55.24	〃	4.10.2	遺構・遺物なし
20	48－G	川西町1丁目953-35	池端克己	個人住宅	68.76	〃	4.10.16	〃
21	65－A・E	郡家新町358-2	並川忠	駐車場造成	500.00	〃	4.11.11～4.12.1	本書に掲載
22	43－A	〃 398-2	矢田来雄	農業用倉庫	144.00	〃	4.11.13-4.11.19	遺構・遺物なし
23	26－A・E・I・M	〃 300他	高槻市長	水路改修	130.00	大船	4.11.15-4.12.17	〃
24	67－B	川西町1丁目1088-3	高井忍	個人住宅	66.91	〃	4.11.16	〃
25	57－L	〃 1丁目1092	畑中義雄・洋子	露天駐車場	150.18	〃	4.11.18-4.11.26	〃
26	65－A・E	郡家新町244-2	高槻市長	道路整備	30.39	中村	4.11.21-4.11.25	〃
27	3－P，14－D	郡家本町741	〃	水路改修	25.30	大船	4.12.1～4.12.25	弥生土器・土師器
28	15－O，25－C	郡家新町308-1,309,310	〃	農道舗装	37.20	〃	4.12.3	包含層
29	55－F・G	〃 251-1	西田邦造	個人住宅	670.00	高橋	4.12.7～5.1.30	『概要17』に掲載
30	5－I	郡家本町750-1	高槻市長	水路埋設	18.60	宮崎	4.12.9	遺構・遺物なし
31	74－A・B，84－A・B他	今城町	〃	公共下水道	369.20	〃	4.12.14	川西2号墳の周濠
32	67－B・F	川西町1丁目1088-4	仲井信秋	道路改修	68.25	横本	5.1.12	遺構・遺物なし
33	27－P	清福寺町867	高槻市長	〃	70.00	〃	5.1.18～5.2.24	〃
34	28－P	〃 829-3	馬場良三	個人住宅	94.51	大船	5.1.19	〃
35	67－O	川西町1丁目1087-22・16	田中秀治	道路改修	68.25	横本	5.2.9	〃
36	上土室遺跡	上土室1丁目34-7	高槻市長	公共下水道	360.00	森田	4.8.10～4.8.20	〃
37	氷室塚古墳	氷室町2丁目587-5	平田健司	個人住宅	834.55	大船	4.6.25～4.6.26	〃
38	郡家本町遺跡	郡家本町169-3,1567-2他	吉岡建設㈱	会社社宅建設	5.95	中村	4.4.13～4.6.6	竪穴住居跡
39	〃	〃 1000-11	積山浩明	個人住宅	137.08	大船	4.5.29	『概要17』に掲載
40	〃	〃 709他	高槻市長	道路整備	105.33	中村	4.12.14～5.1.20	遺構・遺物なし
41	〃	〃 1000-13	古川直行	個人住宅増築	167.89	〃	5.1.25	弥生土器
42	〃	〃 1002	辻本民義生	個人住宅	180.60	木曽	5.2.9～5.4.9	竪穴住居・建物
43	郡家今城遺跡	郡家新町65	矢田峯生	個人住宅	357.82	橋本	4.4.20～4.5.11	『概要17』に掲載
44	〃	〃 65	矢田峯生	倉庫建設	704.00	〃	4.4.20～4.5.11	『概要17』に掲載
45	〃	氷室町1丁目781-41,他	築山隆一	個人住宅	139.32	大船	4.5.15	『概要17』に掲載
46	〃	〃 1丁目780	吉田久雄	露天駐車場造成	661.00	〃	4.8.10	
47	〃	〃 1丁目781-45	岩吹俊雄	個人住宅	58.68	〃	4.9.11	柱穴・土師器
48	〃	今城町22-1,23-1	高谷健三	露天駐車場造成	1,524.00	高橋	4.9.6～4.10.7	『概要17』に掲載
49	〃	〃 27-1	〃	個人住宅	436.00	〃	4.9.21～4.12.3	〃
50	〃	氷室町1丁目779	藤原雅代	個人住宅	92.82	鍵ケ江	4.11.17	遺構・遺物なし
51	〃	郡家新町52	羽瀬直弘	〃	283.05	大船	5.2.8～5.2.9	〃
52	郡家車塚古墳	岡本町34-1	宮本敏夫	盛土整地工事	49.00	〃	4.3.19～4.5.7	葺石・埴輪
53	〃	〃 193-2,193-1他	阪急電鉄㈱	〃	5,351.00	〃	4.3.18～4.5.8	〃
54	宮田遺跡	富田町3丁目87-17	青木正光	個人住宅	162.52	大船	4.5.27	土壙
55	〃	〃 3丁目94-1,95	山本卯一	〃	328.50	橋本	4.7.30～4.8.12	中世の井戸・建物
56	〃	〃	〃	共同住宅建設	1,781.77	〃	4.7.30～4.8.12	〃
57	富田遺跡	富田町6丁目2830-1他	上田寿一・富子	店舗付共同住宅	229.32	森田	4.4.24	遺構・遺物なし
58	〃	〃 4丁目2960-1他	(宗)普門寺	防災施設設置	11.75	鍵ケ江	4.5.22～4.5.27	〃
59	〃	〃	〃	〃	11.75	〃	4.5.22	〃

表3－1　平成4年度調査一覧

No	遺跡名（地区）	所在地	届出者	用途	面積（㎡）	担当	調査期間	備考
60	富田遺跡	富田町6丁目2490	大西規夫	個人住宅	202.54	中村	4.12.10	遺構・遺物なし
61	教行寺	〃 6丁目地内	高槻市長	公共下水道	112.00	大船	4.9.21～4.11.12	柱穴
62	津之江南遺跡	津之江北町9～11	〃	〃	1,557.20	〃	4.11.19	遺構・遺物なし
63	大蔵司遺跡	大蔵司2丁目568-4・9	〃	下水道	8.86	〃	4.4.3	〃
64	宮之川原遺跡	宮之川原元町896-1,他	入谷能暢	個人住宅増築	57.97	高橋	4.4.3	土師器・須恵器
65	上田部遺跡	上田辺町地内	高槻市長	道路新設	2,700.00	中村	4.9.8～4.9.16	弥生土器・須恵器
66	〃	城北町1丁目930-4	〃	公共下水道	46.00	宮崎	4.11.16	弥生土器・土師器
67	〃	桃園町地内	茨木土木事務所	道路整備	3,588.00	〃	5.2.10	〃
68	高槻城跡	土橋町808-1～4	高槻市長	保育所建設	1,140.00	鍵ケ江	4.4.14～4.6.8	本書に掲載
69	〃	城内町1002-7	館林節子	個人住宅	83.73	大船	4.6.2～4.6.4	遺構・遺物なし
70	〃	出丸町989	田中義一	共同住宅建設	772.38	中村	4.6.22～4.7.1	本書に掲載
71	〃	野見町1251-17	藤原恵子	個人住宅	127.99	大船	4.8.5	外堀
72	〃	大手町1162-8	守田守	〃	747.97	中村	4.9.18～4.9.19	遺構・遺物なし
73	〃	城内町1045-6	上羽寿久子	〃	117.06	〃	4.10.29	〃
74	〃	〃 1497・1498-1	高槻市長	緑化センター	225.00	橋本	4.12.14	〃
75	〃	〃 地内	〃	〃	29.00	宮崎	5.1.7	〃
76	〃	野見町1205-2	中井一子	共同住宅建設	192.42	大船	5.1.7	〃
77	〃	城内町	御高穂都市交流協会	姉妹都市提携記念碑建立	7.20	中村	5.3.26	〃
78	慈願寺山遺跡	月見町19-1,21-7,28-5他	最泉神	社員寮建設	1,915.76	木曽	4.11.7～4.11.21	本書に掲載
79	古曽部・芝谷遺跡	古曽部町5丁目204-3他	良恵産業㈱	宅地造成	188,000.00	宮崎	3.9.1～4.7.31	『H3年度年報』掲載
80	〃	〃 5丁目214	山永興業㈱	〃	845.00	〃	4.7.6～4.7.26	〃
81	〃	〃 5丁目204-3他	日本道路公団	高速道路拡幅	1,800.00	〃	4.7.6～4.9.30	『高槻市概要XIX』
82	古曽部南遺跡	〃 1丁目・2丁目	高槻市長	下水道	416.00	大船	4.11.12	遺構・遺物なし
83	安満北遺跡	安満中の町489	石井静子	駐車場造成	1,057.00	〃	4.7.4～4.7.11	自然流路
84	〃	〃 484-1,486	吉田ツキ	共同住宅建設	888.00	〃	4.8.10～4.8.11	包含層
85	安満遺跡	高垣町229	池下あさ	仮設道路	922.00	〃	4.6.3	遺構・遺物なし
86	〃	八丁畷町12-1	京都大学	照明灯設置	5.00	〃	4.6.9	包含層
87	〃	高垣町247-1,2,3	丸大食品㈱	社員寮建設	2,042.66	橋本	4.8.18～4.12.9	本書に掲載
88	〃	八丁畷町地先	関西電力㈱	地中電線埋設	96.50	大船	4.9.11	遺構・遺物なし
89	〃	安満東の町1-10他	高槻市長	公共下水道	3,143.00	中村	4.9.18	〃
90	〃	高垣町288-4	藤岡眞宣	個人住宅	56.12	橋本	4.11.5～4.12.15	本書に掲載
91	〃	〃 288-5,454-5	藤本一郎	道路整備	26.57	〃	4.11.5～4.12.15	〃
92	〃	〃 288-2,291-2	㈱エンジニア・サカワ	事務所兼住宅	178.25	〃	4.11.5～4.12.15	〃
93	〃	〃 288-1,291-1他	〃	駐車場造成	623.56	〃	4.11.5～4.12.15	〃
94	〃	〃 288-3	山口恵一	個人住宅	66.12	〃	4.11.5～4.12.15	〃
95	〃	〃 32	橋長喜一郎	駐車場造成	681.00	中村	5.1.25～5.2.6	〃
96	〃	〃 30-1	橋長テル・妙子	〃	239.00	〃	5.1.25～5.1.30	〃
97	〃	八丁畷町1-22	関西電力㈱	変圧器設置	300.00	大船	5.2.1～5.2.5	遺構・遺物なし
98	〃	高垣町1-11	松山光夫	個人住宅	495.00	中村	5.2.5～5.2.22	〃
99	〃	八丁畷町226-2	京都大学	農場整備	4,000.00	大船	5.2.15	〃
100	天川遺跡	辻子1丁目	高槻市長	道路整備	105.60	〃	4.11.24	〃
101	安満山古墳群	大字梶原40他	大興院	墓地造成	103,000.00	鍵ケ江	4.11.19	〃
102	梶原寺跡	梶原1丁目	富森武雄	個人住宅増築	439.16	〃	4.7.3	埋土槽

表3－2　平成4年度調査一覧

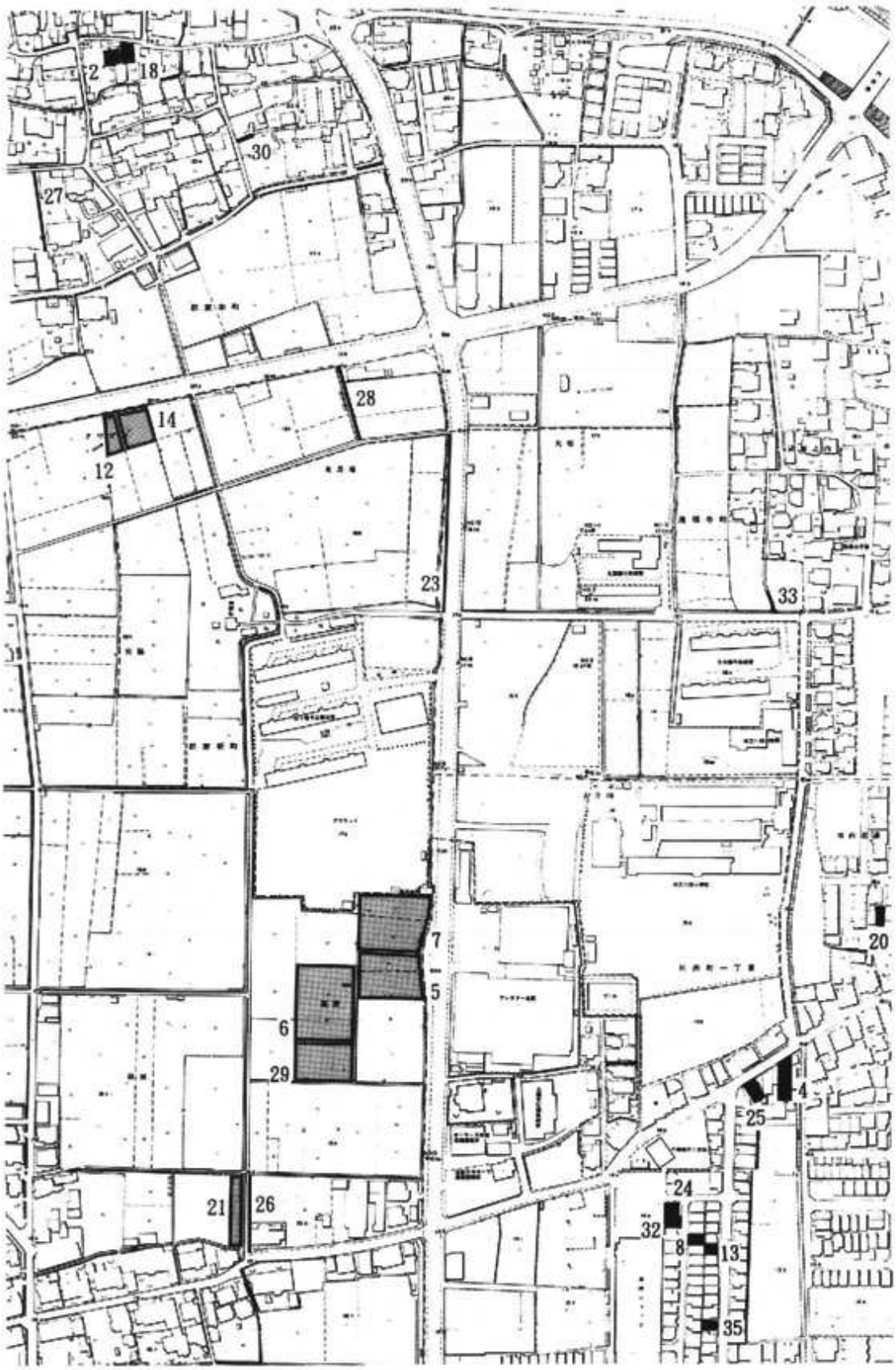


図1　埋蔵文化財調査位置図（嶋上郡衙跡）

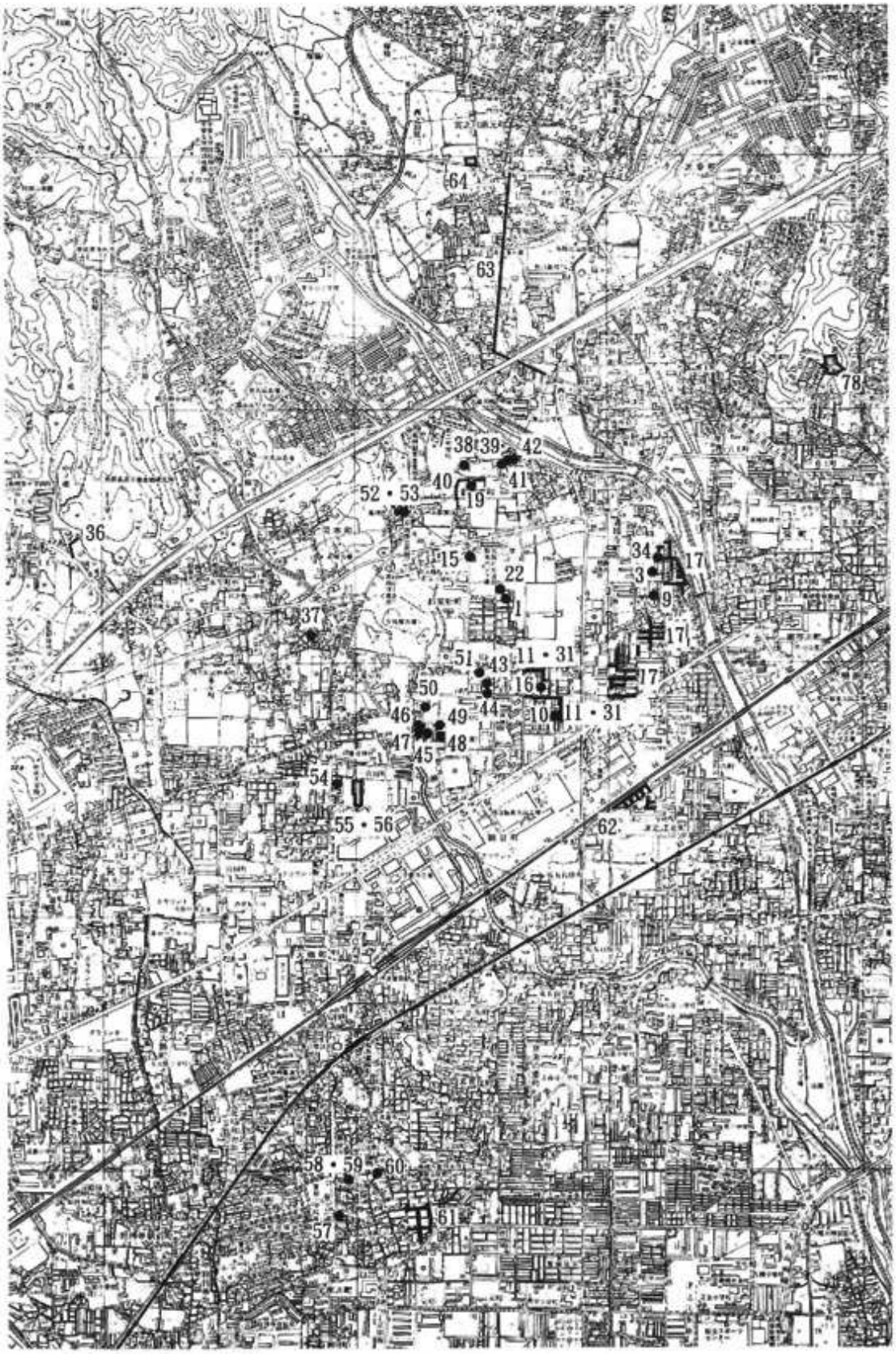


図2　埋蔵文化財調査位置図

81
79・80
101
102
82
84
89
94
85
83
92・93
91
89
90
87
99
96
95
97
86
86
98
88
65
66
72
67
76
71
77
75
74
69
70
73
68
100

嶋上郡衙跡（65－A・E地区）の調査

中 村 剛 彰

嶋上郡衙跡は、芥川中流域西岸の北西から南東に緩やかに傾斜する低位段丘上に位置する。周辺地域では縄文時代～中世までの遺構・遺物が数多く分布しており、奈良・平安時代には嶋上郡衙が置かれていた。また郡衙の南寄りには東西に山陽道が貫き、郡衙の北方域においては集落が広がっている。郡衙と関連のある同時期の遺跡としては、西方へ約1kmに郡家今城遺跡、北西の丘陵上に岡本山古墓群などがある。

図1　調査位置図

今回報告する65－A・E地区は郡衙域の南側、山陽道が通過していると思われる地点にあたり、道路に関連する遺構の存在が想定された。

今回の調査で検出した遺構は溝2条、近代の水路跡1条である。遺構の概略は以下の通りである（図版第5、図2）。なお、近代の水路の記述は省略する。

溝1は調査区の南よりで検出した。幅4m、深さ0.7mを測る。東西に延び、調査区外へとつづいている。埋土は粘土、シルト、砂が交互に堆積し、流路であった可能性が高い。現在調査区の南側にある水路の前身と思われる。なお埋土中から遺物は出土しなかった。

溝2は溝1の下から検出した。幅2.5m、深さ0.4mを図る。溝1と同様、東西に延び、調査区外へとつづいている。埋土は暗灰色粘土である。溝の中からは拳大の石が数多くみとめられたほか、遺物は土師器・須恵器の細片などが出土している。また溝2の西側からは、暗灰色粘土と地山粘土のブロックに瓦・木材・礫などを混ぜ込んだ整地土を検出した。これについては、後述する山陽道の路面整地土と同じものと思われる。

山陽道に関して今回の調査区の東約150m地点で、道路の側溝及び路面整地土を検

出しており、9世紀中頃～10世紀にかけての山陽道の変遷が報告されている。（「山陽道跡の調査」『高槻市文化財年報』1993年）。この調査によれば、道路面は修築の度に微妙に位置が移動していることが確かめられている。今回検出した溝の北側には遺構が認められず、もしこれが山陽道の側溝とするならば最も新しい時期に整備された可能性が考えられる。

今回検出した遺構については時期の決定に問題が残るが、路面整地土などから山陽道跡と考えてよいと思われ、郡衙周辺域における道路の走行を探る上で重要な追加資料になる。

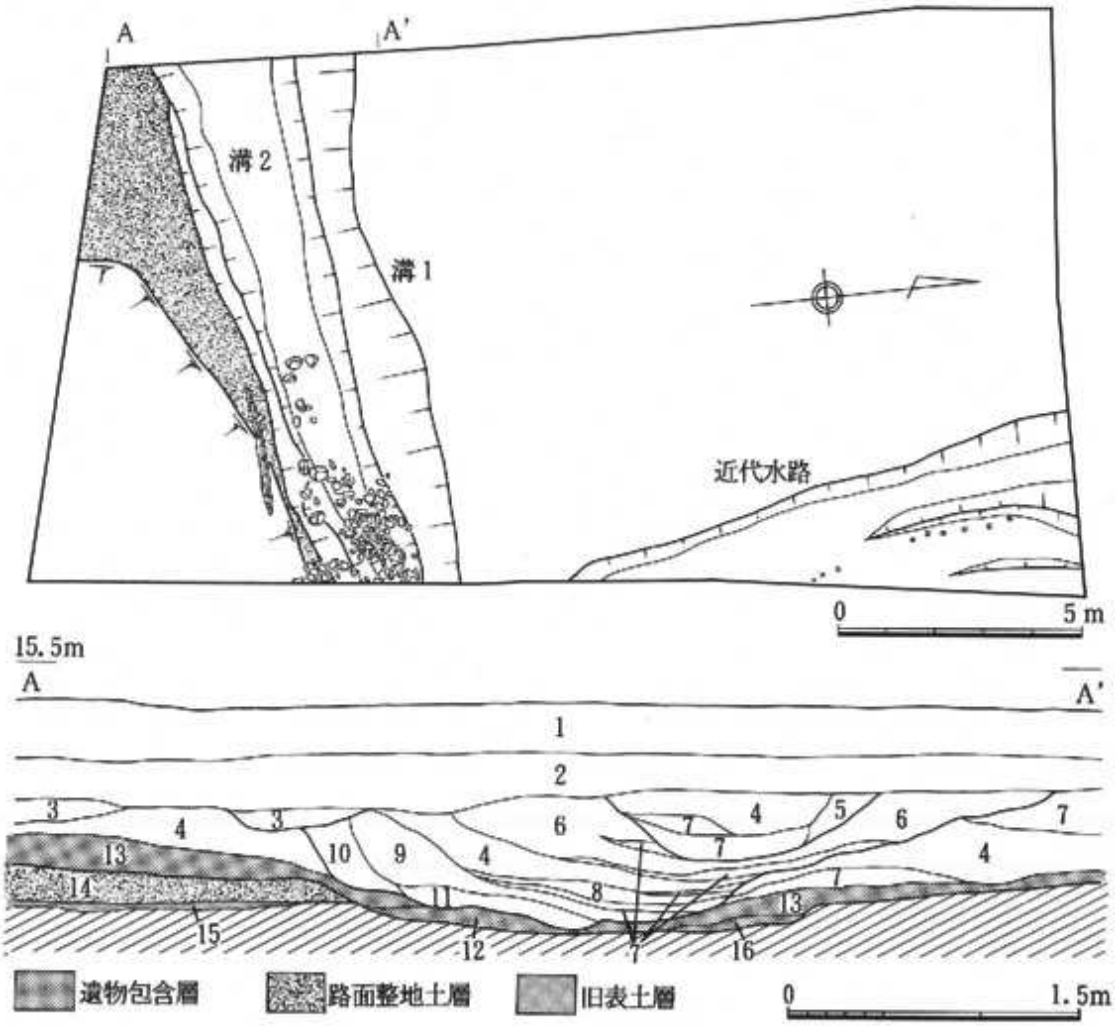


図2　遺構平面図・断面図

郡家本町遺跡の調査

中村剛彰

郡家本町遺跡は南平台丘陵の南端に位置する弥生時代から中世にかけての複合遺跡である。周辺には北西部に位置する弁天山古墳群をはじめ、南側の平野部にある鳴上郡衙跡など、数多くの遺跡が分布している。これまでの調査で弥生時代後期の住居跡群のほか、芥川廃寺に瓦を供給した窯、鳴上郡衙との関連が指摘されている大規模建物群などが検出されている。今回報告するのは平成4年に共同住宅が計画されたことから、事前に調査したものである。

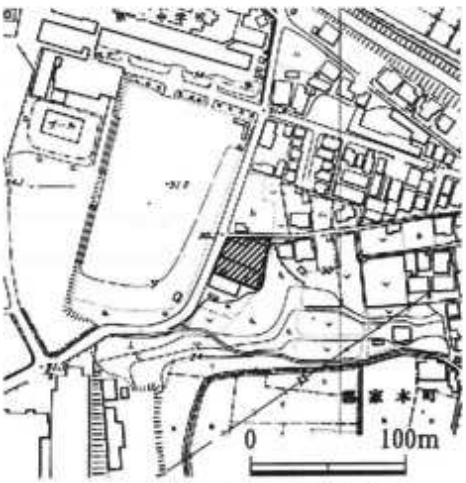


図1　郡家本町遺跡調査位置図

調査区の標高は西端で31.2m、東端は30.5mであり、西から東へと緩やかに傾斜している。東端からは斜面地となっており、平野部に至る。地山のほとんどは暗黄色土で拳大の礫を多く含んでいるが、東南部にかけては明黄灰色となっている。

今回の調査で検出した遺構は竪穴住居1棟のほかに土壙、柱穴などがある（図版第6・7、図2）。遺物は各遺構・包含層から弥生土器、須恵器、鉄鏃片などが出土しているが、遺構に伴うものはみられなかった。

住居1は調査区の中央やや南寄りで検出した。周壁溝は一辺約3.2mを測る。直径は約7.3mを図り、中央部に土壙と主柱穴をもつ多角形住居跡である。遺構の東半分は削平されている。平面形は一辺の長さから復元するならば、おそらく不当な7角形を呈すると思われるが、南半部は周壁溝が弧状を呈している。住居跡の埋土中からは古墳時代前期（布留式期）の土器片が数多く出土し、住居が廃棄されたあとの窪地に土器が投棄されたものと考えられる。また調査区の東南隅にも窪地が検出され、同じく投棄された古墳時代の土器片が出土しており、住居1の周壁溝と良く似た屈曲する溝が検出されたことから一辺約4.4m、直径約11.6mの8角形を呈する大型の住居跡になる可能性がある。ただし遺構は全体的に削平をうけており、また検出した部分が竪穴の半分に満たないことから断定するにはいたらない。その他の遺構としては柱穴

とみられるものがあるが、建物遺構としてまとまるものはないようである。土壙については埋土中より弥生土器、土師器、須恵器の細片などが出土している。

今回竪穴住居跡を検出したが、郡家本町遺跡においてほぼ同時期と思われる遺構としては、平成4年に検出した弥生時代後期の竪穴住居1棟（「郡家本町遺跡」『嶋上遺跡群17』　1993年）のほか、平成5年に調査した同東隣接地区においても同時期の竪穴住居7棟が重複した状態で検出されている。これらはいずれも方形の住居であり、今回検出した住居跡はこれまで知られていたものとは若干様相を異にするものである。

またこれまでに高槻市内で検出した多角形住居は芥川遺跡の2例にとどまり、その稀少性ともあいまって貴重な資料になる。

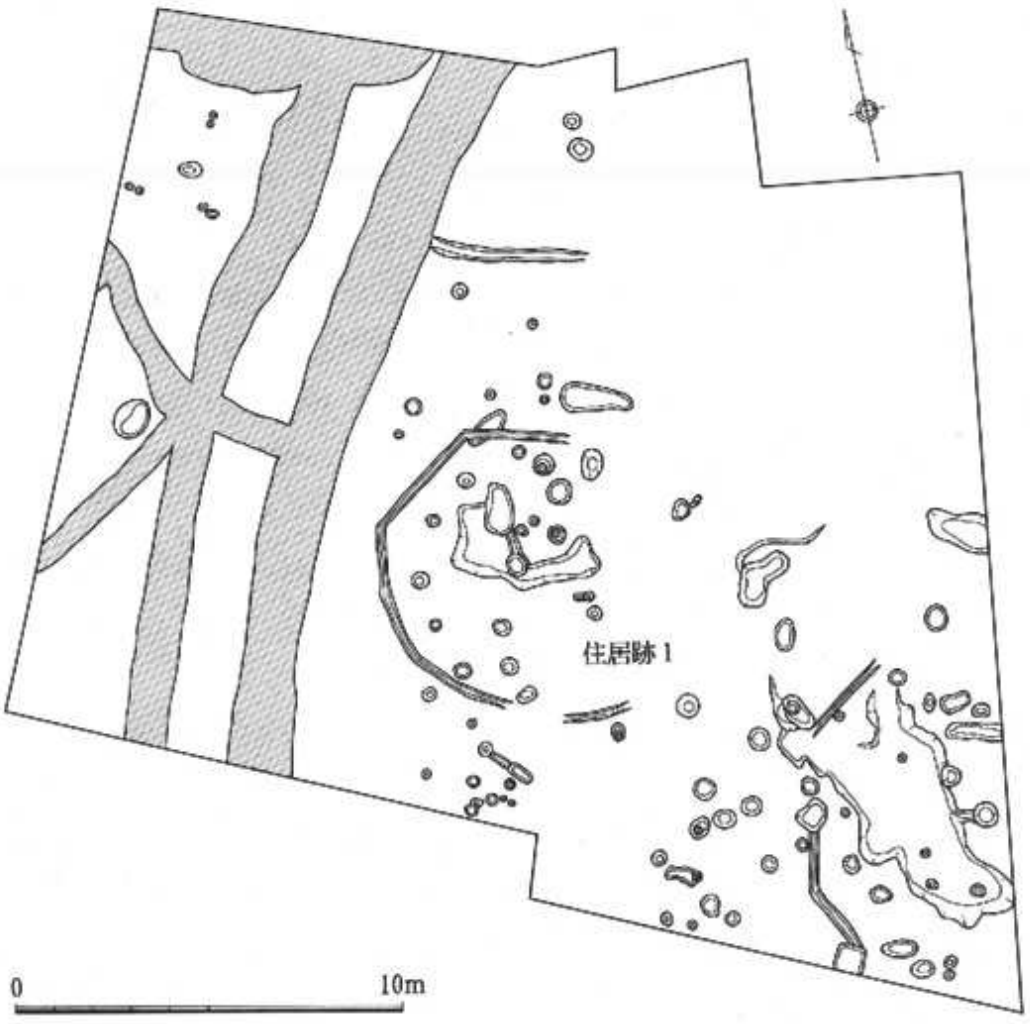


図2　郡家本町遺跡平面図

高槻城外堀跡の調査

中村剛彰

高槻城は市の中央部を流れる芥川が形成した扇状地の末端に位置し、前身は和田惟政入城時の永禄年間まで遡ることができる。その後、天正年間に高山右近が入城、改修を加えた後、元和三年に江戸幕府による大改修が行われている。さらに寛永年間には出丸を西側に拡張するなど幾度も改修を受けており、現在絵図などで見ることのできる高槻城の姿は寛永年間以降のものである。ただし城本体は明治に入ってから破却され、現在では地名・道路などの町割りで全体像を窺うことができるのみである。

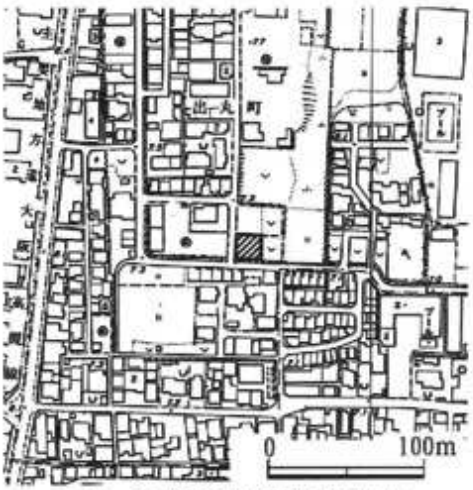


図1　高槻城外堀跡調査位置図

一方、これまで実施した発掘調査では、1975年の本丸跡の調査(*1)により本丸石垣の基礎部分を検出したのをはじめ、1985年には桝形門跡・内堀などが検出されている(*2)。1986年・1987年にはそれぞれ外堀・内堀の他、和田惟政・高山右近時代の堀などを検出している(*3)。また1990年の三の丸の調査では外堀・内堀や中世の堀などを検出する(*4)など、実態が少しずつ明らかになってきている。

今回、共同住宅建設に先立つ事前調査を実施した地点は、寛永年間に拡張された出丸南側の堀にあたる。当該地は、「高槻城絵図」によれば、出丸から城外に通じる土橋のすぐ東側に位置している。

今回の調査区は堀跡というところから、調査の主眼を堀底の検出と埋土の堆積状況の確認にあてることにした。調査は、届出地内に7.7×12.2mの調査区を設定し、重機で段堀りしておこなった（図版第8、図2）。基本層序は、盛土（1.2m)、暗茶褐色粘土[旧耕土](0.8m)、青灰色粘土[埋土](0.4m)、暗茶褐色砂礫[堆積土](0.16m)、明茶色粘土[堆積土]（1m)、明茶灰色粘土混シルト[流入土](0.16m)、青灰色粘土（南半)・青灰色砂礫(北半)[地山]である。埋土の状況から、流入土下面が外堀底にあたると判断された。堀底の標高は、約4mを測る。調査坑南北隅で南北に並ぶ杭2本を見いだしたが、時期性格ともに明確でない。その他、遺物は全く検出されなかった。

今回検出した範囲で確かめられた堀底の標高は約４ｍで、現地表面からはおよそ3.2mの深さになる。かつての高槻城南堀端の高さは、ほぼ現在の道路敷の高さとあまり大差のないことが隣接する調査区などで確かめられているので、この数値から『町間入高槻絵図』に記載されている当該部での堀の水面下の深さ壱間半（約2.95m）を差し引けば、南堀端の水面からの高さはほぼ0.3m前後と推定される。ただし今回の調査で検出した堀は、幅拾間(約19.7m)の数値からすると、その南半の一部とみられ、中央部での堀底はいま少し深かったと考えられる。したがって堀端の高さも実際には少なくとも0.5mはあったとおもわれる。一方、三の丸北東部の調査では、堀底は標高4.0mを測り、現在表面からは約５ｍの深さになり、同じく『町間入高槻絵図』に記された堀の深さに相当するものとなっていた(*3)。このときの調査では外堀の水面高が護岸の杭列の検出によって、ほぼ標高6.8mと推定されたが、この高さは堀端高から逆算される水面高にも見合うものである。

*1『摂津高槻城』－本丸跡発掘調査報告書－　高槻市教育委員会　1975年

*2『高槻城跡』高槻市文化財年報　1985年

*3『高槻城三の丸跡発掘調査概要報告書』高槻城遺跡調査会　1987年

*4『高槻城三の丸跡』高槻市文化財年報　1991年

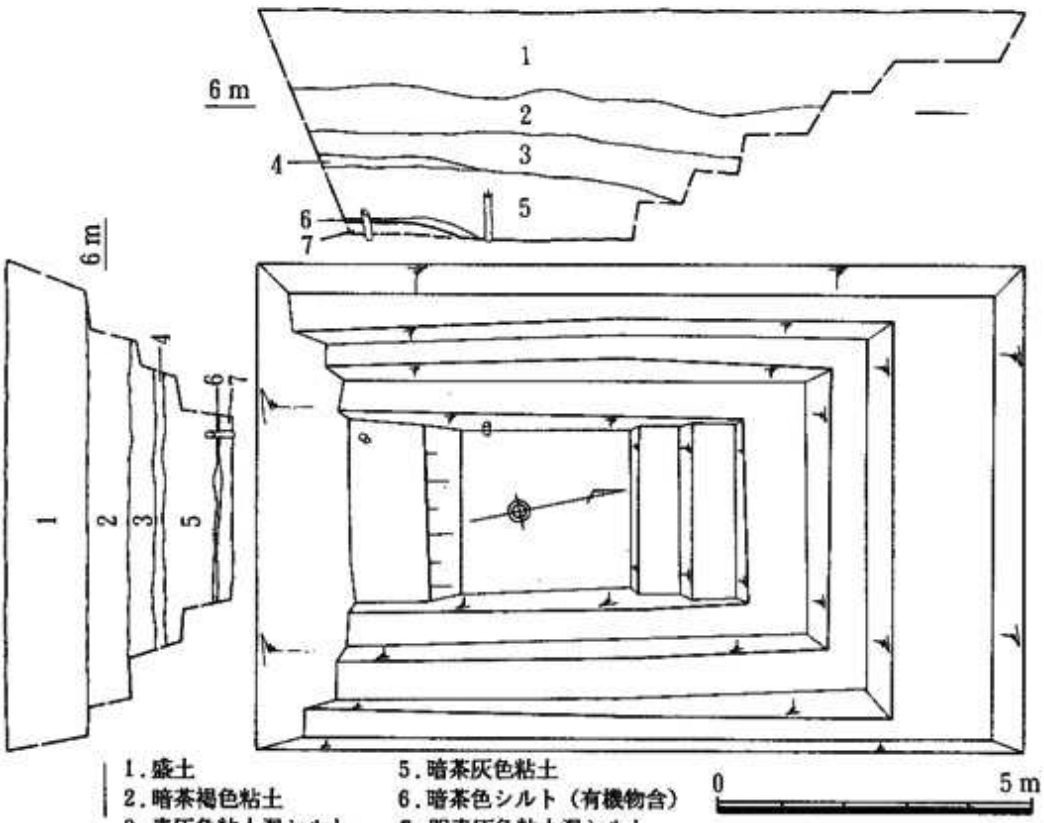


図２　高槻城外堀跡　平面図・断面図

高槻城舟入川跡の調査

鐘ケ江　一　朗

調査地は土橋町808－1～4にあたり、小字名は舟入川と称する。当該地は高槻城南大手門外の西側に位置し、北を外堀端道路に、西を水路に限られている。現状は水田である。保育所建設工事が計画されたため、事前に発掘調査を実施した。

図1　高槻城舟入川跡調査位置図

基本層序は、耕土（0.2m）、整地土（0.2m）、灰褐色粘土〈地山〉となり、遺構面は標高6.2mをはかる。

遺構は、調査区北側～西側で復元幅5m、深さ2mの大溝1条と、東南部で面積1.5㎡～4.5㎡の矩形を呈する土坑5基、井戸4基、小溝3条を検出した。

大溝は、調査区北辺中央部にはじまり、北西隅で南に折れて調査区外へつづく。東西溝部分では、溝底をさらに0.7m掘り下げた落ち込みを、約5mの間隔をおいて2か所検出した。同溝の東西隅では、溝底から1.3m上方で、幅12cmの杉板を4枚組み合わせた木樋を検出している。先端はやや下がり気味に溝内へ0.5m突き出し、他端は調査区外（外堀側）へのびる。

大溝の堆積土は、黒褐色～黒青色泥土でおおむね3層に分かれる。上層に瓦片と多量の木屑・木片を含み、中層下位に木製品・陶磁器・瓦類等が目立つ。

土坑は、もっとも西側に位置する長楕円形のひとつをのぞき、東西幅1.5～3mほどの矩形を呈する。これらは長辺を南北方向に切り合うことなく整然とならぶ。深さは0.3～1mとまちまちだが、壁はほぼ垂直に掘り下げられ、上層は掘削土で埋め戻している点が共通している。相互の前後関係は明確でない。

遺物としては、長楕円形の土坑から漆椀・柄杓・曲物底板など主として木製品が出土している。矩形土坑からは漆椀・漆鉢・箸・木札・曲物蓋・包丁柄・下駄・銅匙・キセル・土師器・陶磁器類・焼塩壺、食用貝の殻（アカガイ・アワビ・カキ・サザエ・ハマグリ・オオタニシ・ヤマトシジミなど）、獣骨（ウシ？・小形犬）、種（ウメ・

ウリ・モモ）などがある。このうち木札類は、短冊形でやや厚手のものと、薄手の長方板の下端を尖らせたものがあり、多くは墨書の痕跡がみられた。その他、○のなかに「永」とある焼印を押した正保二年銘の鑑札、「□漬」の墨書のある漬物容器とみられる曲物蓋の残片などがある。現在保存処理中であり、おって検討したい。

井戸は、大溝先端部で2基、土坑群北側で1基検出したほか、長楕円形土坑を切って井戸状の遺構を1基検出した。大溝寄りのものは、円形掘形・井戸桶枠（2段遺存)、この掘形を切ってつくられた、矩形掘形の掘り抜き井戸－いわゆる上総掘り、底板のみ遺存－である。いずれも出土遺物はない。土坑群北側の1基は円形掘形の上総掘りで、井戸桶1段分が遺存しており、底板に接して釵を2点検出した。西側の井戸状遺構は、不整円形を呈する掘形内に方形に縦板を並べた痕跡を検出したが、深さ0.3mと浅く水溜め程度のものかもしれない。

3条の溝は、土坑群西側でいずれも南北方向に平行して検出した。幅0.5m、深さ0.15mと浅い。西端の1条は、さきの井戸状遺構に接続している。

今回、高槻城南部としては初めて城下町地域の調査をおこなった。そこで現在知られている高槻城絵図－①高槻城絵図（17世紀中頃・仏日寺蔵)、②町間入高槻絵図（18世紀前半・同寺蔵)、③中西家旧蔵文書高槻城下図（19世紀中頃・個人蔵）－を検討すると、この間屋敷割りなどはほとんど変化せず、今回調査区は東西2つの区画にまたがっていること、そして東の区画は拝領屋敷として使用されている一方、西の区画は空地または水路－具体的には、①では空地、②では水路、③では幅が狭まるものの「舟入川」と注記のある水路－の表現がなされていることが知られる。したがって今回検出した大溝は、この舟入川に対応すると考えられた。同様に土坑・井戸は東側の武家屋敷に伴うとみられる。これらの時期的な関係は今後の課題だが、土坑では、食生活の一端を示す資料が多量に出土しており興味深い。

さて、南大手門西側には舟入と称する外堀の拡張部があり、ここでいったん郭がくびれて、西へ蔵屋敷がつづいている。おそらくこの舟入は城外と蔵屋敷の物資運搬のため設けられた施設であろう。これからすれば、外堀と道をへだてて対面する位置にある水路－舟入川－は、検出した規模からして城内蔵屋敷への水運のため掘削されたものとみられる。これまで高槻城関係の調査では、近世城郭の構造と中世高槻城の解明に主眼をおいてきたなか、今回の調査は城下の調査例として、また現存する城絵図との突合によって遺構の性格が把握された例として重要である。

安満遺跡の調査

橋本久和
中村剛彰

1．調査経過

1928年に発見された安満遺跡は、京都大学農場を中心にその範囲は東西約1.5km、南北約0.5kmにおよぶ。1968年には集落を取り囲む濠が検出され、弥生時代集落を解明するうえで重要な資料を提供した。1993年4月には京都大学農場北側一帯が国史跡に指定され、永く保存されることになった。しかし、この地域は市中心部に近く、交通の便にもめぐまれているため早くから宅地開発が活発である。とくに1970年代後半から1980年代にかけて遺跡東部の高垣町では開発に先立つ発掘調査が継続し、桧尾川沿いの地域にも弥生時代集落のひろがっていることが知られるようになった。とくに、弥生時代中期の方形周溝墓が数十基検出されているのをはじめ、後期の住居跡や井戸、さらに古墳時代の遺構もあり、弥生時代集落と墓域の位置関係・弥生時代から古墳時代への集落の変遷を具体的に知ることができる。また、古代・中世の建物群や井戸の発見も多く、弥生時代から中世まで連綿として集落が営まれ、高槻市東部の中心的な集落であったことが認識されている。

図1　安満遺跡調査位置図

1992年度では遺跡東部の高垣町248番地他において、食品会社独身寮の建設工事・個人住宅建設工事・駐車場建設工事が計画されたため、事前に発掘調査を実施した。調査地は遺跡東部の近接した地域であり、A区・B区・C区・D区としてまとめて概要を報告する（図1・図版第10～第17）。

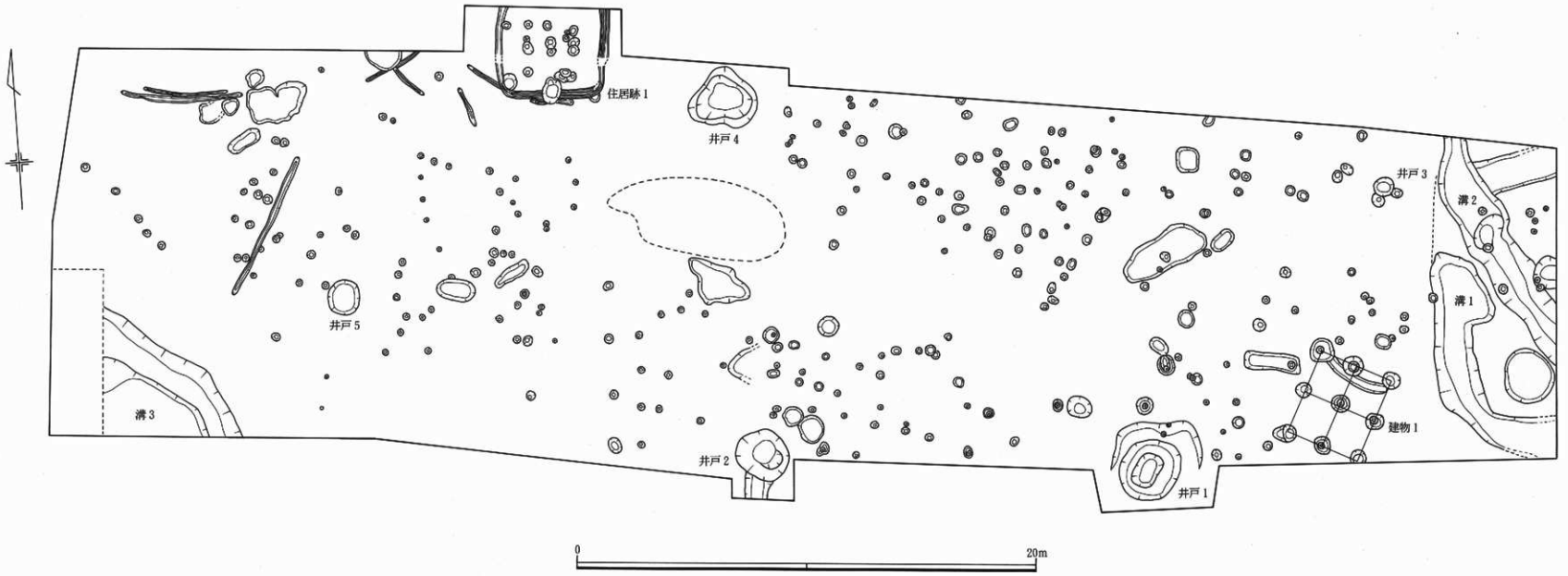


図2　A区遺構平面図

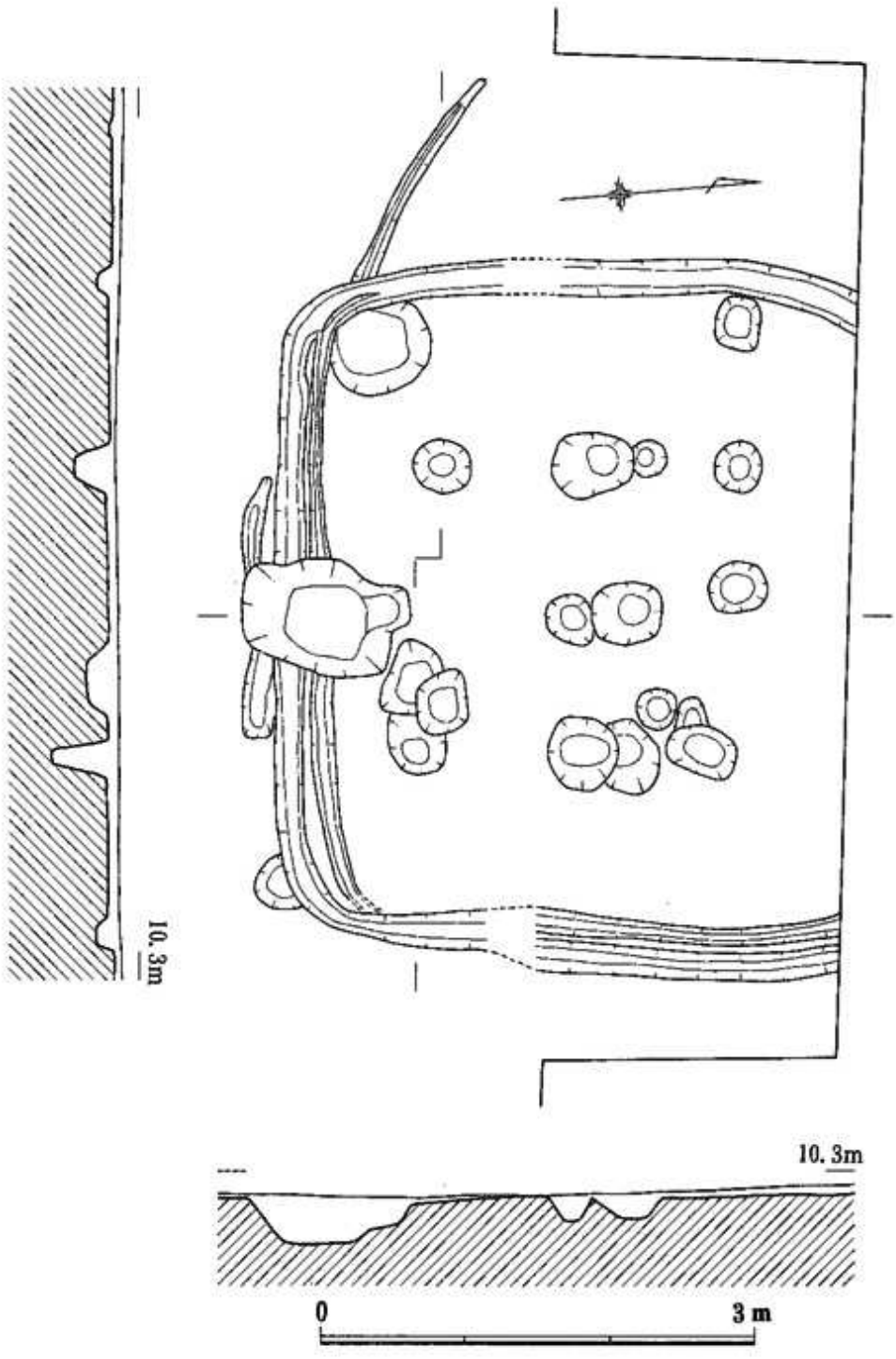


図3　A区住居跡1

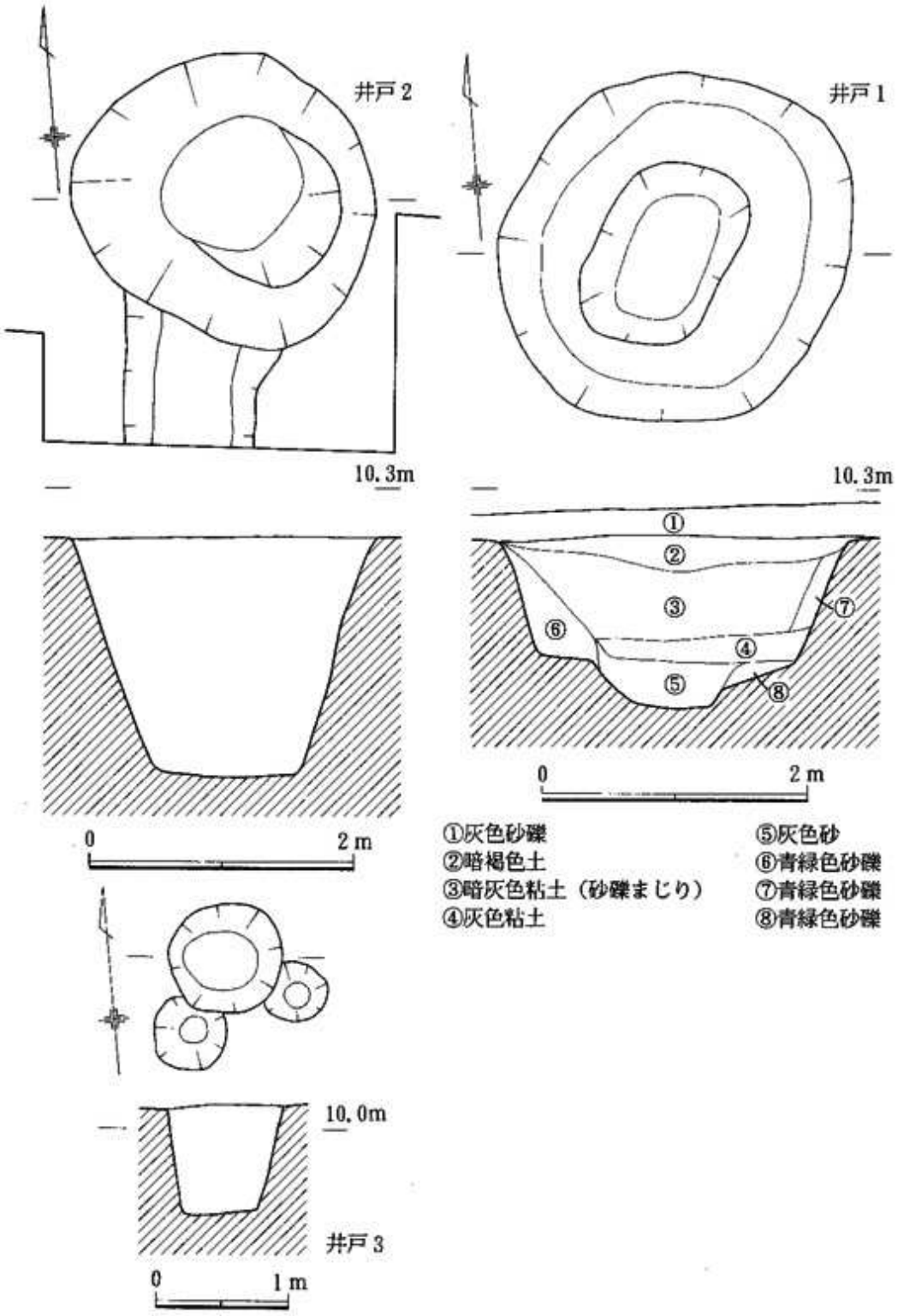

井戸2
井戸1
10.3m
10.3m
①
②
③
④
⑤
⑥
⑦
⑧
0
2 m
0
2 m
①灰色砂礫
②暗褐色土
③暗灰色粘土（砂礫まじり）
④灰色粘土
⑤灰色砂
⑥青緑色砂礫
⑦青緑色砂礫
⑧青緑色砂礫
10.0m
井戸3
0
1 m

図4　A区井戸1・2・3

2．A区の調査

調査区は幅約20m・長さ約65mで、基本的な層序を調査区東北部の壁面で観察すると、盛土（0.5m）、耕土（0.2m）、床土（0.2m）、暗褐色土（0.5m）、砂礫の混じる暗褐色土（0.2～0.5m）、黄灰色砂質土（地山）である。砂礫の混じる暗褐色土はとくに調査区東部に厚く堆積し、上面で奈良時代の建物が検出された。また、この層を掘削する平安時代の遺構が部分的に観察できるが、まとまったものを検出することはできなかった。ただ調査区西部で南北朝期とみられる井戸が検出されている。黄灰色砂質土上面では弥生時代の竪穴式住居・井戸・溝、古墳時代の溝が検出された（図2）。なお、地山面は標高約11mである。

弥生時代の住居跡1は東西約4.5m、南北4m以上の方形竪穴住居で、幅約0.2mの周壁下の溝がめぐる（図3）。東辺は調査区の排水溝のため一部不鮮明となっているが、南・東辺の溝は二重となり、住居を拡張していることがわかる。内部に10個あまりの柱穴が検出されたが、四隅のものがしっかりとした掘形で柱間もそれぞれ2mを測り、この住居の主柱とみられる。南辺の中央部に幅0.7m・長さ1.1mの方形土壙が検出された。深さ0.35mを測り、内部から遺物類は出土しなかった。

弥生時代の井戸は調査区の各所に分散して検出された（図4・5）。いずれも素掘りで井戸枠は検出されなかった。井戸1は長さ2.8m、幅2.5mの長円形で深さ1.1mを測り、底部がさらに長さ1.5m、幅1m、深さ0.2m掘り下げられている。井戸2は直径約2.3m、深さ約1.8mを測る円形である。井戸3は直径約0.9m、深さ0.8mの小形の円形井戸である。井戸4は長さ2.6m、幅約2.2m、深さ1.3mの不整形である。

調査区東端で幅約2m、深さ0.2～0.3mの溝1が検出された。この溝は北端が途切れているが、溝2に切られる北東隅の同規模の溝につづくものとみられ、東南隅では屈折している。溝の内側で約10mを測り、方形周溝墓の可能性がある。溝2は幅約2m、深さ0.2mで南北方向に真っすぐつづいている。溝3は調査区西南の隅で検出され、建物基礎のための肩部の一部しか調査できなかったが、深さ約1mで西北から南東方向に真っすぐ堀削されている。埋土上部から須恵器壺が出土しているため古墳時代後期とみられる。建物1の柱穴は調査区東部の厚い砂礫層を掘削し、東西2間（柱間1.6m）×南北2間（柱間1.9m）で、中央に束柱をもつ倉庫である。これまでの調査例からみて奈良時代とみられる。方向はN－26°－Eである。

井戸5は円形で直径約1.4m、底部で直径約1.2m、深さ1.7mを測る。底部中央に直径約0.4mの曲物を据えた痕跡と石積がわずかに残っていた。埋土上部から14世紀

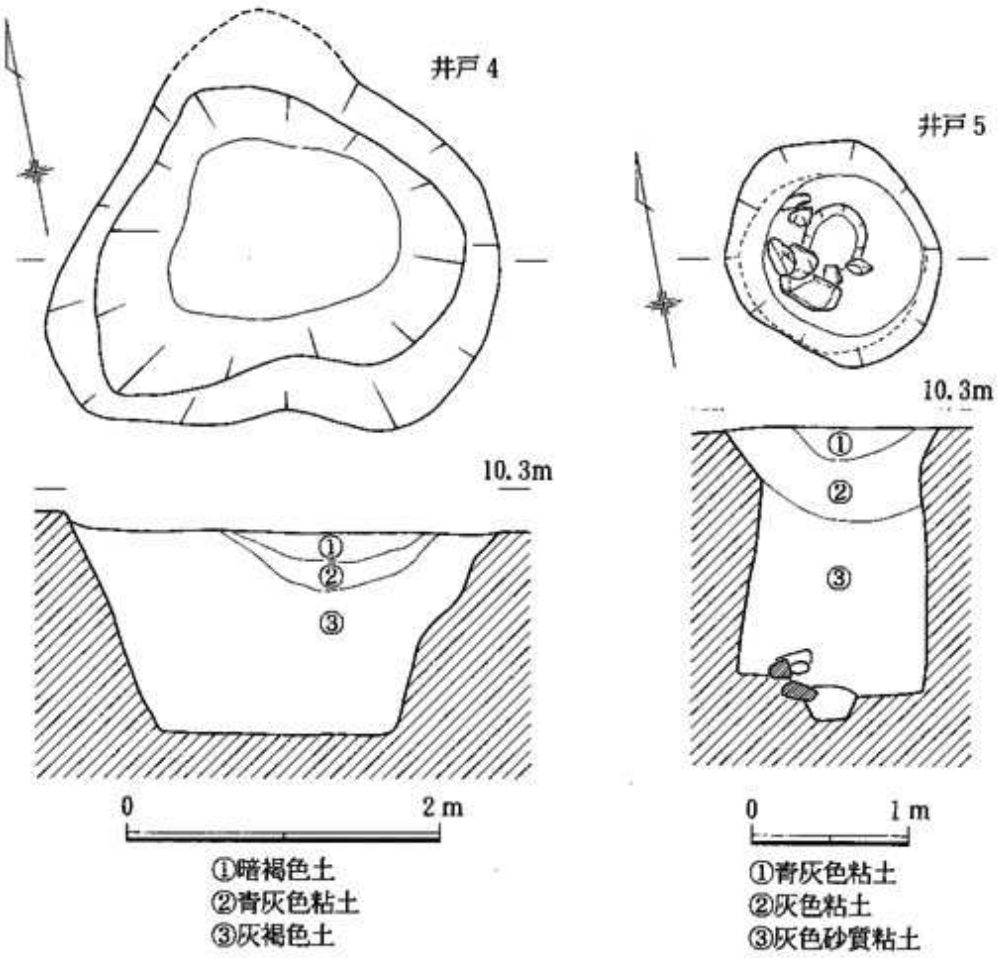


図5　A区井戸4・5

頃とみられる土器が出土している。

この他に地山面に小規模な柱穴や溝が多数検出された。いずれも弥生時代後期とみられるが、建物としてまとめるまでにはいたらなかった。また、出土した土器の多くは未整理であるが、弥生時代後期前半を中心とするものである。

3．B区の調査

基本的な層序を調査区の南壁でみると、耕土（0.2m）、灰褐色土（0.2～0.3m）、灰色粘土（0.1m）、黄褐色砂礫（地山）である。地山面の標高は約11.7mである。調査区の東端部で古墳時代の井戸と鎌倉・南北朝期の井戸、溝が検出された（図6・7）。

井戸1は直径1.5m、深さ1.4mの円形で、埋土上部から二重口縁壺などが出土した。

井戸２もほぼ円形で、井戸１の北側に近接している。直径約1.6m、短径1.4m、深さ1.9mで底部付近から甕・壺・鉢が出土した。いずれも素掘りである。

井戸３は直径1.4m、深さ1.1mの円形井戸で埋土上部から三脚付の瓦質釜が出土した。溝１は南北方向にまっすぐ掘削され、幅１m、深さ0.3mを測る。井戸３と溝１の埋土は灰色粘土であり、同時期に存在したものとみられる。周囲に小柱穴などがみられるが、これより調査区西部で遺構・遺物はまったく検出されなかった。

井戸１からは二重口縁壺・甕・小型丸底壺が出土している。二重口縁壺（図８－４）は球形の体部に直立する短い頸部が付き、大きく口縁が開く。口径20cm・胴径27.5cm・器高30.6cmを測る。砂粒を多く含む淡褐色の胎土で器壁は厚い。表面の風化が著しいため調整は不明である。底部近くに小孔をあけている。甕（５）は最大胴径がやや上位にあり、口縁端部内側がやや肥厚した「く」の字状口縁が付く。淡褐色の胎土で、口縁屈曲部のやや下位から器壁内側をヘラ削りし体部を薄くしている。外面は体部上半に横方向のハケ目を、下半は底部から縦方向のハケ目を施している。とくに肩部付近にはっきりと確認される。小型丸底壺（６）は小さい体部に大きく外反する口縁が付く。口径11.6cm・器高7.5cm・胴径7.4cmである。胎土が赤褐色の精製品で、底部から胴部にかけて軽くヘラ削りで調製されている。

井戸２からは甕・直口壺・鉢が出土している。甕（図８－１）はやや長手の球形体

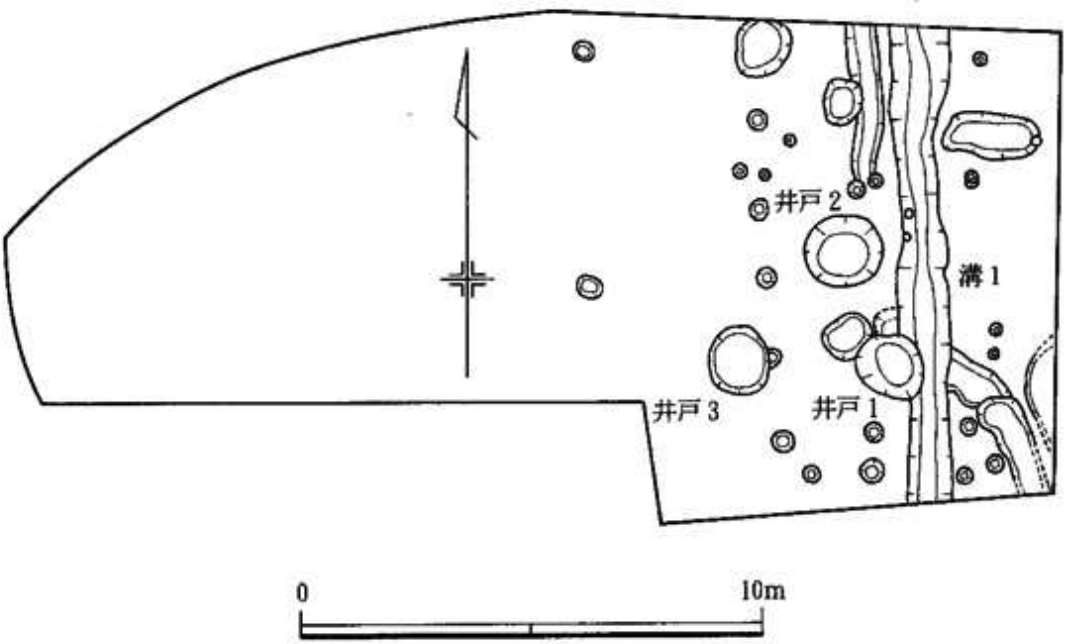


図６　B区遺構平面図

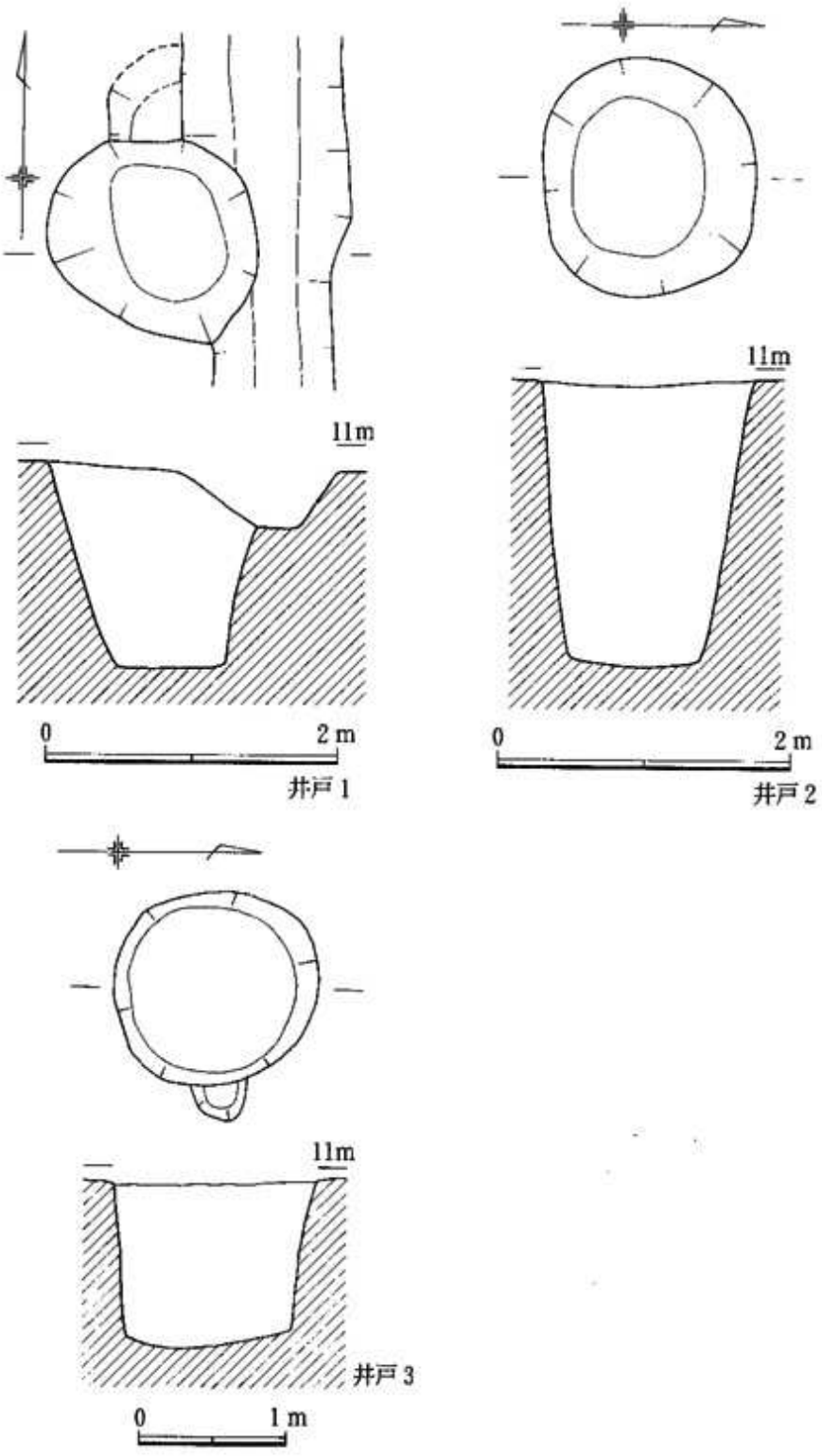


図 7　B区井戸実測図

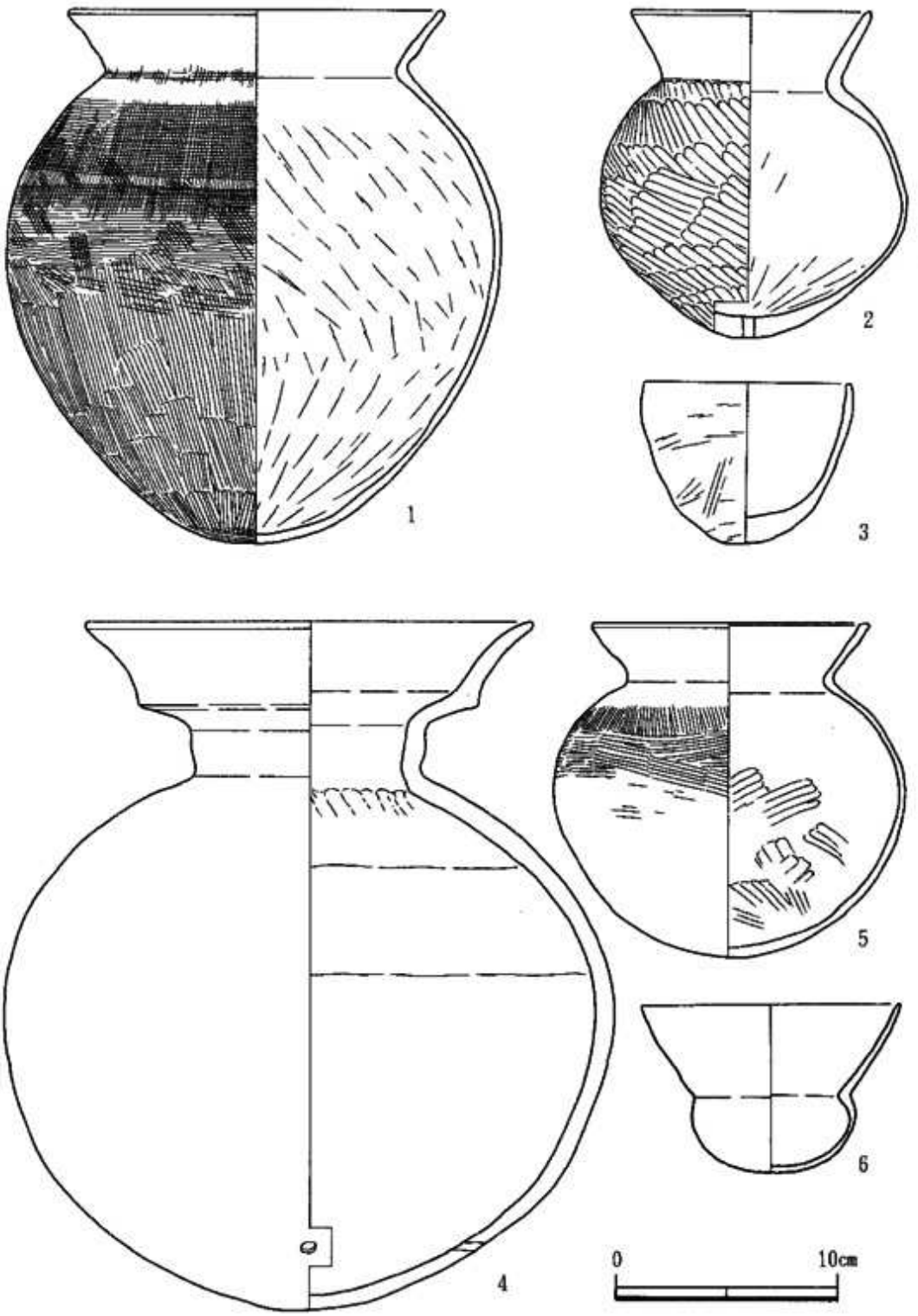


図8　B区井戸1・井戸2出土土器　井戸1（4～6）、井戸2（1～3）

部に「く」の字状に端部のやや肥厚する口縁が付き、体部下半は尖底状である。口径16.8cm・胴径22cm・器高23.7cmを測る。淡褐色の胎土で、口縁屈曲部のやや下方から体部内面をていねいにヘラ削りし、器壁は薄い。外面は底部から放射状にハメ目が施され、体部上半は横方向である。外面全体に煤が付着する。直口壺（2）は最大胴径が下位にあり、短い頸部が付く。口径10.8 cm・胴径13.7 cm・器高14.6cmである。黄灰色の胎土で体部外面には幅広のヘラ磨きがみられ、煤が付着している。わずかな平底で、その中央部に穴をあけている。鉢（3）は口縁部に荒いタタキ目がみられ、そのあとをなでて仕上げている。淡褐色で口径9.4cm・器高7.2cmを測る。

井戸1・井戸2から出土した土器類のうち1や5の甕は外面全体がハケ目で覆われて、4の二重口縁壺には装飾がない。また、6の小型丸底壺の口縁部の広がりに比べて体部が小さいことが特徴で、これらは庄内式新相から布留式の特徴とされる。庄内系甕の特徴を良く表している1を詳しくみると、上ふくらみの器形を呈し、1972年に調査された東－1区井戸7出土の庄内系甕に比べて古相とみられ、米田編年の庄内式期Ⅲに相当する。（米田敏幸「土師器の編年・1　近畿」『古墳時代の研究』6）

4．C区・D区の調査

A区・B区の約250m南側に位置し、基本的な層序は耕土（0.2m）、床土（0.2m）、

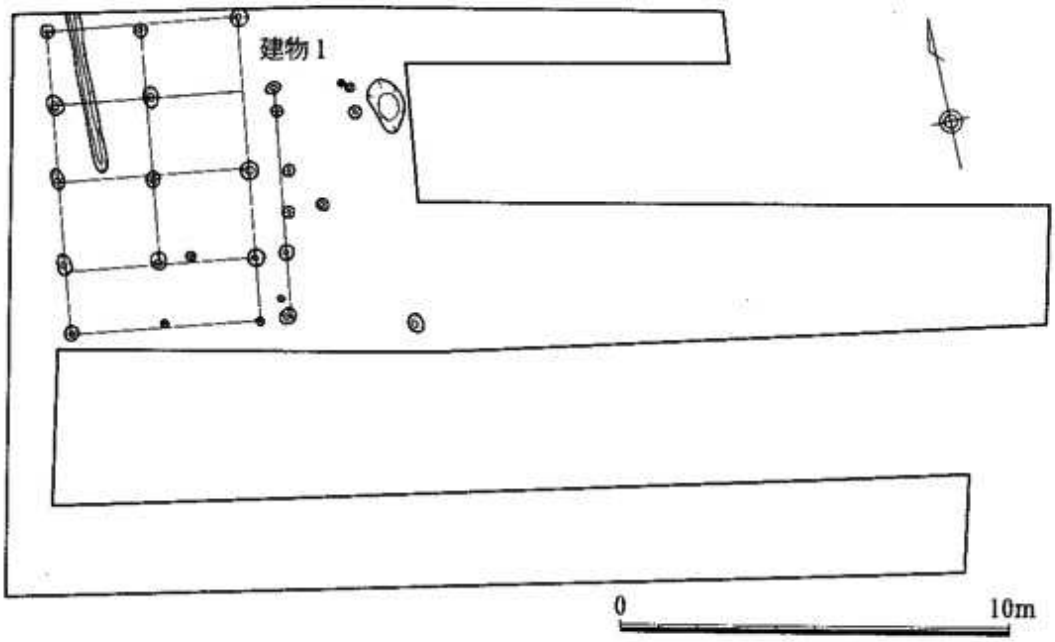


図9　安満遺跡D区遺構平面図

暗褐色粘土（0.3m）、暗茶褐色礫混じり粘土（0.3m）、暗黄色土（礫を多く含む）である。遺構は暗黄色土上面で検出され、標高約８ｍである。Ｃ区では遺構はみられず、Ｄ区から掘建柱建物１棟、柵列１条が検出された（図９）。

建物１は梁行２間（柱間2.4m）、桁行３間（柱間２ｍ）の南北棟で、南側に庇を有する。直径0.2m・深さ0.4mの円形柱穴で、方向はＮ－８°－Ｅである。柵は建物１の東側で検出され、建物とほぼ同規模の柱穴で、方向も建物と同一で並存していたものとみられる。建物１の柱穴から土師器・須恵器・黒色土器Ｂ類が、包含層からは土師器・須恵器・黒色土器Ｂ類・瓦器・中国製白磁などが少量出土している。

5．まとめ

安満遺跡東部での本格的な発掘調査が開始された1972年度から20年経過したが、弥生時代から鎌倉・室町時代までの集落変遷について把握できるようになった。その大筋をまとめると、弥生時代中期には京都大学農場のすぐ東側からＡ区・Ｂ区の南側、Ｃ区・Ｄ区の西側にかけて数十基の方形周溝墓が築かれる。この時期の住居や井戸についてはまったく知られておらず中期の集落縁辺に墓域が営まれたものとみられる。弥生時代後期にはＡ区やＡ区西側の1982年度に調査した地区から竪穴住居が検出され、今回Ａ区からは多数の井戸も検出されている。また、中期の方形周溝墓に投棄された後期の土器群が1972年度・1982年度に検出されている。このため、ＪＲ東海道線に沿うＡ区・Ｂ区を中心に弥生時代集落が営まれ、その範囲は東西・南北とも約200mの範囲である。この地域はＡ区で標高約11ｍを測る微高地である。

古墳時代もひきつづきこの微高地を中心に集落が営まれる。これまでに検出された遺構は井戸が中心であるが、その範囲はもう少し東南部に拡大している。1972年度の調査などで庄内式・布留式土器が出土しているが、Ｂ区の井戸１・２出土土器はこの時期の土器編年にとって良好な資料を提供するものである。

奈良時代には現在の桧尾川近くまで集落が拡大し、Ａ区の建物のように桧尾川の氾濫が形成した厚い砂礫層を克服していることがよくわかる。平安時代前期、とくに９・10世紀の遺構・遺物は希薄であるが11世紀から14世紀にはＡ区からＤ区までの南北・東西約300mの範囲に集落が営まれるようになる。このうち、11世紀代に営まれた遺構は1980年度のＤ区北側の調査区、1988年度のＤ区東北側の調査区、さらに1972年度の調査区の一部にみられる。このため、中世集落成立期には集落内部がいくつかの単位に分散しているようである。

古曽部・芝谷遺跡（道路公団地区）の調査

宮崎康雄

古曽部・芝谷遺跡はＪＲ高槻駅の北側にある高槻丘陵（通称天神山丘陵）の標高60～100mの尾根上に位置している。これまでわずかな遺物が知られる以外には、遺跡の実体はあきらかではなかったが、平成３年９月より大規模な宅地造成に先立って実施した調査では、急峻な斜面に掘削された環壕に囲まれる弥生時代後期初頭の集落を検出している。

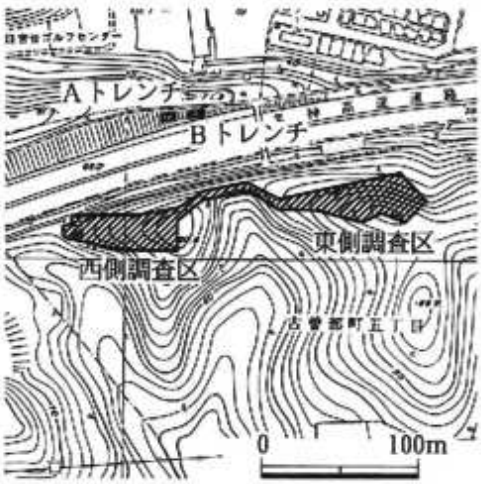


図１　調査位置図

今回報告するのは、先の調査地の北西隣接地にあたり、名神高速道路の車線拡幅事業にさきだって実施したものである。調査地は大阪府高槻市古曽部町五丁目・宮が谷町・別所本町に位置し、小字はケタガ谷・池ノ内である。名神高速道路下り線側に長さ約250mにわたって調査区を設定し、成合橋を境に東側調査区・西側調査区と呼称した。また、上り線側には遺構の広がりを確認するために２か所のトレンチを設定した。

調査は、まず重機によって表土・盛土等を除去した後、人力掘削をおこなって遺構・遺物の検出につとめ、記録作業をおこなった。調査面積は約1,800㎡である。

検出した遺構は竪穴住居跡、環壕、溝などである。これらの遺構は調査区の両端に続く尾根上で検出した。

竪穴住居跡１は、東側調査区の尾根上で検出した。土砂の流出や後世の撹乱をうけているために、部分的な検出にとどまり、全容を知ることはできなかった。規模は復元値で７ｍ×6.5ｍをはかり、平面形は隅丸方形を呈している。柱穴は直径0.3～0.6m、深さ約0.2mをはかる。ピット３の底からは柱状片刃石斧が１点出土した。周壁溝は0.2m、深さは床面から0.05mである。北東部では長さ約0.8mにわたって途切れていた。あるいは出入り口かもしれない。竪穴住居跡２を切っている。

竪穴住居跡２は竪穴住居跡１の西側で検出した。やはり撹乱のために一部分のみの

検出ではあるが、平面形は1辺約6mの隅丸方形とかんがえられる。柱穴は直径0.5m、深さ0.2mをはかる。周壁溝は幅0.2m、深さは床面から0.02mと浅い。

環壕は、東側調査区を東西にのびる主尾根の北斜面に沿って約30mにわたって検出し、さらに調査区外へと続いていく。北側の肩はすでに崩落していたが、現存幅7m、深さ約5mをはかる。断面の形状は逆台形を呈している。傾斜角は南側で最大55度、最小35度をはかるが、掘削後の崩落を考慮すれば、掘削時の最大斜度は50度前後であったとみられる。堆積がすすんだ時点で溝さらえをおこなっている。弥生後期初頭～前半頃の土器が出土した。

この環壕を追求するために、名神高速道路北側の尾根に幅1m、長さ6mのトレンチを2か所（A・Bトレンチ）設定したが、表土・腐食土を除去するとすぐに地山となり、遺構・遺物を検出することはできなかった。

溝1は西側調査区の南北にのびる尾根で検出した。尾根上の平坦部南端を区切るように掘削されており、検出長22m、幅4～7m、深さは最大値で約1.5mである。断面の形状は逆台形を呈している。南側では肩の一部が削平をうけている。

溝2は西側調査区西斜面の中腹で検出した南北溝で、両端は調査区外へとつづく。検出長は17m、幅約1～1.5m、深

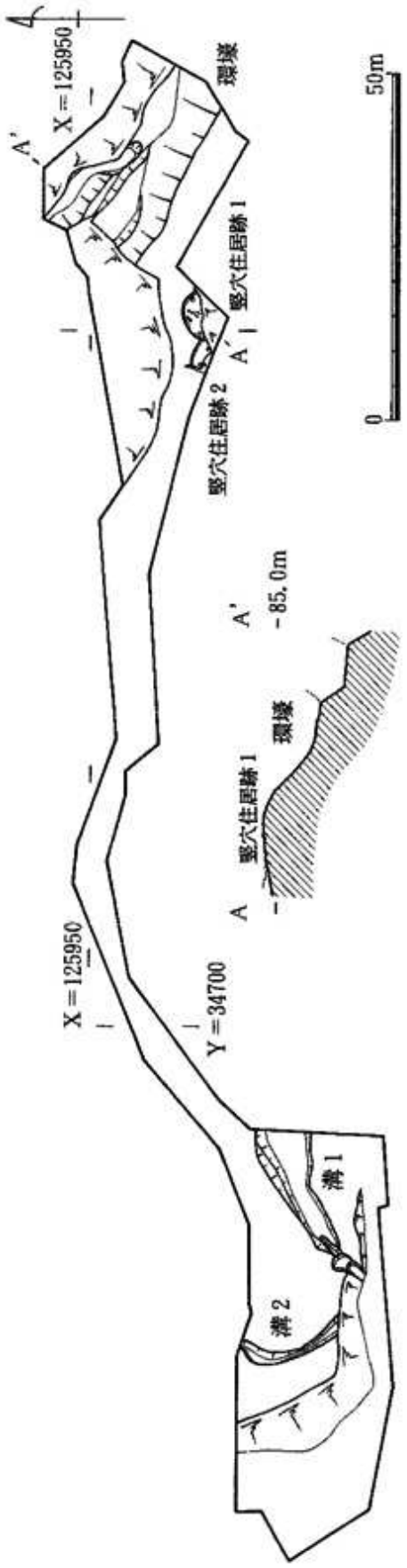
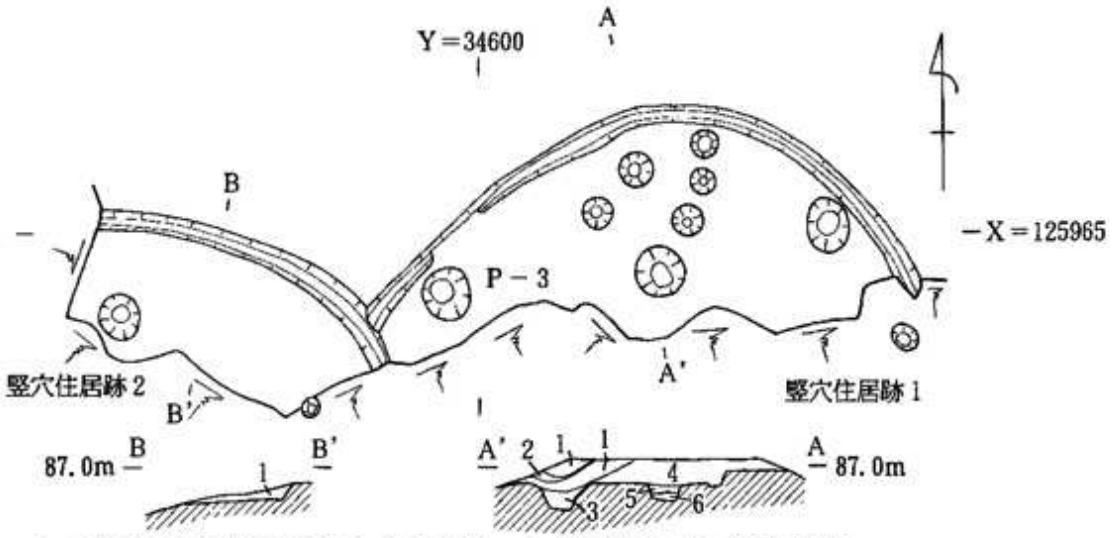


図2　遺構全体図

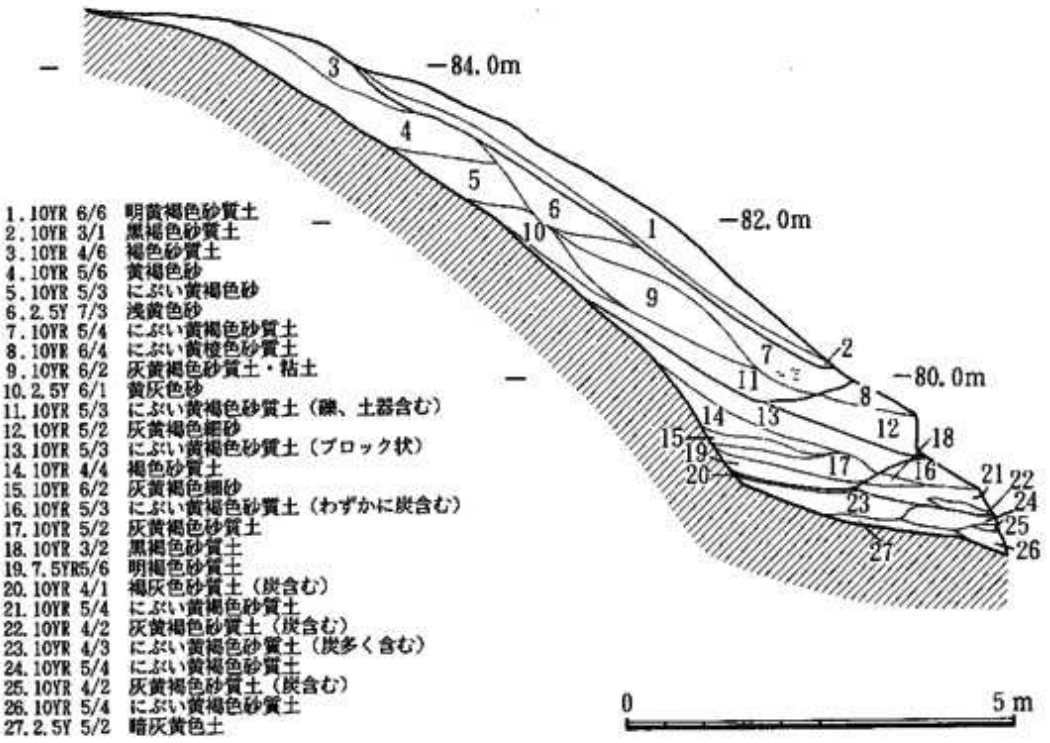


1.2.5Y 6/2 暗灰黄色砂質丘（含細石礫）

1. 10YR 7/4 にぶい黄橙色砂質土
2. 10YR 5/4 にぶい黄橙色砂質土（含細礫）
3. 10YR 4/4 褐色砂質土
4. 10YR 6/3 にぶい黄橙色砂質土（含礫）
5. 10YR 3/2 暗褐色砂質土
6. 10YR 3/3 暗褐色砂質土（含礫）

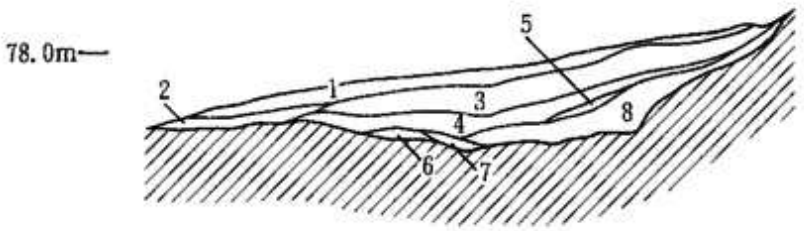
0 5 m

図3　竪穴住居跡1・2　平面図・断面図



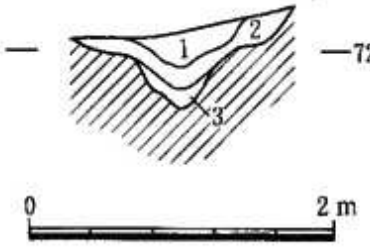
1. 10YR 6/6 明黄褐色砂質土
2. 10YR 3/1 黒褐色砂質土
3. 10YR 4/6 褐色砂質土
4. 10YR 5/6 黄褐色砂
5. 10YR 5/3 にぶい黄褐色砂
6. 2.5Y 7/3 浅黄色砂
7. 10YR 5/4 にぶい黄褐色砂質土
8. 10YR 6/4 にぶい黄橙色砂質土
9. 10YR 6/2 灰黄褐色砂質土・粘土
10. 2.5Y 6/1 黄灰色砂
11. 10YR 5/3 にぶい黄褐色砂質土（礫、土器含む）
12. 10YR 5/2 灰黄褐色細砂
13. 10YR 5/3 にぶい黄褐色砂質土（ブロック状）
14. 10YR 4/4 褐色砂質土
15. 10YR 6/2 灰黄褐色細砂
16. 10YR 5/3 にぶい黄褐色砂質土（わずかに炭含む）
17. 10YR 5/2 灰黄褐色砂質土
18. 10YR 3/2 黒褐色砂質土
19. 7.5YR5/6 明褐色砂質土
20. 10YR 4/1 褐灰色砂質土（炭含む）
21. 10YR 5/4 にぶい黄褐色砂質土
22. 10YR 4/2 灰黄褐色砂質土（炭含む）
23. 10YR 4/3 にぶい黄褐色砂質土（炭多く含む）
24. 10YR 5/4 にぶい黄褐色砂質土
25. 10YR 4/2 灰黄褐色砂質土（炭含む）
26. 10YR 5/4 にぶい黄褐色砂質土
27. 2.5Y 5/2 暗灰黄色土

図4　環壕土層図



1.10YR 5/4 にぶい黄褐色土 (細礫含)
2.10YR 7/4 にぶい黄橙色細砂 (〃)
3.10YR 8/1 灰白色細砂 (土器含)
4.10YR 8/2 灰白色細砂 (細礫含)
5.10YR 8/3 淡黄橙色細砂 (細礫含)
6.10YR 7/4 にぶい黄橙色細砂 (〃)
7.10YR 8/4 浅黄橙色細砂
8.2.5Y 8/4 浅黄色細砂 (土器含)

図5 溝1土層図



1.10YR 7/1 灰白色シルト (細礫含)
2.10YR 7/6 明黄褐色砂質土 (〃)
3.10YR 6/6 明黄褐色砂 (〃)

図6 溝2土層図

さ0.7mをはかる。斜面に平行するように掘削され、南側では谷底へむかって緩やかに傾斜している。

出土した遺物の大半は後期初頭～前半頃の弥生土器であり、そのほかに若干の石製品がある。

広口壺（1）は口径12.4cm、器高25.5cm、最大径19.7cmをはかる。色調は明茶褐色を呈し、胎土中には5mm大の砂粒が比較的多く含まれる。調整は内面がナデ、外面は頸部および体部下半がタテハケ、体部上半がヨコハケである。2は口径10.3cm、器高17.3cm、最大径14.6cmをはかる。色調は明褐色を呈し、内面はナデ、外面は縦方向のヘラミガキを施す。

長頸壺（3）は口径12.8cm、器高28.3cm、最大径18cmをはかる。色調は茶褐色を呈している。調整は内面下半がハケ、上半はなでている。外面はヘラミガキを施している。体部下半には竹管刺突による記号文がある。

短頸壺（4）は復原口径9.4cm、器高17.2cm、最大径は11cmをはかり、色調は黄灰

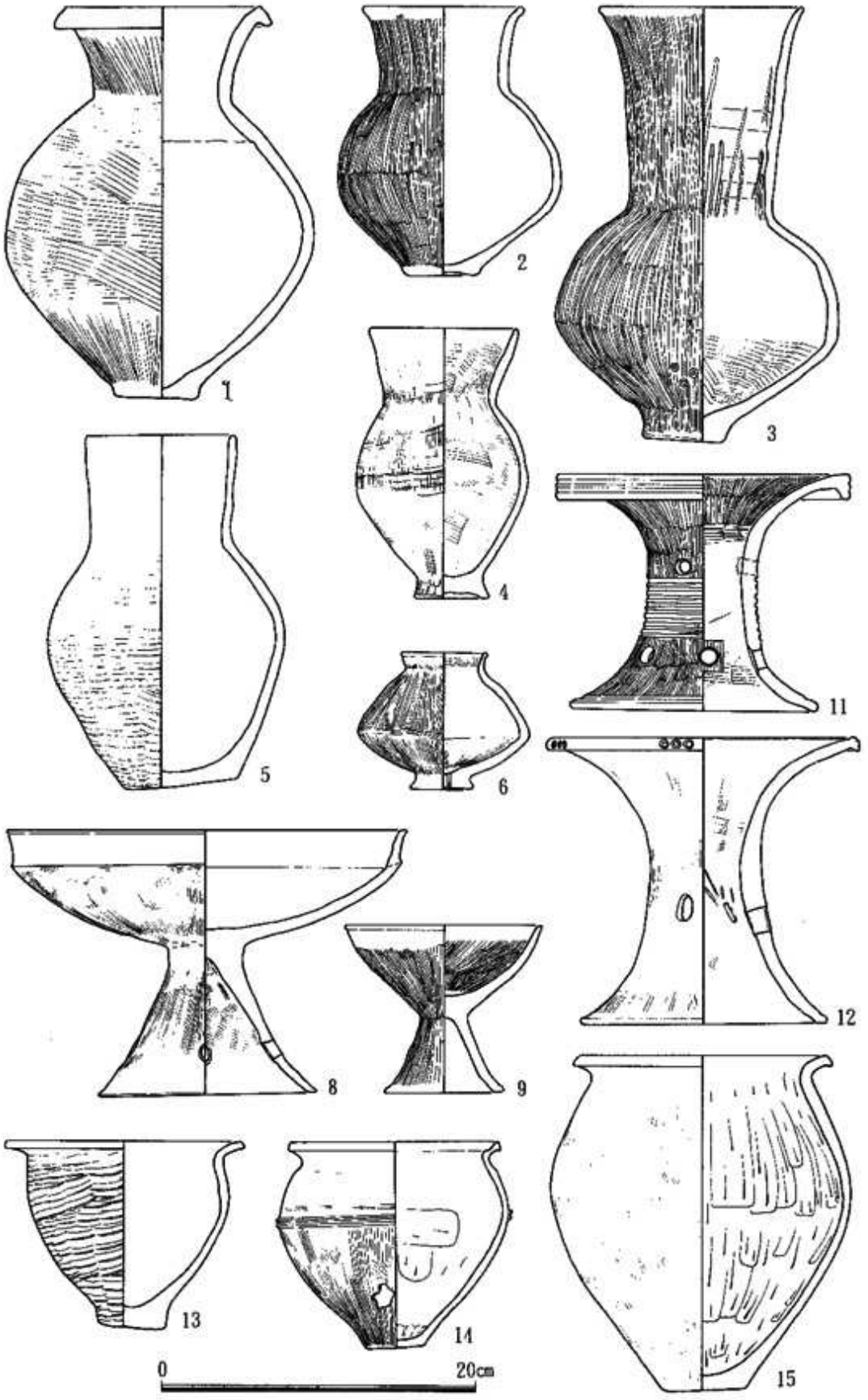


図7　遺物実測図（1）

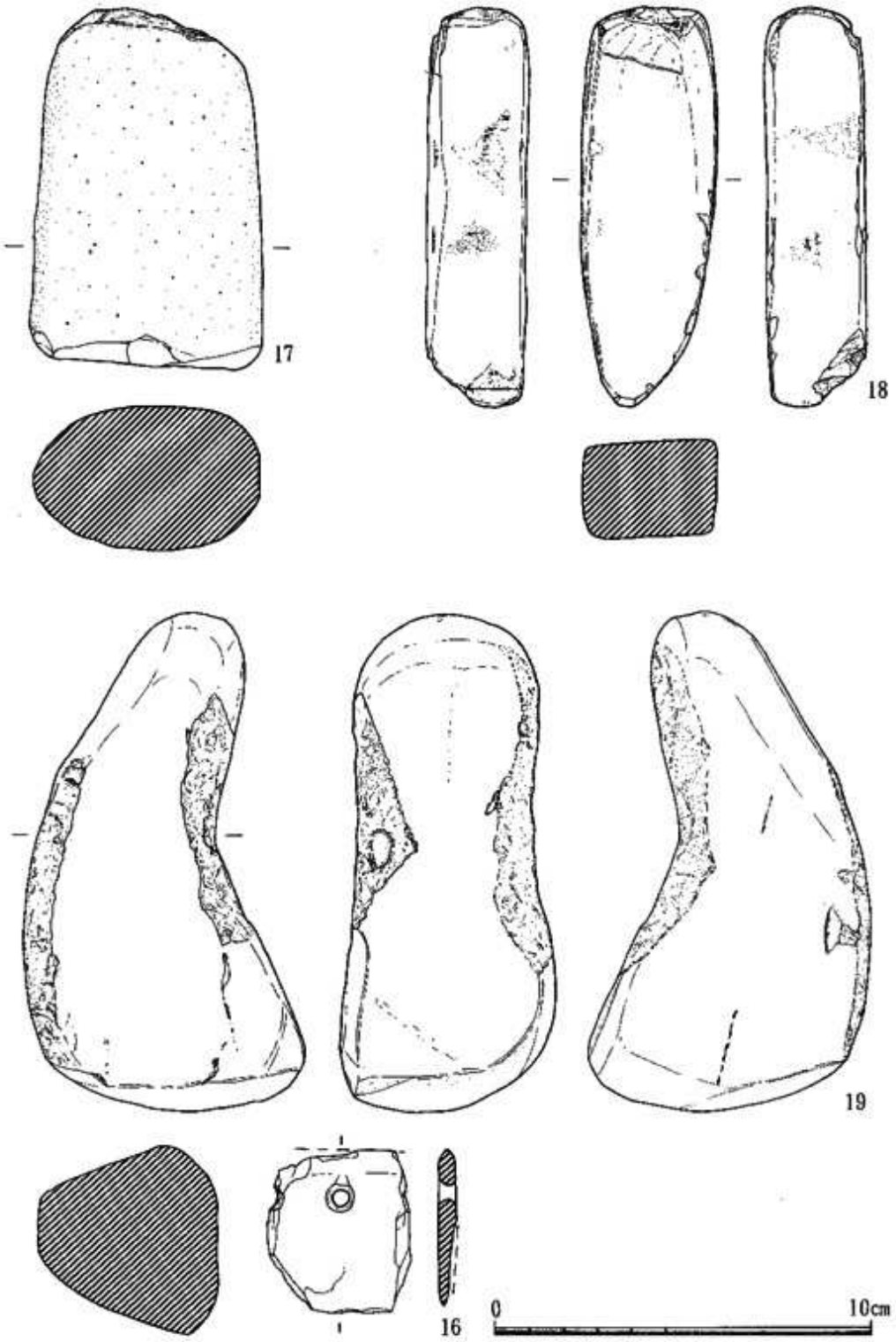


図8　遺物実測図（2）　石包丁（16），太形蛤刃石斧（17），柱状片刃石斧（18），石杵（19）

色を呈している。外面の調整はタテハケである。5は口径9.4cm、器高23cm、最大径15.2cmである。色調は明黄褐色を呈している。調整は内面ナデ、外面は水平方向のタタキ後になでている。全体に調整は雑である。6は口径5.4cm、器高8.7cm、最大径11.3cmをはかる。色調は明褐色を呈している。調整は内外面ともにハケである。底には直径1.5mmの孔を2か所穿っている。

高杯（7）は口径15.8cm、現存高7cmをはかり脚裾部分を欠く。内外面ともハケ調整、口縁部はヨコナデを施している。穿孔は3か所である。8は口径25.7cm、底径14.2cm、器高17.2cmをはかる。内外面とも粗いハケ調整の後にかるくなでる。4か所に穿孔する。色調は黄褐色である。9は口径12.6cm、底径7.4cm、器高10.4cmをはかる。色調は黄茶褐色を呈している。口縁部はヨコナデ、他はヘラミガキを施す。10は口径24.6cm、底径12.4cm、器高22.2cmをはかる。色調は明茶褐色、細部の調整は風化が著しいために不明である。

器台（11）は口径18.7cm、底径15.8cm、器高15.4cmをはかり、色調は黄茶褐色を呈している。口縁端部は下方に拡張し、2条の凹線を施す。胴部には5か所の円孔を上下2段に穿ち、その間に8条の沈線を施す。ハケ調整の後にヘラミガキを施す。12は口径20cm、底径15.7cm、器高18.6cmをはかる。色調は灰褐色を呈し、全体にハケ調整をおこなう。胴部下半に楕円形の透かしを3方向に穿つ。

甕（13）は口径15.6cm、腹径18.8cm、器高21.6cmをはかる。調整は内面が頸部までヘラケズリ、口縁部はヨコナデ、外面はタテハケである。色調は灰褐色～明黄褐色を呈し、上腹部から口縁にかけて煤が付着する。14は口径15.4cm、器高12cmで、色調は暗黄褐色～灰褐色を呈している。体部下半を水平方向、上半はやや右上がりのタタキを施す。15は口径13.2cm、器高13.3cmをはかる。体部の最大径をはかる部位に、中央に1条の沈線を施した幅6mmの凸帯を巡らしている。外面はタテハケ、内面はヘラケズリ後になでている。口縁は受け口状を呈すが、近江のものとは異なるようである。色調は淡茶褐色～灰褐色である。そのほか、近江産の甕もわずかに出土している。

石製品（16～18）

石製品には打製品、磨製品ともにあり、そのほかに砥石や軽石などが出土した。打製品は鏃・短剣未製品・錐が各1点ずつみとめられるのみであり、磨製品では石包丁や斧・杵などがあるがやはり数は少ない。

石包丁（16）は4.75cm×4.3cmの小片である。緑色片岩製で、片側は剥離する。孔径は5mmをはかり、背側には磨滅痕が看取できる。

大型蛤刃石斧（17）は現存長10.4cm、幅6.8cm、厚さ4.2cm、重量500ｇをはかる。折損後に叩き石として転用されたもので、基部には敲打痕がのこる。西側調査区から出土した。

柱状片刃石斧（17）は竪穴住居跡１の柱穴（Ｐ－３）より出土した。全長11.6cm、幅2.9cm、厚さ3.95cm、重量300ｇをはかり、石材は粘板岩である。基部および刃部には敲打痕がみとめられ、側縁には装着痕らしき磨滅のあとがのこる。

石杵（18）は環濠からの出土で、勾玉形石製品やＬ字形石杵などとよばれるものである。全長14.5cm、最大幅5.2cm、厚さ5.3cm、重量820ｇをはかる。側縁を面取りするように調整し、底部は磨滅している。全体に火熱を受けている。朱などの付着物質はみとめられない。石材は砂岩である。

今回の調査では、弥生時代後期初頭～前半頃の竪穴住居跡、環濠、溝を検出した。古曽部地区では、環濠の内外に竪穴住居が数棟づつまとまった居住地がみつかっているが、今回東側調査区でも竪穴住居跡を検出したことによって、環濠で囲まれたなかにあらたな居住地を追加することができた。各居住地には尾根上に円形ないし隅丸方形の住居があり、当該区も同じ状況といえる。

西側調査区検出の溝１は尾根を横切るように掘削されていた。隣接調査区では尾根の端部に溝を掘削して居住域を区画する例があった。溝１も同様な位置に掘削されていることからすれば、これは居住域等を区画しているとみることができる。

溝２は尾根の西斜面に沿って続き、ゆるやかに谷底へと下っていく。この谷をたどると安満遺跡が展開する平野部にいたることや、溝の規模、掘削状況からみれば、通路として利用していた可能性も指摘できる。

環濠は隣接地の調査結果から、芝谷遺跡から東へのびる主尾根を横切って途切れるとされてきたが、今回の調査で西へ屈曲後さらに主尾根北斜面に沿って続いていたことが判明した。西側調査区では環壕を検出しなかったことから、環濠は主尾根を横切って屈曲しないで、西側の芝谷遺跡やさらに南側の奥天神遺跡へと続いていく状況が想定でき、さらに古曽部、芝谷、奥天神の３遺跡は古曽部・芝谷遺跡としてひとつにまとめることができるようになってきた。

このように、今回の調査はかつての古曽部遺跡と西側の芝谷遺跡や奥天神遺跡をも包括した古曽部・芝谷遺跡を設定する契機となる重要なものとなった。

慈願寺山遺跡の調査

木曽　広

高槻市月見町19番1他にあたり、小字名は東山と称する。現在は宅地である。このたび社員寮新築工事が計画されたため、事前に発掘調査を実施した。

図1　調査位置図

今回の調査地は早くから宅地化されていたが、一部に旧地形をとどめていたので、その部分を中心に調査をおこなった。調査はユンボで表土を除去したのち、人力で掘り下げていったところ、幅0.5m～0.7m、深さ0.2mほどの落ち込み状の遺構を3ヶ所検出した。それぞれの遺構からは、弥生時代後期の土器片が数点出土した。当該調査地は、慈願寺山南面中腹に位置し、これまでにも周辺から中・後期の弥生時代の土器片が発見されている。出土した土器は、大型広口壺の胴部片で内外ともていねいにハケ調整している。胎土は砂粒を含むもので、焼成は硬い。色調は淡茶色を呈している。

当初から集落遺構の発見を期待されていたところであるが、残念ながら今回の調査では、検出できなかった。

慈願寺山遺跡は、東側にひろがる天神山遺跡や、北東にある古曽部・芝谷遺跡も視野に入れた高地性集落の展開をみるうえで、看過できない重要な遺跡であり、東側に隣接する未調査地での今後の調査に期待したい。

梶原古墳群の調査

名神高速道路内遺跡調査会
川　端　博　明

1．はじめに

梶原古墳群は、高槻市の東部にある丹波山地から連なる丘陵が三島平野へのびる標高25m～50mの尾根筋に展開している。平成3年より中央自動車道（名神高速道路）拡幅工事に伴い発掘調査をおこなっている。

平成3年度までに、計8基の古墳が調査されており、1号墳からは二上山産出の凝灰岩製の組合式石棺や双葉剣菱形杏葉をはじめとする豊富な馬具類が出土し、注目をあつめた。

2．調査の概要

今年度の調査においても計8基の古墳を調査した。それらのうち、第8調査区で検

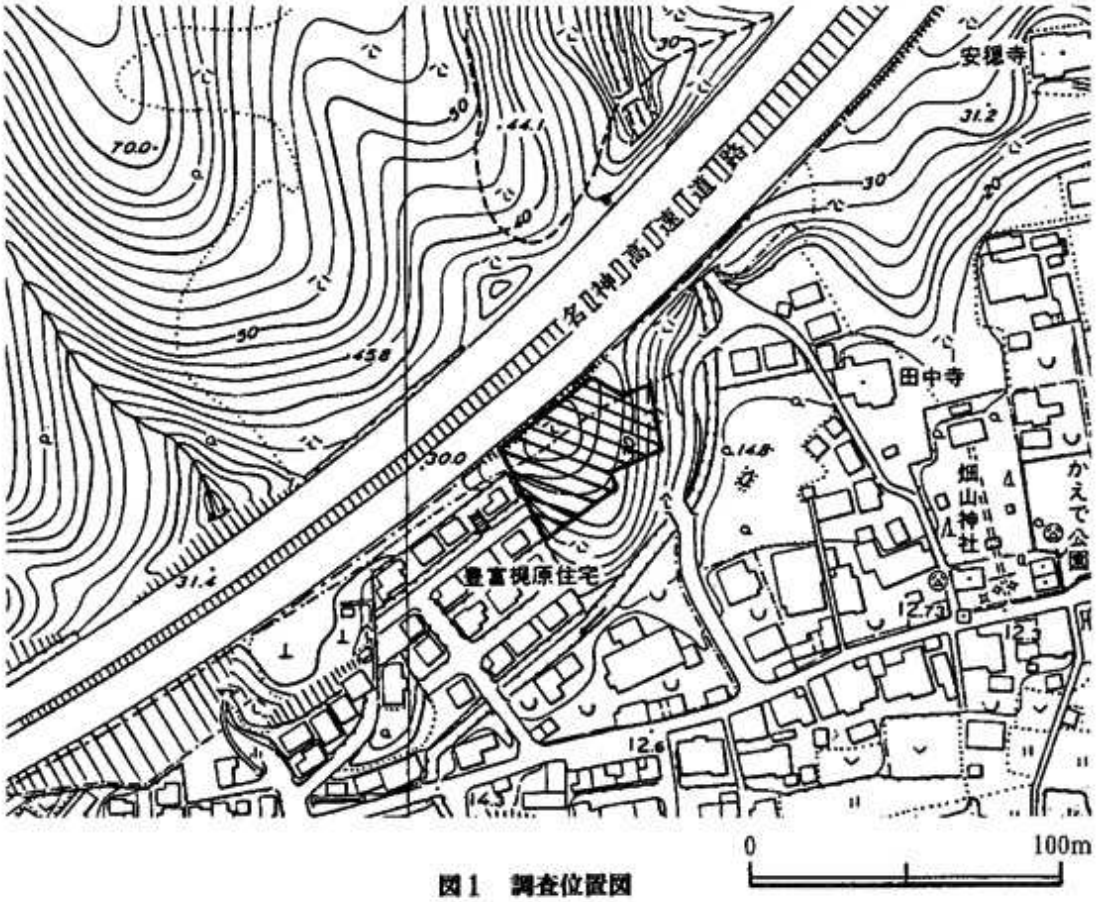


図1　調査位置図

出された4基（12～15号墳）の横穴式石室をもつ古墳は、残存状況が比較的良好であった。以下に、第8調査区を中心に概述する（図2）。

第8調査区は、標高約25mを測る丘陵端部に位置する。平成3年に調査した梶原1号墳の営まれた丘陵とは、谷を挟んだ東の丘陵にあたる。同丘陵の名神高速道路のぼり線側域の調査も昨年終了しており、5世紀中頃～6世紀後半にかけての古墳4基と

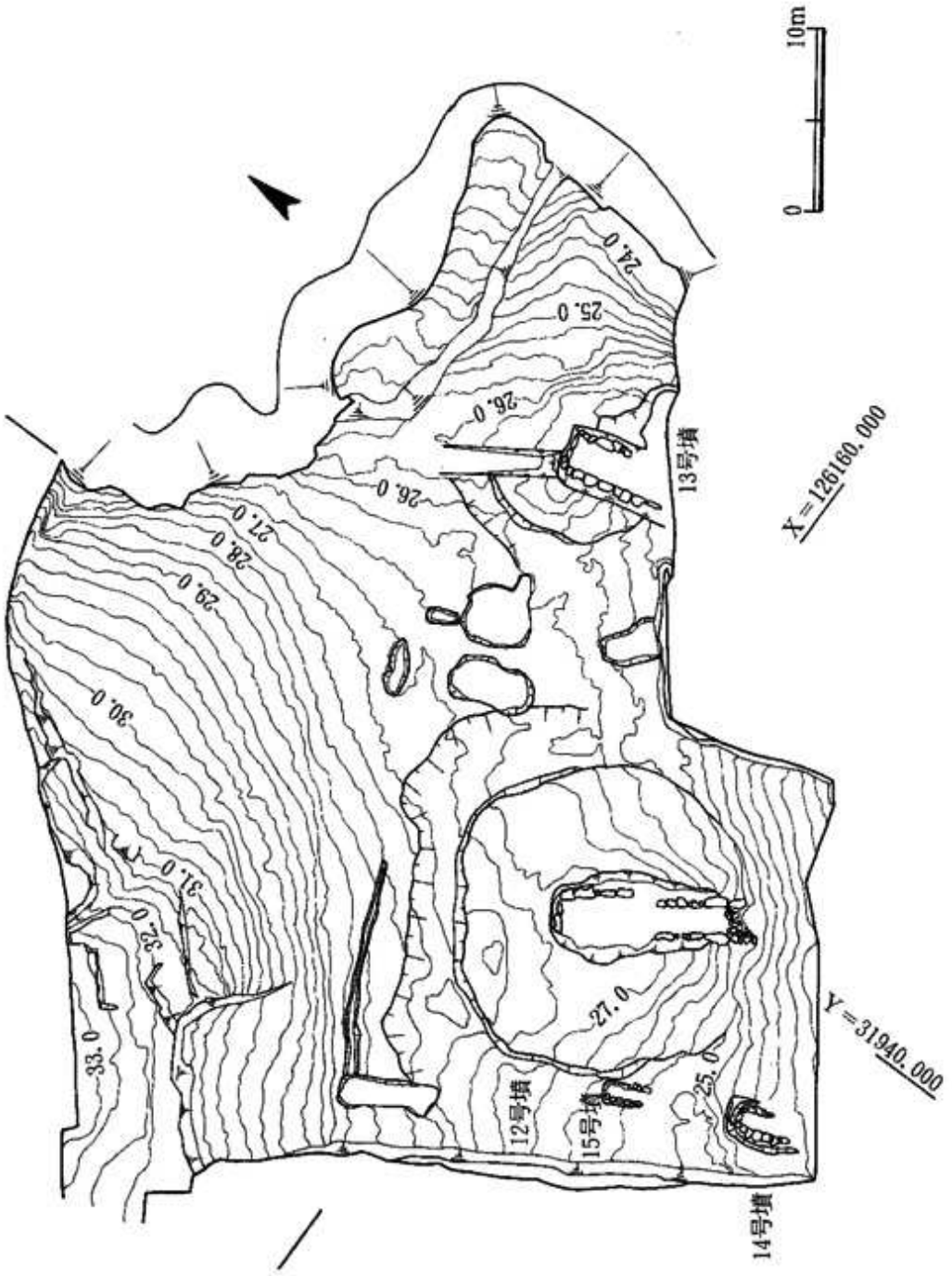


図2　梶原古墳群　第8調査区平面図

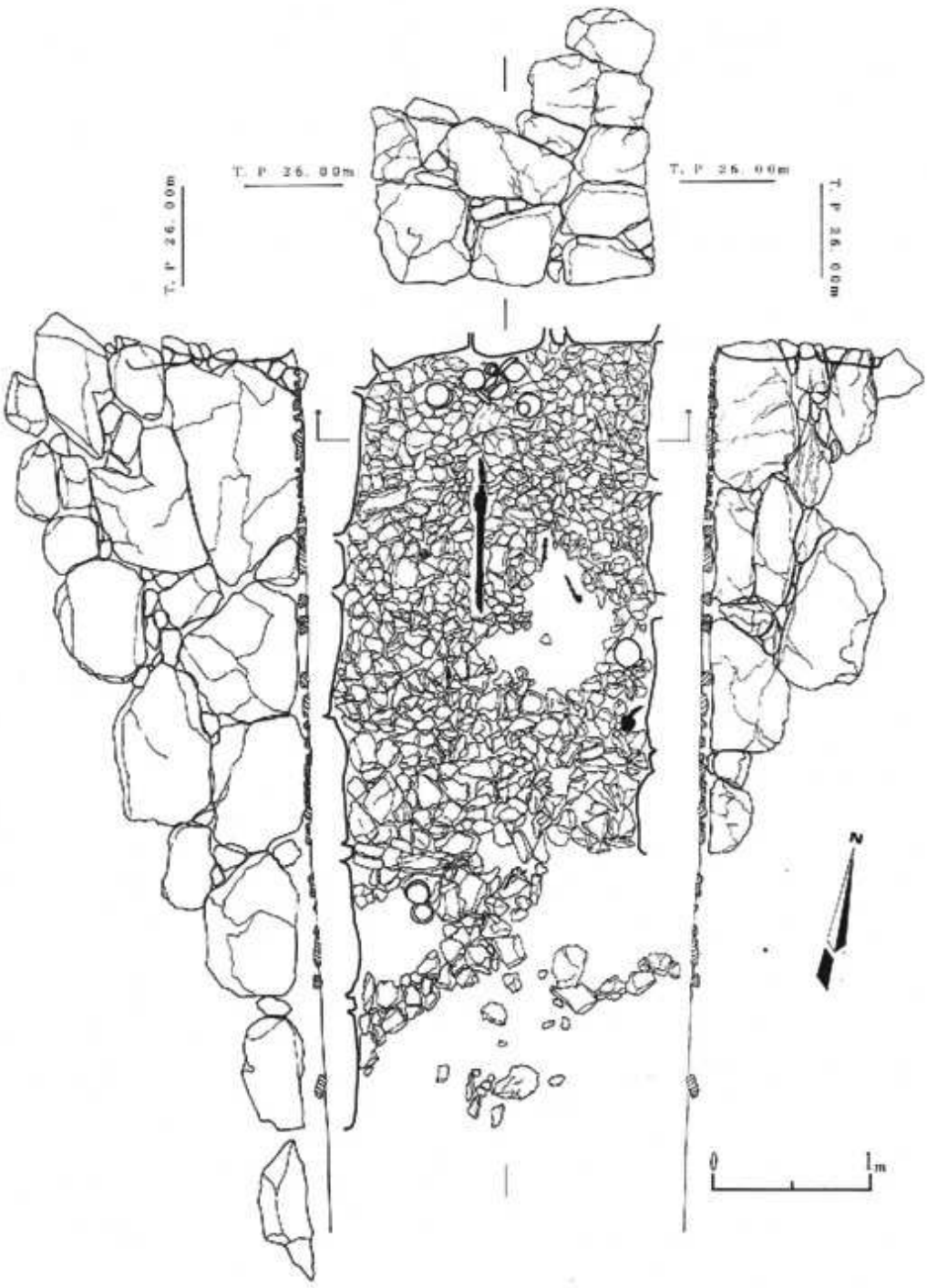


図3　13号墳石室展開図

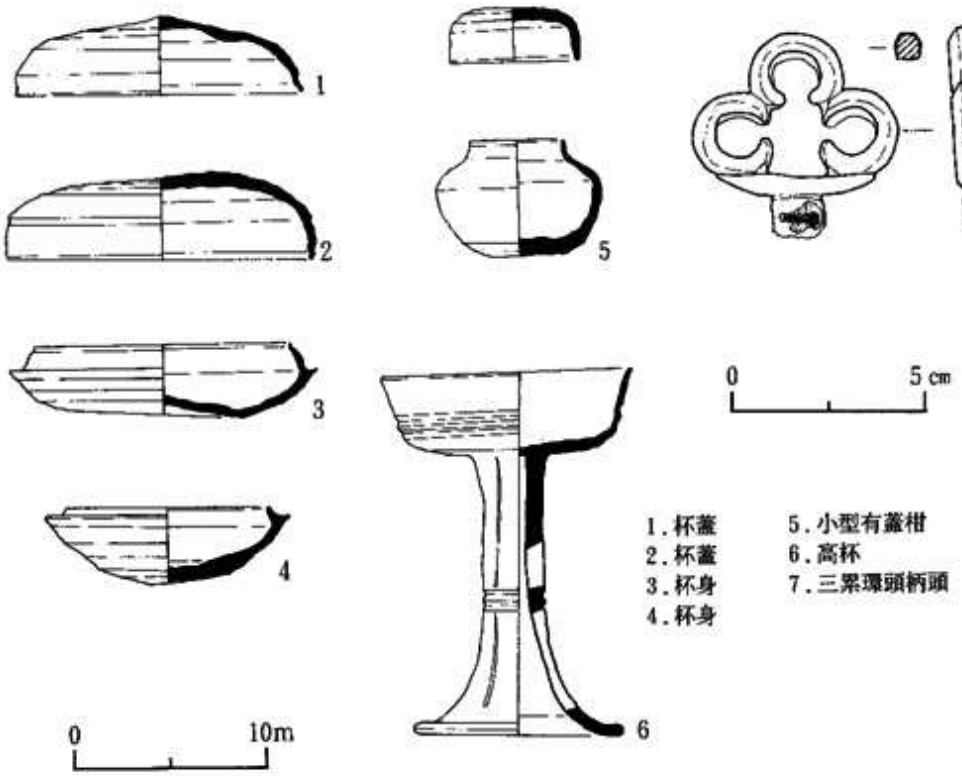


図4　13号墳玄室内出土遺物

7世紀前半以降の竪穴住居跡6棟、掘立柱住居跡5棟、8・9世紀代の土壙墓・蔵骨器等々を検出している。

第8調査区で検出した4基の古墳は、後世の竹林造成による攪乱のために墳丘や主体部がかなり影響を受けていたが、12号墳・13号墳は墳丘、主体部ともに比較的残存状況は良好であった。とくに13号墳は、天井石が除去されていたが、玄室からは武具をはじめ、多くの遺物が出土した。

〔12号墳〕　直径約18mの円墳。羨道側より見て左片袖式の横穴式石室である。

石室の規模は、玄室の幅約1.8m、長さ約5.0m、羨道の幅約1.4m、長さ約6.0mを測り、玄室の規模としては、梶原古墳群の中でも最大規模である。6世紀後半の築造と推定される。

〔13号墳〕　直径約18mの円墳。無袖式と思われる横穴式石室をもつ（図3）。

石室の規模は、玄室の幅約1.5m、残存長3.6mを測る。羨道は宅地造成のため残っていない。

玄室では、鉄製の大刀1、三累環頭柄頭1、貴金具2、刀子3、耳環1、鉄鏃3、須恵器（堤瓶2、壺2、蓋4、杯3、高杯1）が出土した（図

4)。6世紀中頃から後半にかけての築造と推定される。

〔14号墳〕　墳丘は削平を受けており、規模は不明である。石室の規模は玄室の幅約0.8m、残存長約3.6mを測る。羨道は残っていない。6世紀後半の築造と推定される。

〔15号墳〕　墳丘は削平を受け、規模は不明である。石室の規模は、玄室の幅約0.5m、残存長約2.0mを測る。6世紀後半の築造と推定される。

3．まとめ

梶原古墳群における今回の発掘調査では、昨年に引き続き多くの成果を得た。13号墳出土の三累環頭柄頭は、大阪府下では初めての出土例である。畿内でも数例しか確認されておらず、全国でも20数例見られるだけである。12号墳も遺物はわずかではあるが、石室の規模は同古墳群の中でも最大規模を誇ることが明らかになった。

4つの丘陵の中腹から端部にかけて展開している当古墳群の調査は、今年度でその大半を終えたことになり、各支丘陵ごとにおける古墳の所属時期や分布の在り方が明らかになりはじめた。現名神高速道路建設に伴い消滅した古墳もあろうが、高速道路を境に平野部へ突出している丘陵端部での調査は当初予想したとおりの成果をあげることができた。

ここでは報告しなかったが、萩之庄地区でも6世紀末頃の横穴式石室を1基検出しており、昨年調整済の丸山1号墳を含め、周辺の古墳群の調査も成果を挙げている。今後は、これら基礎資料の比較検討を進めていくことで、桧尾川以東に展開する古墳群を再評価していきたい。

梶原瓦窯の調査

名神高速道路内遺跡調査会
鎌田博子

1．はじめに

名神高速道路内遺跡調査会では名神高速道路の拡幅工事に伴う事前調査として、平成4年6月から平成5年3月まで高槻市梶原1丁目の梶原瓦窯跡の調査（面積5,298㎡）をおこなった。当地はふたつの尾根の端とふたつの谷を含み、竹林であった。高さは16.5mから40mを測る。

調査地は道路沿いに南西から北東に長いが、遺構を検出したのは西側の90m×34mの部分である。南西から順にA区（谷部）、B区（西尾根西斜面）、C区（同東斜面）、D区（東尾根西斜面）、E区（同東部）と地区を分けた。このうちC区で7世紀後半の瓦窯1基、D区で7世紀半ばの瓦窯2基、8世紀前半の瓦窯1基を検出し、A区で瓦作りの工房を検出した（図1）。

図1　調査位置図

2．主な遺構

瓦窯（図2）

窯1：C区の中央で出土した地下式有段登り窯である。大阪層群を掘り抜いている。

全長7.1mに前庭部1mを測る。焼成室は幅0.9mあり、12段の階段をもつ。煙道は中央で上に抜けるが、下部にはさらに奥に0.7mのびる煙室をおもなう。燃焼室の両側の壁と前庭部の埋土には火を受けて赤化した花崗岩が多数あった。閉塞石である。窯の南東は灰原となっている。

窯3：D区東よりの位置に築かれた半地下式有段登り窯。掘り込まれた窯の深さは0.6m残る。埋土には、木の枝に粘土を張り付けた窯の天井部の壁体が多量に含まれていた。全長8.9m、焼成室の床幅は1.32mを測る。焼成室の上部で床は0.5m以下に急にせばまり、煙道は東にのびる。また焼成室の最下部は幅0.84mとせばまり、燃焼室に近いことが推測できるが、この下は撹乱をうけている。

窯4：窯3のさらに東よりにある地下式有段登り窯である。天井部の大半が残っていたため、下部の調査にとどめた。全長6.4mを測り、煙道は上に抜ける。下部は窯3と同様に撹乱を受けているが、幅1mの平らな床が2.6m続き、階段となる。埋土には炭が多い。手前で急に開く構造である。下部の断面から推測さ

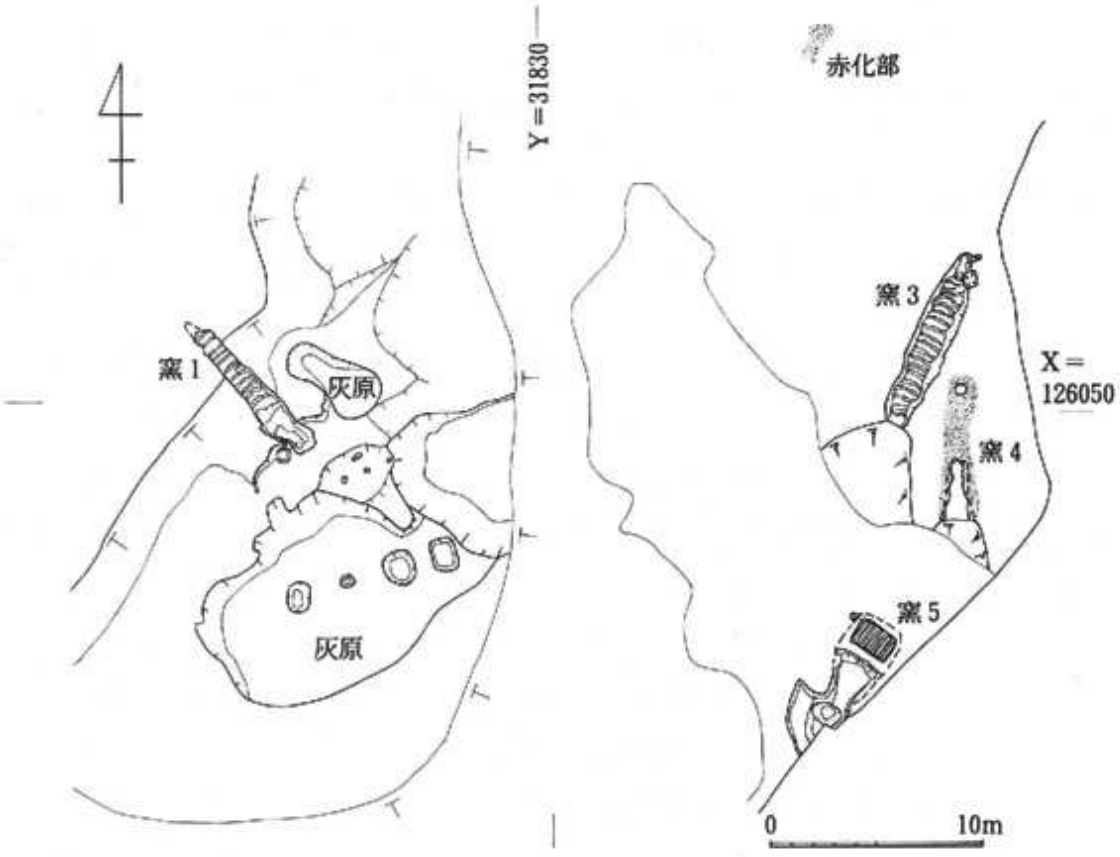


図2　B・C・D区平面図

れる天井の高さは0.65mである。階段部の天井は1.34mを測る。

窯3と窯4は古生層を掘り込んでいる。

窯5：上記の窯1、3、4に由来するであろう瓦を包含する土層を掘り込んで造られたロストル式平窯である。焼成室は1.8m×1.3mの長方形で、深さ0.6mが残る。ロストルは7本あり、幅0.16m、高さ0.18mくらいのものが、瓦を粘土で固めて造られている。燃焼室は長さ2.4mあり、焚き口に向かってすぼまる。焚き口との境には石が数個置かれている。閉塞石であろう。燃焼室の床は焼成室の床よりも0.5m低くなっており、6本の分焔孔をもつ隔壁が焼成室との間に設けられている。この隔壁には軒平瓦や丸瓦、平瓦が構成材として用いられている。焚き口は推定幅4mの半円状の掘り込みの中央にあり、炭が大量に堆積していた。燃焼室との隔壁の上部には、造り直しの重なりが観察できた。

赤化部：窯3の北12mのところで、多量の窯体片が広がっていたが、7世紀の瓦のほかに江戸時代以降の遺物が混じっていた。これを除くと1m×2mの範囲で地山が火を受けて硬く赤化していた。この位置にも窯があった可能性が高い。

工房跡（図3）

窯1のある尾根の南部は開けた谷地である。中世の遺構面の下0.2mと0.4mの2面で7世紀後半の建物が出土した。これらを上層遺構面と下層遺構面とよび、以下に説明する。

上層遺構：淡褐色粘土で整地された面に掘立柱建物が営まれている。柱の掘形は0.4m×0.5mから1.3m×1.1mを測るが、柱穴の直径は0.12m～0.18mと細い。

建物1は柱の掘形埋土に焼けた壁土や炭を含む。柱筋からみると3間×6間（7.3m×11.5m）の規模になるが、北側の列の柱穴の多くは斜面上に掘られており、建物の構造についてはさらに研究する必要がある。南から2番目の柱列から考えると、最低ふたつの機能的分割を想定できる。ほかには建物2（5.2m×11.7m）と建物3（4.5m×5.7m以上）が想定できる。ほかに多くの柱穴があるが、調査地西部のもの以外は建物1－3の柱列に近接しており、同じようなプランで何度も立て替えを行ったと考える。調査地南側は礫が広がり、自然流路の落ち込みとなる。

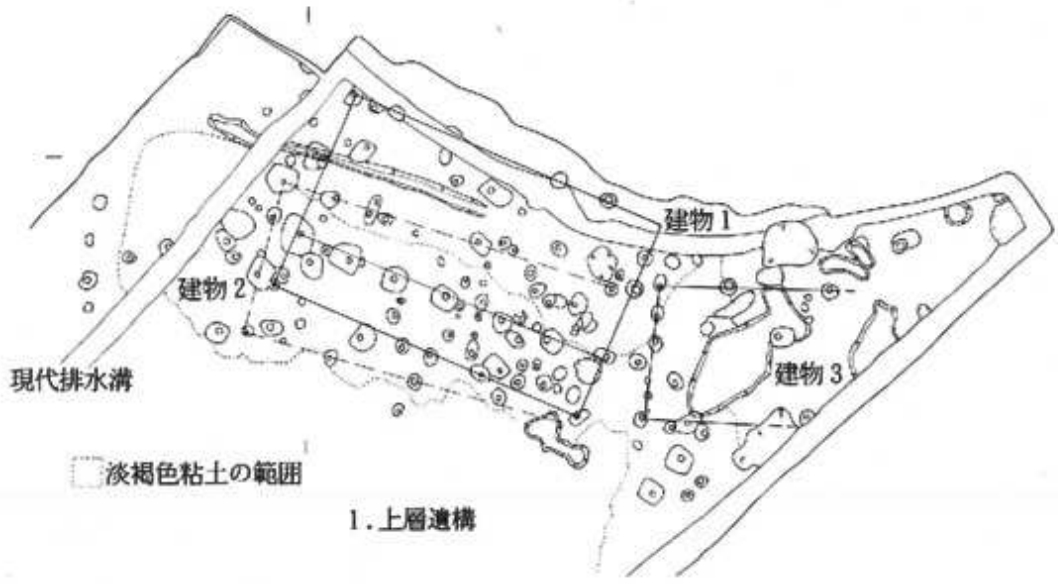
下層遺構：竪穴を伴う掘立柱建物が出土した。

建物4は竪穴（6.2m×5.1m）の外側に直径0.2m程度の柱が長方形に並

ぶ。床の中央に深さ0.8m、底の直径0.2mの深い穴があり、ロクロの軸受け穴と考えうる。これを囲むように浅く細長いくぼみが5本ある。建物5は建物4の東にあり、竪穴（5.7m×7m？）と外に並ぶ柱がある。南東部は東に向かって低くなり、建物の全容は把握できない。建物6は掘立柱建物であるが、軸方向はほかと異なる。建物7は竪穴の一部がわかる残存状況である。

3．主な遺物

土器（図4）：A区の遺構面に伴う土器は、飛鳥ⅡとⅢに属するものである。図4の1から8は須恵器、9と10は土師器である。1は建物4の北側、2は建物



1．上層遺構

図3　A区平面図

4の柱掘形の中、4から7および9と10は上層遺構面の柱掘形の中で、3と8は中世層で出土した。

瓦（図5）：A区とC区で出土した軒丸瓦の一部を図5に示す。

1、2、4はA区の中世層で出土したものであるが、ほかは窯1の灰原から出土した。1は単弁8葉蓮華文軒丸瓦で、比較的立体的な文様をもつ。子葉には中心線がはいる。蓮子は摩滅していて明らかではないが、1＋5か6であろう。瓦当厚1.7cmを測る。2は単弁であるが、輪郭線が強く、弁の配置は2弁ずつを対置させるものである。瓦当厚は3.3cmと厚く、裏面は平である。3から6は複弁8葉蓮華文軒丸瓦である。3は外縁に線鋸歯文をもち、蓮子は1＋6。3、4とも外縁は内傾する。5は蓮子が1＋4＋9になる。ほかの破片や表面採集品からみると、外縁は平縁で、瓦当厚は2cm、裏面はほぼ平になる。また、最近の飛鳥寺の調査では同笵品が出土している（文献6、第46図8）。6は蓮子が1＋6で、笵傷をもつ。裏面は中央が大きくくぼむ。

軒平瓦は三重の重弧文をもつものがほとんどであるが、二重の重弧文で、瓦当面と顎部に竹管文を施すものがある。また、窯5では平城宮式の均整唐草文軒平瓦が窯体に使われている。C区出土の平瓦の大部分は桶巻作りで、丸瓦のほとんどは行基式である。

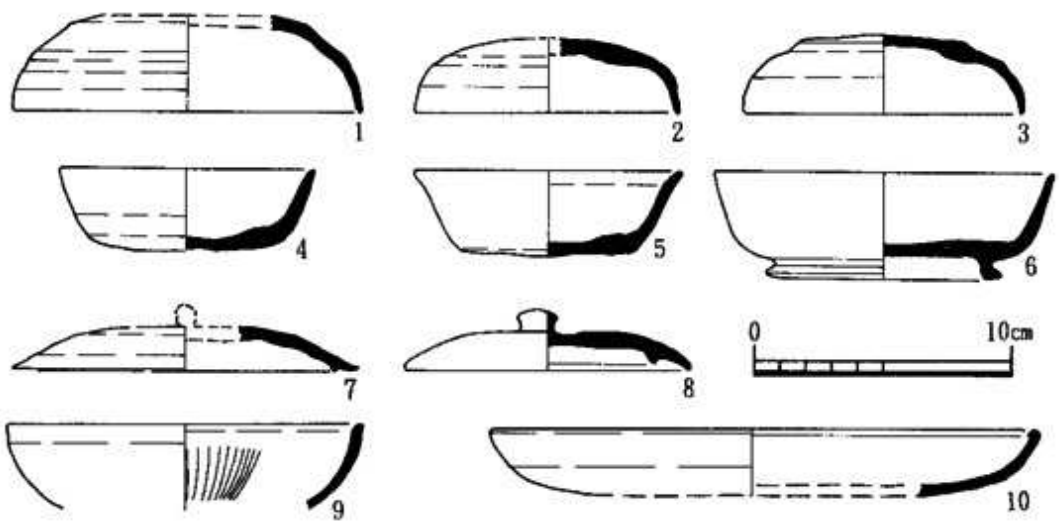


図4　7A区出土の土器

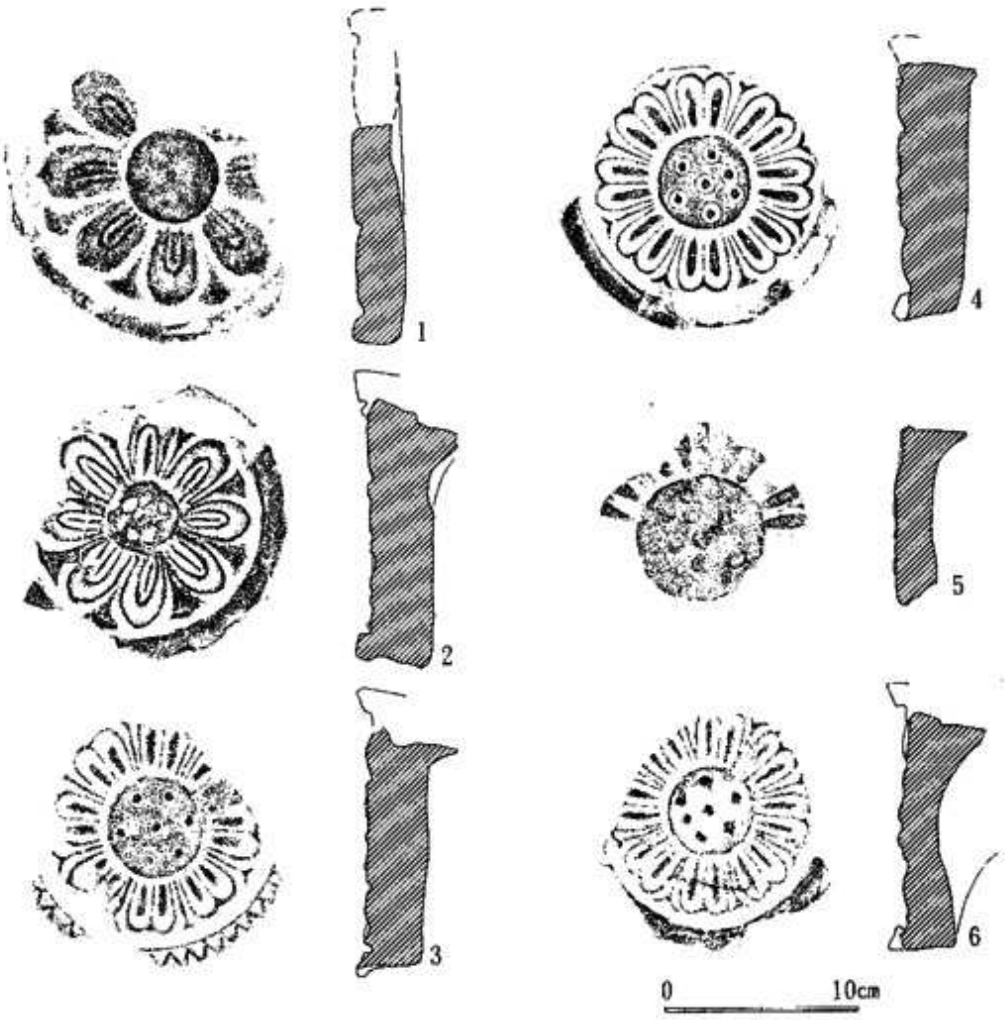


図5　7A区・7C区出土の軒丸瓦

4．まとめ

梶原瓦窯跡は早くから注目されてきた遺跡であったが、今回が初めての発掘調査である。窯と瓦からは、7世紀半ばから8世紀前半まで瓦生産が行われていたことを明らかにできた。梶原寺の創建も7世紀半ばにもとめることができる。A区の下層遺構面を埋める淡褐色粘土の中からは、図5－2の単弁軒丸瓦が出土した。土器の年代からもA区下層の工房はこれ以前にさかのぼる。7世紀末以降の工房はほかの場所にあった可能性が大きい。8世紀後半に東大寺むけの瓦生産が行われたことは『正倉院文書』に記録されているが、今回の調査によって飛鳥寺むけの瓦生産が行われたことも確認できた。従前の表面採集品の中には、今回の調査で出土しなかった型式の瓦もあり、今後の周辺調査でさらに工房や窯が出土するものと期待される。

文献

1：藤沢一夫　1941年

「摂河泉出土古瓦の研究」『仏教考古学論叢』東京考古学会　pp.237－308

2：高槻市史編さん委員会編　1973年

「3　梶原寺跡および瓦窯跡」『高槻市史』pp.113－117　PLs.498－500

高槻市

3：島谷稔　1974年

「高槻上代寺院跡の研究（一）」『大阪文化誌』第1巻・第1号　pp.11－21

図版1－9

4：岡本東三　1976年

「東大寺式軒瓦について」『古代研究』90pp.1－22　図版1

5：森田克行　1978年

「49.梶原寺跡」『昭和51・52年度　高槻市文化財年報』pp.21　PLs.36－39

6：奈良国立文化財研究所　1993年

「飛鳥寺の調査（1992－1次）」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』23　pp.79－86

Ⅱ　文化財保護啓発事業

1．文化財現地公開展覧講座

・平成４年11月18日～20日

普門寺

庭園（国指定）・方丈（国指定）

慶瑞寺

木造菩薩座像（国指定）

・平成４年11月13日～20日

歴史民俗資料館

芥川宿絵図

2．文化講座

・平成５年３月24日

「信長と秀吉」　参加人数130人

脇田　修氏（大阪大学教授）

・平成５年３月25日

「元禄時代の大坂」　参加人数119人

脇田　修氏（大阪大学教授）

3．歴史講座

・平成４年11月18・21日

「信長と城郭」講座と現地見学（参加人数述べ156人）

18日「芥川城と安土城」

中井　均氏（米原町教育委員会 主任技師）

21日安土城跡見学

木戸雅寿氏（滋賀県安土城郭調査研究所 主任技師）

〔行程〕

高槻市役所→安土城跡→滋賀県立安土城考古博物館→高槻市役所

4．説明板の製作

平成４年度は次表に掲げる４遺跡の説明板を製作した。なお大型説明板は縦80cm・横120cm、中型説明板は縦60cm・横80cm、駒札は縦40cm・横60cmである。

名　　称	サイズ	名　　称	サイズ
西法寺本堂	駒　札	塚脇Ｆ１号墳	中　型
大蔵司遺跡	大　型	上田部遺跡	大　型

5．歴史の散歩道整備

歴史の散歩道の普及をはかるため、阪急上牧駅前に磁器板を使用した大型説明板を設置し、７本の標柱を補充、14箇所で塗り替えを実施した。また標柱などの銘板の張り替えも実施した。

6．刊行物

高槻市文化財調査報告書　第16冊

『塚穴古墳群』（平成５年２月刊）

昭和62年に発掘した塚穴古墳群の調査成果をまとめた報告書。

高槻市文化財調査報告書　第17冊

『新池』新池埴輪製作遺跡発掘調査報告書（平成５年３月刊）

昭和63年から平成２年にかけて発掘した史跡今城塚古墳附新池埴輪製作遺跡の調査成果をまとめた報告書。

『遺跡ガイド』

市内の遺跡についてわかりやすく解説したビジュアルなガイドブック。

本年度はつぎの４遺跡を刊行。Ａ５版。

「弁天山古墳群」(本文６ページ)

「塚脇古墳群」(本文６ページ)

「鴨上郡衙跡」(本文６ページ)

「上田部遺跡」(本文６ページ)

7．ふるさとビデオライブラリー

市内の各社寺が所有している仏像に焦点をあて、それぞれの仏像がもっている美術工芸的な美とその魅力を知ってもらうため、ふるさとビデオ第３号を製作した。

題名「高槻の仏像を訪ねて」－その１－

8．市立埋蔵文化財調査センター見学者数

総数　4,202人（延べ　87,522人）

9．市立歴史民俗資料館入館者数

総数 12,106人（延べ 104,282人）

Ⅲ　資料紹介

高槻城堀割出土木材の樹種について

徳丸始朗

昭和63年度高槻城跡発掘調査において出土した杭・横木の樹種を調べたので報告する。

試料は高槻市教育委員会で発掘した杭18点、横木6点の計24点である。

鑑定結果は次のとおりである。

試料No.	トレンチ	遺構名	時代	形状	樹種
1	B	溝　2	16世紀後半（高山右近期）	横木	サカキ
2	〃	〃	〃	杭	サカキ
3	〃	〃	〃	横木	クヌギ
4	〃	〃	〃	杭	サカキ
5	〃	〃	〃	杭	コナラ
6	〃	〃	〃	杭	サカキ
7	〃	〃	〃	杭	エゴノキ
8	〃	〃	〃	杭	コナラ
9	〃	〃	〃	杭	クヌギ
10	〃	〃	〃	杭	クヌギ
11	C	外堀	17世紀前半（元和三年修築時）	横木	シイノキ属
12	〃	〃	〃	杭	マツ
13	〃	〃	〃	杭	ヒサカキ
14	〃	〃	〃	杭	ヒサカキ
15	〃	〃	〃	杭	シキミ
16	〃	溝　1	16世紀中頃？（和田惟政期？）	杭	カシ類
17	〃	〃	〃	杭	カシ類
18	〃	溝　2	16世紀後半（高山右近期）	横木	シイノキ属
19	〃	〃	〃	横木	カシ類
20	E	内堀	江戸時代（詳細不明）	杭	マツ
21	〃	〃	〃	杭	マツ
22	〃	〃	〃	杭	マツ
23	〃	〃	〃	杭	サクラ属
24	〃	〃	〃	横木	ヤナギ属

高槻城跡樹種鑑定結果

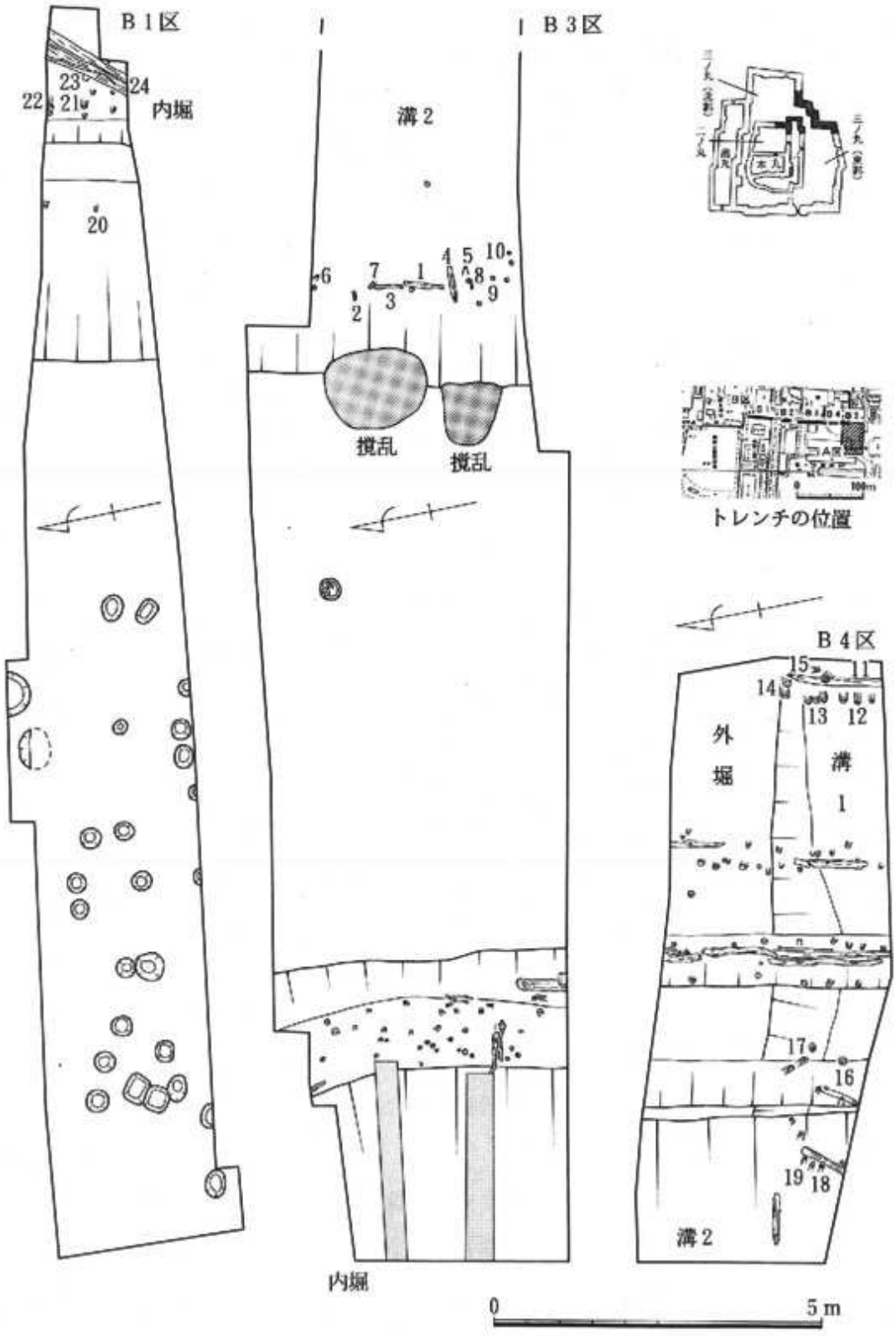


図1　分析資料の採取地点（数字はサンプルNo.）

出土木材の樹種鑑定の根拠になった特徴は次のとおりである。

1．マツ

早材から晩材への移行は急で、晩材幅は広く、樹脂道も多くみられる。放射柔細胞の分野壁孔は典型的な窓状である。アカマツ・クロマツの識別はむつかしい。

2．カシ類

放射孔材。比較的大きな道管が放射方向に配列している。放射組織は同性で、おおむね平伏細胞からなっている。板目面では広放射組織と多数の単列放射組織がみられる。

3．コナラ

環孔材。年輪界に沿って大きな道管が1－3列並んで孔圏部を形成し、その先は急に道管の大きさは小さくなる。その小道管の壁は薄くて角張り、火炎状に配列している。放射組合は同性で平伏細胞からなり、板目面では単列放射組織と広放射組織の2種類からなっている。

4．クヌギ

環孔材。大きな道管が年輪界に1－数列に並び孔圏部をつくる。道管は孔圏外で急に小さくなり、壁の厚く円形のものが放射方向に並ぶ。放射組織は同性で平伏細胞からなる。板目面では単列放射組織と広放射組織がみられ、前者が圧倒的に多い。

5．シイノキ属

環孔性の放射孔材。孔圏部の道管は単独で大きく、孔圏外に移るにしたがって小さくなり、集団を作って火炎状に配列する。放射組織は平伏細胞からなり同性である。板目面で単列放射組織だけがみられるスダジイとそれに広放射組織がが混じってみられるツブラジイとがある。試料のNa11はスダジイでNa18はツブラジイである。

6．サカキ

散孔材。小さな道管が単独または数個複合し、全体に均等に分布する。個々の道管にはラセン肥厚がみられる。放射組織は異性で、平伏細胞、方形細胞、直立細胞のすべてのものが存在する。板目面での放射組織はほとんどが単列である。

7．ヒサカキ

散孔材。小径の道管が単独ないし2－4個複合して平等に分布。道管にはラセン肥厚がみられる。放射組織は異性で、板目面で1－4列である。

8．シキミ

散孔材。小径の道管が単独または数個が接線方向に複合して均等に分布している。

道管壁にはラセン肥厚がみられる。放射組織は異性で1－2列である。

9．ヤナギ属

散孔材。道管は単独または数個が放射方向ないし斜め方向に複合して斜線上に配列。道管の大きさは、年輪界中央で大きく年輪界付近でこころもち小さい。放射組織は同性で平伏細胞からなり、単列である。

10．エゴノキ

散孔材。ほぼ等径の道管が単独あるいは放射方向、斜め方向、小塊状に数個複合して平等に分布。放射組織は異性で1－4列。数個の多列が単列部をはさんで上下に連なっているのもみられる。

11．サクラ属

散孔材。道管は平等に分布しているが、年輪界にそって並んでいるところは環孔材的で、その他の部分は散孔材的である。個々の道管は単独あるいは放射－斜方向に複合している。また、赤い着色物質が道管内腔に付着しているのが多数みられる。放射組織は同性ないし異性で1－数列である。

高槻市出土の金属製品（一）

－奈良・平安時代の鉄製品－

宮崎康雄

高槻市内の各遺跡から出土する奈良・平安時代の鉄製品は、弥生時代の希少性や古墳から出土する豊富な副葬品、さらには同時代の銭貨など他の遺物にくらべてやや地味な存在である。しかしながら、遺跡の性格を考えるうえで重要となる遺物もあることから、本稿では市内から出土した金属製品のうち、奈良・平安時代の鉄製品および鋳・鍛造関連の遺物について集成してみた。

高槻市内に分布する奈良・平安時代の遺跡のうち、９遺跡から鉄製品の出土が知られている（図１）。以下、各種類ごとに概要を記述する。

鏃（１）

嶋上郡衙跡（36－ＤＨＫＬ地区）の井戸から「上郡」と記された土師器甕などと伴出したもので、現存長は10.8㎝をはかる。刀部の幅2.6㎝、厚さ0.2㎝、茎は長さ5.9㎝で断面は一辺0.5㎝の方形である。

刀子（２～７）

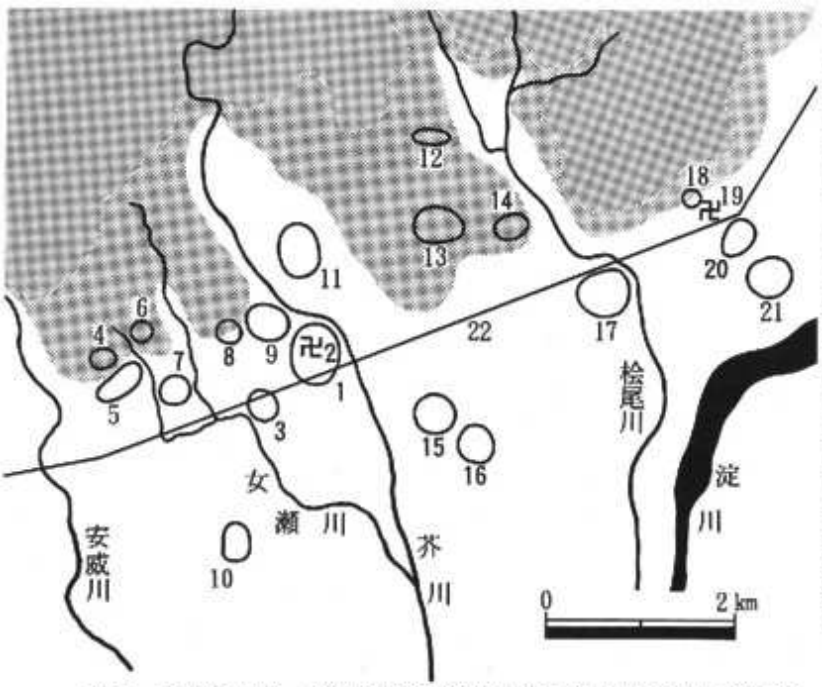


図１　主要な奈良・平安時代の遺跡（太字は鉄製品が出土した遺跡）

遺跡名	鏃	刀子	斧	くまで	紡錘車	鍵	釘	鋲	不明品	未製品	羽口	とりべ	鉄滓
嶋上郡衙跡	1	1					1						
芥川廃寺							2						
郡家今城		4	3	1	1		5		6	1	1		有
ツゲノ		1											
岡本山古墳群		1					17						
紅茸山							有						
上田部								1			4		有
高槻城下層						1							
梶原南							1		2		4	3	有

表1．鉄製品が出土した遺跡

No.	名称	遺跡名（地区）	遺構	文献
1	鏃	嶋上郡衙跡（36-DHKL）	井戸	b
2	刀子	〃（27－L）	包含層	d
3	〃	郡家今城遺跡（東）	8号井戸	b
4	〃	〃（〃）	〃	〃
5	〃	〃（89－2）	ピット1	h
6	〃	〃（〃）	〃 104	〃
7	〃	岡本山古墳群（B区）	木棺墓1	e
—	〃	ツゲノ遺跡(第16調査区)	SK01	g
8	斧	郡家今城遺跡（東）	整地層	b
9	〃	〃（〃）	〃	〃
10	〃	〃（93－2）	土坑1	j
11	くまで	〃（西）	井戸10	—
12	紡錘車	〃（東）	5号井戸	b
13	鍵	高槻城下層	井戸3	i
—	釘	嶋上郡衙跡（27－L）	包含層	d
14	〃	芥川廃寺	〃	b
15	〃	〃	〃	〃

No.	名称	遺跡名（地区）	遺構	文献
16	釘	郡家今城遺跡（東）	8号井戸	b
17	〃	〃	12号井戸	〃
18	〃	〃（89－2）	建物3b	h
19	〃	〃（〃）	ピット	〃
20	〃	〃（〃）	〃 116	〃
21	〃	岡本山古墳群（東）	火葬墓①	a
—	〃	〃（C区）	木棺墓1	e
—	〃	〃（〃）	木棺墓2	〃
—	〃	紅茸山遺跡	土壙墓15	b
22	〃	梶原南遺跡(Dトレンチ)	溝15	f
23	鋲	上田部遺跡		b
24	不明品	郡家今城遺跡（東）	B溝	〃
25				
～	〃	〃（89－2）	ピット174	h
28				
30	〃	梶原南遺跡(Dトレンチ)	溝15	f
31	未製品	郡家今城遺跡（東）	8号井戸	b

表2．鉄製品出土一覧

2は嶋上郡衙跡（27－L地区）の奈良・平安時代の包含層から出土したもので、全長10.7cm、刃元の身幅は1.4cm、棟厚0.2cmをはかる。茎は幅0.5cm、厚さ0.2cmをはかり、周縁には木質が依存していた。鏃は直径1.7cm、短径1.1cm、厚さ1mmの鹿角製である。3は現存長8.4cm、最大幅1cm、厚さ0.3cmをはかり、4は現存長8cm、最大幅1cm、厚さ0.2cmである。ともに郡家今城遺跡（東地区）8号井戸より出土している。

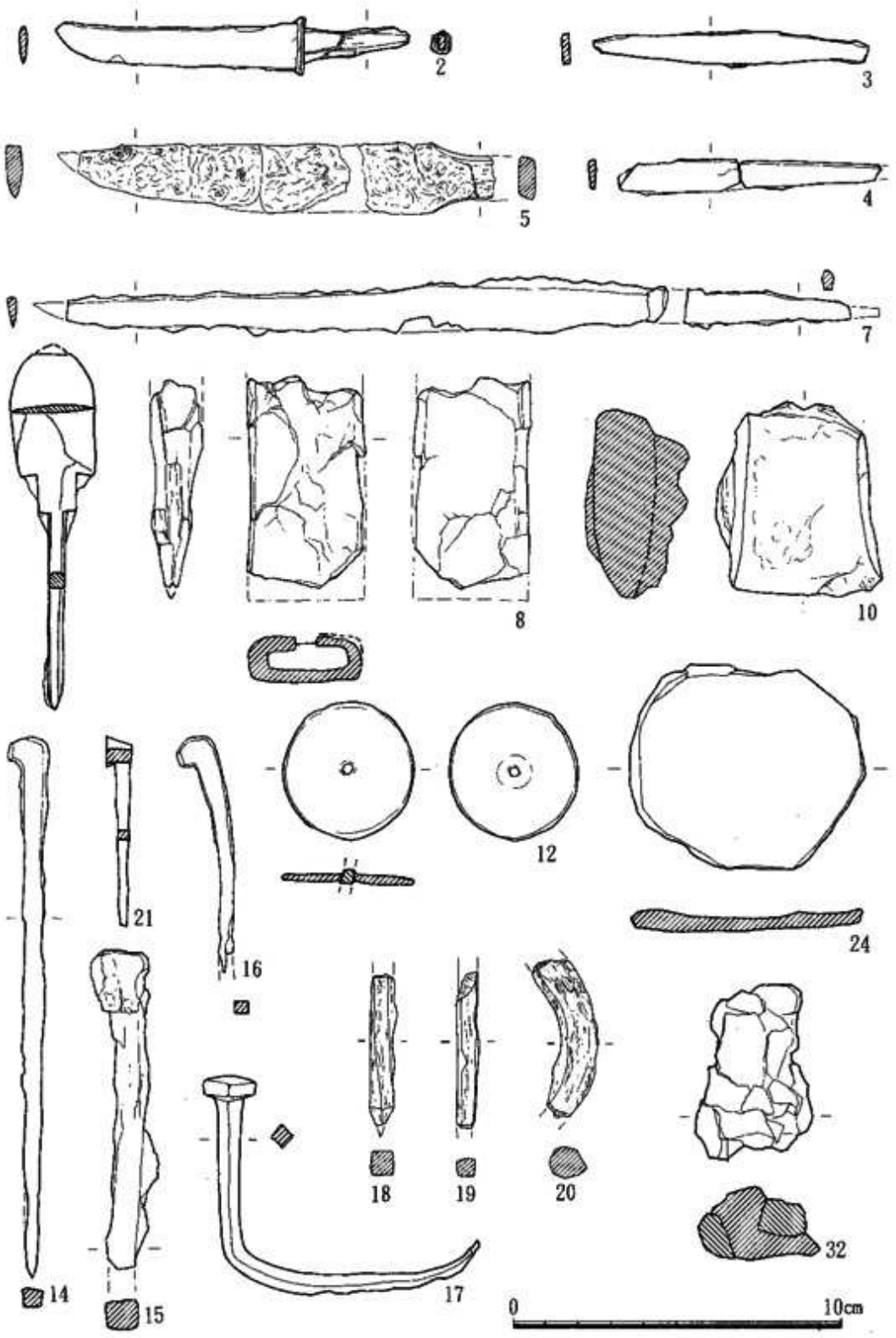


図2　奈良・平安時代の鉄製品（1）　嶋上郡衙跡（1・2）　芥川廃寺（14・15）
郡家今城遺跡（3～5，8・10・11・16～20・24・32）
岡本山古墓群（15・21）
鏃（1）　刀子（2～5・7）　斧（8・10）　紡錘車（12）
釘（14～21）　用途不明品（24）　未製品（32）

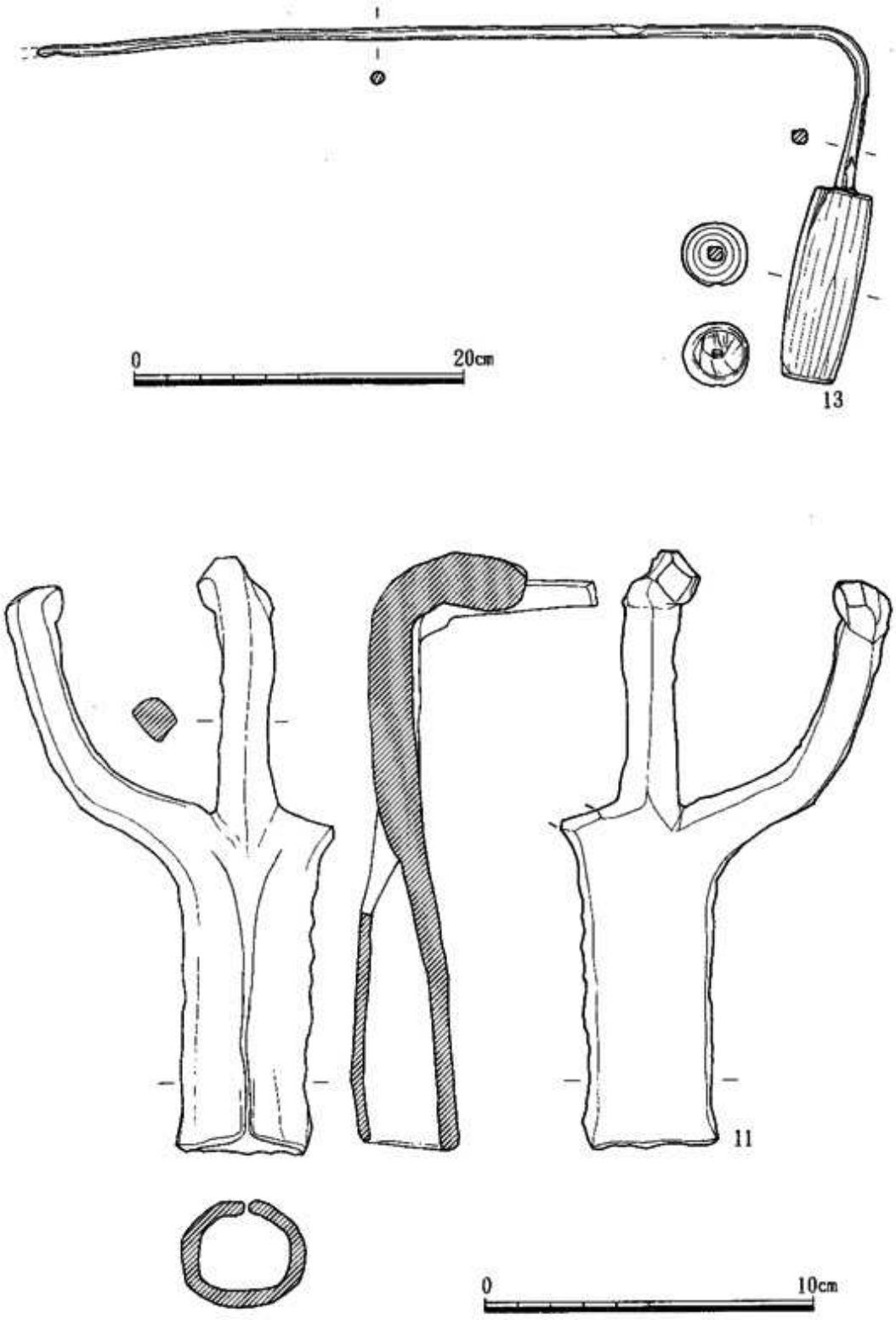


図3　奈良・平安時代の鉄製品（2）　高槻城下層遺跡：鍵（13）　郡家今城遺跡：くまで（11）

5は郡家今城遺跡（89－2地区）の柱穴より2分割した状態で出土したもので、刃元の身幅は2.1cm、棟厚0.5cmをはかる。茎は現存長4cm、幅1.2cm厚さ0.5cmをはかる。6はかなり腐食が進んでいる。身幅は現存部で約1.7cm、厚さは0.6cmあり、茎は幅1cm、厚さ0.4cmをはかる。7は現存長24cm、幅1.3cm、棟厚3mmをはかり、茎は最大幅9mm、厚さ4mmで端部にむかうほど細くなる。全体に錆化が進んでいる。岡本山古墳群・木棺墓1に副葬されていた。ツゲノ遺跡（16調査区）ＳＫ０１から出土した刀子は現存長9.5cm、幅1cmあり、木質が依存していた。

斧（8～10）

斧は3点あり、すべて郡家今城遺跡からの出土である。8は手斧で現存長6.2cm、幅3.4cm、厚さ1.5cmをはかる鍛造品である。袋状に加工した装着部の内側には木質が遺存する。東地区8号井戸出土。10は全長5.4cm、刃幅4.7cm、最大厚1.9cmをはかる鍛造品である。93－2地区土坑1からの出土である。

くまで（11）

全長18cm、現存幅10.1cmをはかる鍛造品である。爪はいずれも先端を欠く。現存長は約12cmをはかり、断面は一辺約1cmの方形をなす。現存するのは2本であるが、もとは3本の爪を接着していたようである。装着部は厚さ0.5cmの鉄板を袋状に折り曲げて外径3.8cm、長さ10cmの円筒形とする。郡家今城遺跡（西地区）・井戸10から出土したもので、奈良県平城京跡に出土例がある。

紡錘車（12）

郡家今城遺跡（東地区）・5号井戸から出土したもので直径4cm、厚さ0.25cmの円盤の中心に直径0.3cmの心棒がつく。心棒の両端は欠失する。

鍵（13）

高槻城下層遺跡・井戸3から出土した鍵は、最大径4cm、長さ11.5cmの円柱状をなす木製の柄に現存長51cmの鉄棒を差し込んだものである。鉄棒は柄から約10cmのところでＬ字状に屈曲する。断面は柄の近くで一辺0.9cmの方形をなし、先端にむかうとともに断面形は直径0.6～0.7cmの円形に変化している。類例は少なく、大阪府はさみ山遺跡と京都府長岡京跡にみられる程度である。

釘（14～20）

最も出土点数が多い。断面は一辺3～9cmの方形をなし、頭部の形状には方頭（17）と折頭（14～16・21・22）の2種類ある。14は芥川廃寺で出土した完形品で全長16.3cm、幅0.6cmをはかる。

未製品（31）

郡家今城遺跡（東地区）8号井戸からの出土品で、先に紹介した刀子（3・4）に伴出する。用途不明鉄製品と報告されているが、玉鋼を結合させたような状態やガスが噴出したような気泡がみられることなどから、鉄器の未製品とした。形状からすれば鉄斧の未製品かもしれない。

高槻市内から出土する鉄製品は、墳墓から出土した釘を除けば、まとまって出土した例はない。比較的調査のすすんでいる郡家今城遺跡は、嶋上郡衙跡との位置関係や出土遺物などからこれにかかわる官人層が居住する集落とされている。ここでは刀子が4点と他の遺跡に比べて比較的出土が多いことから、出土鉄製品も遺跡の性格を反映しているといえよう。そのほか特徴的な遺物としては、高槻城下層の鍵があげられる。この鍵が出土した井戸3は横板井籠組という構造をもつうえ、掘形からは和銅開珎1、萬年通寶4、神功開寶9の合計14枚の銭貨が出土するなど、特異な状況を呈している。隣接する上田部遺跡から木簡や「田子」と記された土器が出土していることと合わせ、興味深い資料である。

最後に鋳・鍛造関連遺物について簡単にふれておく。これまでに郡家今城遺跡、上田部遺跡、梶原南遺跡で羽口や鉄滓などの鋳・鍛造に関連する遺物が少量出土している。これらの遺物には焼土坑の埋土やその周辺から出土するものもあり、小規模な鍛造をおこなっていたとかんがえられる。ただ、その出土量や遺構の検出状況からすれば、専業的なものとは言い難い。むしろ必要に応じて工人が来て作業をおこなったとみるのが妥当であろう。

参 考 文 献

a）紅茸山及岡本山東地区の調査	高槻市教育委員会	1966
b）嶋上郡衙跡発掘調査概要	大阪府教育委員会	1971
c）高槻市史6　考古編	高槻市史編纂委員会	1973
d）嶋上郡衙跡発掘調査概要・Ⅳ	大阪府教育委員会	1974
e）昭和56・57・58年度高槻市文化財年報	高槻市教育委員会	1985
f）梶原南遺跡発掘調査報告書	梶原遺跡調査会	1988
g）ツゲノ遺跡発掘調査概要・Ⅱ	大阪府教育委員会	1988
h）嶋上郡衙跡他関連遺跡発掘調査概要・14	高槻市教育委員会	1990
i）高槻市文化財年報　平成2年度	高槻市教育委員会	1992
j）嶋上遺跡群18	高槻市教育委員会	1994

Ⅳ　研究ノート

郡家今城遺跡の軒丸瓦

高　橋　公　一

1．はじめに

昨年おこなわれた郡家今城遺跡（93－5）の調査では、奈良・平安時代の掘立柱建物や井戸などが検出され、集落の構造や宅地の利用状況などに新たな知見が得られた。また、それまで本遺跡では微量の出土数にとどまる丸・平瓦が95点、軒丸瓦が2点出土し、瓦葺き建物の存在を推定することが可能となった[1]。

さて、軒丸瓦2点のうち1点は瓦当部がほぼ完形で、奈良時代の軒丸瓦では郡家今城遺跡はもとより嶋上郡内でも初出のものである。本稿ではこの軒丸瓦と、1969年の調査で出土した軒丸瓦について新たに同笵関係が確認できたので紹介する。

2．単弁蓮華文軒丸瓦

単弁蓮華文軒丸瓦（図版第33、図1－1）は、93－5次調査区北端部の大土坑1から出土した[2]。

外区に細かい線鋸歯文と珠文がめぐり、内区には細線で縁どりする13弁の単弁蓮華文にくさび形の間弁の配する。中房は小さく平坦で圏線によって囲まれる。蓮子は1＋4である。中房付近は笵ずれのためか、やや明瞭でない。

瓦当裏面下半部と瓦当側面下半部はケズリで仕上げ、瓦当裏面中央部には斜め方向の強いナデがみられる。瓦当側面上半部は横方向のケズリの後、横方向のナデを施すが、一部に斜め方向のタタキの痕跡が残る。瓦当の厚さはおよそ3.5㎝である。

丸瓦は瓦当との接合位置ではずれて抜け落ち、瓦当裏面には丸瓦の痕跡が溝状に残る。この溝の丸瓦部凹面に接する部分全面には布目がポジで残っており（図版第34－a）、「接合溝」を彫らずに、大量の接合粘土によって丸瓦を接合していたことがわかる。丸瓦の取り付け位置は瓦当天部から約3㎝下ったところにあたる。

胎土には砂粒・小礫を含むが、焼成は良好で堅緻、淡青灰色を呈する。

この軒丸瓦は、瓦当文様の構成や大きさなどが、平城宮6135型式B種にきわめて近いことが指摘できた。今回、実見して検討した結果、本例は6135型式Bb種と同笵で

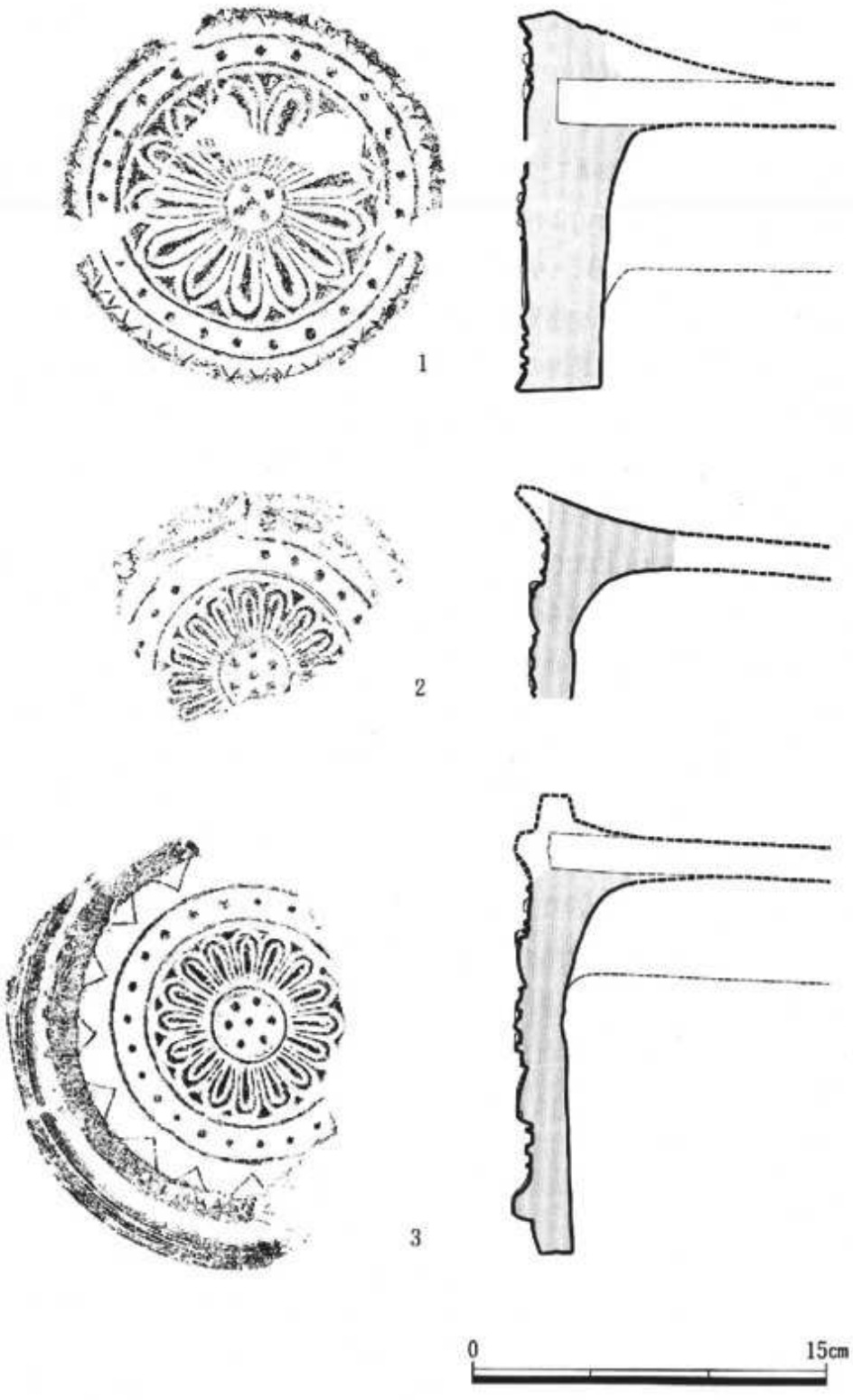


図1　単弁蕨手文軒丸瓦・複弁蕨手文軒丸瓦
（郡家今城遺跡出土1・2，梶原寺出土3）

あることが確認できた。

平城宮6135型式はA～Eに細分するが、A・B両種が大多数であり、両種は、瓦当がきわめて薄く、丸瓦の取り付く位置が瓦当頂部に近いという特徴がみられ、平城宮出土軒瓦編年Ⅱ期（養老5年～天平17年）に比定されている。また造酒司指定地の西側の築地に囲まれた官衙地域で多用されたこと[3]、さらに平城宮以外では法隆寺[4]、西大寺[5]にあることが報告されている。そしてB種は笵の彫り直しにより、Ba（オリジナル）、Bb（珠文が大）、Bc（中房圏線が太い）の3種に細分されている[6]。

本例は、珠文は大きいが中房圏線はオリジナルに近いことから、Bb種と同笵と認定された。しかし一方で、瓦当の分厚さや丸瓦の取り付け位置の低さなど、6135型式Bb種とは異なる点も指摘できた。さらに丸瓦の接合方法については、6135型式Bb種が「接合溝」を彫って丸瓦を差し込み[7]、接合粘土を加えるのに対し、本例では「接合溝」を設けない手法がみられ、大きく異なっている。

ところが、平城京出土の6135型式Bb種のなかにも、本例のように瓦当が分厚い個体があることがわかった。この個体は瓦当の厚さが3.5cmであり、丸瓦の取り付け位置は低い。接合方法は確認できなかったが、「接合溝」を彫らずに粘土だけで接合したために瓦当が厚くなり、さらに凸面側にも粘土をもるために取り付け位置が低くなったとも類推できよう。瓦当裏面・側面の調整手法も本例と共通する。また瓦当文様の蓮子、蓮弁、珠文にみられる笵キズ痕跡もすべて一致している。笵キズは瓦当の薄い個体にもみられるが、これほど明瞭でなく、分厚い個体および本例は、笵の痛みがより進行した段階のものと考えられる。つまり、従来報告されていたような瓦当が薄く丸瓦の位置の高いものは笵の痛みが少ない段階のものであり、瓦当が分厚く丸瓦の位置の低いものは笵キズの進行から後出のものとすることができる。便宜上、前者を古段階、後者を新段階とすれば、本例は6135型式Bb種新段階に属すると判断することができる。

3．複弁蓮華文軒丸瓦

複弁蓮華文軒丸瓦（図版34－b、図1－2）は、1969年の府立三島高校建設に先立つ調査で検出した井戸7から出土した[8]。丸瓦部と瓦当下半部を欠く。笵の摩滅のため、文様の仕上がりがよくない。内区の複弁蓮華文は、くさび型の間弁が延びて界線のように蓮弁を区画するいわゆるB系統で8弁に復元でき、蓮弁の盛り上がりは強い。中房には弱い圏線がみられ、1＋6の蓮子を配する。外区内縁には珠文、外区外縁は

瓦名	直径	内区					外区広	外区					備考
		中房径	蓮子数	弁区径	弁幅	弁数		内縁		外縁			
								幅	文様	幅	高	文様	
単弁蓮華文軒丸瓦1	160	25	1+4	115	16	T13	23	13	S24	10	4	LV	平城宮6135Bbと同笵
複弁蓮華文軒丸瓦2			1+6			F8		14	S			LV	梶原寺出土例と同笵

T：単弁　F：複弁　S：珠文　LV：線鋸歯文　単位mm

郡家今城遺跡出土軒丸瓦計測表

大半を失うが、大ぶりの線鋸歯文がめぐる。内区と外区を画する圏線との連弁の間には笵キズによってできた突起がみられる。

瓦当裏面は縦方向のナデツケの後、円弧方向のナデ、丸瓦部凸面は縦方向のケズリの後、縦方向のナデで仕上げる。

胎土は緻密、焼成は良好で堅緻。淡灰色を呈する。

本例は内区に複弁蓮華文、外区に線鋸歯文と珠文を配する平城宮系の軒丸瓦であり、平城宮所用軒丸瓦と同笵ではないかといわれてきたが、今回、文様の構成、配置、大きさを検討したところ、該当するものは無く、同笵関係が成立しないことが明らかとなった[9]。

ところが、嶋上郡内出土の軒丸瓦を再検討するうちに梶原寺に同笵の軒丸瓦があることが新たにわかった。梶原寺は、嶋上郡の東部に位置する白鳳時代創建の古代寺院である。この軒丸瓦（図1－3）は瓦当外縁の外側に一段低い平縁をつけ、外縁端部をカマボコ状に丸く加工した特異なものである[10]。瓦当裏面をていねいにナデて仕上げ、胎土に若干の砂粒を含み、暗褐色である点で本例と異なっており、さらに瓦当文様が非常にシャープに仕上がっているので、同笵とはにわかには信じ難い。内区と外区を画する圏線と連弁の間の笵キズ痕跡は、ちょうどその部分を欠いているので確認できない。しかし文様構成は同じであり、同笵と考えられる。文様の仕上がり具合から、梶原寺出土例は本例に先立って製作されたことは明らかで両者には一定の時間的な差が認められる。

4．まとめと若干の予察

以上のように、郡家今城遺跡出土の２点の軒丸瓦は、それぞれ平城宮、梶原寺と同笵であった。ここでは、この結果から想起される問題の一端にふれ、まとめとしたい。

まず、単弁蓮華文軒丸瓦は平城宮6135型式Ｂb種と同笵で、しかも瓦当の厚みや丸瓦の位置が一致する個体が平城宮で出土している。そして笵を彫り直したＢc種も平城宮から出土しており、Ｂb種の段階での笵の移動を想定することは難しい。やはり平城宮に供給されるべき製品がもちこまれたものと思われる。では、なぜもちこまれたのか。畿内の古代寺院にみられる平城宮系軒瓦や、難波宮と同笵の軒瓦については、在地の豪族を掌握し、街道や水運を確保するために行われた寺院整備という名目の統制の結果であると理解されている[11]。郡家今城遺跡は北側に山陽道を介して嶋上郡衙と接しており、両者には強い結び付きが指摘されており、一般的な集落とは考えにくい[12]。こうした一連の活動が集落におよんでいたとしても不思議ではないかもしれない。しかし、運ばれたのは、平城宮以外では２・３の出土例のみで宮内でも出土地が一定の範囲に限られるという6135型式Ｂb種である点が特異である。ここでは、造寺修寺活動とは別の、中央との私的な、もしくはより直接的な関係の成果と推定しておく。

つぎに、複弁蓮華文軒丸瓦は梶原寺出土のものと同笵であった。しかし、笵の傷みから一定の時間差が想定でき、手法や胎土に違いがみられることから同一の造瓦工房・工人の作とは考えられず、笵の移動が想定できる。では、この笵はどこで使用された後、どこへ運ばれたのか。梶原寺の北側の斜面には７世紀中頃から８世紀前半の瓦窯跡群が検出されたおり[13]、奈良時代に造瓦工房があったことが文献からもうかがえる[14]。実際にこの工房で問題の軒丸瓦の笵を使用していたのか今のところ不明だが、他の地域での出土が知られておらず、その可能性は高い。一方、郡家今城遺跡の集落内に、造瓦工房があったとは考えられないので、北400mに位置する芥川廃寺からの搬入品と考えるのが妥当であろう。芥川廃寺は三島地方の有力豪族である三島県主の氏寺として建立され、奈良時代には郡寺として性格をもっていたと考えられている。当然その管理運営は郡衙中枢部に掌握されていたに違いなく、同様に密接な関係である郡家今城遺跡に芥川廃寺の瓦が運ばれても不思議ではあるまい[15]。さて、寺の北西500mには平安時代中期の瓦窯が存在する[16]。寺跡からは白鳳時代から平安時代の瓦が出土し、奈良時代に属する軒瓦には均整唐草文軒平瓦、重圏文軒丸瓦、複弁蓮華文軒丸瓦がみられる[17]。このうち、均整唐草文軒平瓦には、難波宮6664Ａ型式と同笵だが顎の形態が異なる例があり[18]、奈良時代の造瓦工房の存在も推定されている[19]。現

在のところ、笵の移動先としては、芥川廃寺造瓦工房がもっとも有力となろう。とすると、今まであまり注目されなかった梶原寺と芥川廃寺の関係において、瓦笵の移動という現象を通して、あらたな視点がひらかれると思われる。

今回、新たに同笵と確認された２つの事例について記した。軒瓦の同笵関係の追求は、遺跡の未知の側面をかいま見ることのできる有力な手がかりであり、三島地方においては蓄積された資料を見直す作業が急務であるといえる。これらについては、おりにふれて、発表していきたいと考えている。

なお、平城宮出土軒瓦との同笵認定にあたっては、奈良国立文化財研究所　山崎信二氏、小沢毅氏、次山淳氏に大変お世話になりました。記して感謝いたします。

註

1　高橋公一　「郡家今城遺跡（93－５）の調査」『嶋上遺跡群　18』　1994年　高槻市教育委員会

2　註１文献　図版36－37にあたる。

3　奈良国立文化財研究所　『奈良国立文化財研究所基準資料Ⅱ　瓦編２解説』　1975年

4　法隆寺では、Ａ・Ｂ種２種類が出土している。
法隆寺　『法隆寺防災施設工事・発掘調査報告書』　1985年

5　西大寺では6135型式Ａ種が出土している。
西大寺　『西大寺防災施設工事・発掘調査報告書』　1990年

6　山崎信二氏のご教示による。

7　花谷浩氏は、法隆寺出土の6135型式Ｂ種の丸瓦接合方法を明らかにしているが、平城宮出土の6135型式Ｂb種も同様の接合方法であることを実見して確認した。
花谷　浩　「飛鳥--奈良時代の軒丸瓦について」『伊珂留我　法隆寺昭和資財帳調査概要７』　1987年　法隆寺昭和資財帳編纂所

8　この軒丸瓦は以下の文献で発表されている。
高槻市史編さん委員会　『高槻市史　第６巻　考古編』　1973年　PL545-246
島谷　稔　「摂津芥川廃寺の研究－高槻上代寺院跡の研究（二）」『大阪文化誌』第３巻第１号　1977年　第４図12

9　かつて、「難波宮と同笵」と指摘されていたが、難波宮出土の蓮華文軒丸瓦のうち、本例と文様構成が似るのは6303型式だが明らかに異笵である。
高槻市史編さん委員会　『高槻市史　第６巻　考古編』　1973年　Ｐ131　表　備考欄

10　この軒丸瓦は以下の文献で発表されている。
高槻市史編さん委員会　『高槻市史　第６巻　考古編』　1973年　PL499-4
島谷　稔　「高槻上代寺院跡の研究（一）」『大阪文化誌』第１巻第１号　1974年　第９図　瓦番号№６

11 森　郁夫　「畿内における平城宮系軒瓦の一側面」『国学院雑誌』78－9　1977年
網　伸也　「後期難波宮と古代寺院」『古代』第93号　1992年

12 墨書土器や三彩、帯金具など特殊な遺物が出土することや、立地などから郡家今城遺跡は郡衙の役人が住んでいた村としている。
高槻市教育委員会　「郡家今城遺跡」『遺跡ガイド7』　1991年

13 名神高速道路内遺跡調査会　『梶原瓦窯跡現地説明会資料』　1992年9月26日
名神高速道路内遺跡調査会　『梶原瓦窯跡現地説明会資料』　1993年5月15日

14 天平勝宝8歳11月2日に造東大寺司から梶原寺に6000枚の瓦を発注していることが、正倉院文書にみえる。
高槻市史編さん委員会　「19　摂津職解」『高槻市史　第3巻　史料編Ⅰ』　1973年

15 註9文献でも芥川廃寺からの搬入としている。

16 森田克行　「Ⅱ　芥川廃寺瓦窯跡」『嶋上郡衙跡他関連遺跡発掘調査概要・9』
1985年　高槻市教育委員会

17 これらは註10文献に網羅されている。ところで、これらの他に本例と文様構成、大きさの等しい軒丸瓦が存在する。文様面の摩擦がはげしく、瓦当部の1/4を欠いており同位置の笵キズ痕跡が見いだせないため同笵とは認定できない。この点についてはいずれ再考したいと思っている。

18 この軒平瓦は、森田克行氏が「Ⅱ－B種」に分類したもので、網伸也氏により難波宮6664A型式と同笵と判明した。
森田克行　「XⅡ　芥川廃寺出土の瓦について」『嶋上郡衙跡他関連遺跡発掘調査概要・15』
1991年　高槻市教育委員会
網　伸也　「後期難波宮と古代寺院」（前掲）

19 森田克行　「1．24－H・L、25－M・O・P地区の調査」『嶋上郡衙跡他関連跡発掘調査概要・7』　1983年　高槻市教育委員会
森田克行　「XⅡ　芥川廃寺出土の瓦について」（前掲）

脚付き土師質鍋について

橋本久和

1．脚付き土師質鍋とは

平安時代末から鎌倉時代にかけて、河内・摂津地方の一部に特異な鍋が分布している。土師質焼成で、半球形の体部に蓋受けとみられる受け口状口縁が付き、体部中位に三脚の付くものである。外面は指先でなでて仕上げ、内面は比較的粗いハケ目がほどこされている。京都周辺では三脚の付く煮炊具は羽釜に三脚の付く瓦質のものが良く知られている。ここでとりあげたものの形態をみると、同時期の京都周辺に一般的にみられる瓦質の鍋に三脚の付いたものである。畿内では京都周辺から淀川流域、近江の湖東地域に分布し、五徳（いわゆるカナワ＝鉄輪）に掛けた鉄釜模倣とみられる。13世紀前後に出現し、14世紀前半まで煮炊具の中心であった。

類似する出土資料がしばしばみられる。例えば、兵庫県の明石市魚住古窯跡群30号窯から出土したものは半球形の体部に「く」の字状の口縁がつづき、外面は平行線状の叩きがみられる。岡山県では内外面を粗くハケ目調整し、体部下位に三脚の付くものがみられる。やはり口縁部が「く」の字状であり、それぞれの地域の鍋を基本としていることがわかる。平安時代末に出現し、鎌倉時代に増加するものとされ、室町時代にはほとんどみられなくなる。神戸市灘区の郡家遺跡でも類似するものがみられ、共伴する瓦器椀などから13世紀代とみられる。山口県では瓦質で底部が格子叩きになって成形された「足鍋」がみられる。これにやや先行して13世紀には「足釜」が出現しているらしいが、「足鍋」自体は14世紀前半に出現し16世紀までつづく（岩崎仁志「防長地域の足鍋について」『山口考古第17号』1988年）。

このように、鍋や釜に三脚の付くものは瀬戸内各地にしばしばみられ、山口県を除き主に鎌倉時代に使用されたものである。三脚が付くという共通点はみられるが、地域によって鍋の形態や調整が異なる。淀川河床遺跡出土資料にも類例がみられるが、瀬戸内地方からの搬入品とみられる（藤本史子「淀川採集遺物の検討」『中近世土器の基礎研究IX』1993年）。このため、ここで取り上げた脚付き土師質鍋を初めて実見した時は、瀬戸内地方産ではないかと考えたが、瀬戸内地方では受け口状を呈するものは無く、畿内あるいは畿内周辺の製品として検討すべきであろう。この特異な鍋から畿内の中世土器生産の一端にふれてみたい。

2．出土例の検討

このような土師質鍋は吹田市都呂須遺跡で出土したのが初例である。その後、管見では北・中河内の大東市北新町遺跡・東大阪市若江遺跡、摂津の守口市八雲東（門真市西三荘）遺跡・同大庭北遺跡で出土し、合計５例が知られるようになった。何分出土例も少なく、現在のところ報告書に記されたものは２例にしか過ぎない。

吹田市都呂須遺跡

吹田市街地の遺跡で、溝ＳＤ０１から楠葉型・和泉型瓦器椀、土師器皿・杯、中国製陶磁器、東播系須恵器鉢など12世紀から13世紀にかけての遺物とともに出土している（図１－１）。口径28.6cm、脚を含めた器高は25.1cmである。脚は体部中程に外側へむかって付き、先端は細く接地面は折り返されている。外面は比較的細かく、内面は粗くハケ目調整され、脚にもハケ目が施されている。煤は外面全体に付着する。（「都呂須遺跡の発掘調査」『文化財紀要２』吹田市教育委員会　1989年）

守口市大庭北遺跡

遺跡は淀川南岸に形成された自然堤防上にあり、２区の方形区画状の溝２から楠葉型・大和型・和泉型瓦器椀や土師器皿、東播系須恵器鉢など13世紀から14世紀にかけての遺物とともに出土している（図１－２）。法量は口径26cm、脚の途中までしかないため器高は不明であるが27cm程度とみられる。ハケ目調整はみられず、ナデて仕上げている。やはり外面に煤が付着する。（『府営庭窪大庭北住宅立替工事に伴う大庭北遺跡発掘調査概要・Ⅰ』大阪府教育委員会　1984年）

3．鎌倉期手工業の一側面

従来、中世考古学に限らず広域に分布する遺物類は研究者間で注目され、それぞれの時代の特徴を説く時に取り上げられてきた。しかし、一方では、ここで取り上げた脚付き土師質鍋のように小地域に分布する遺物類もあり、むしろこのような遺物類ほど時代を解く鍵を握っているものとみられる。

脚付き土師質鍋の分布をみると、現状では河内北西部と摂津南西部にほぼ限られ、共通した文化や経済基盤のあったことが想像できる。この地域は淀川や三国川を利用した古代・中世の水上交通路に沿い、現在の東大阪市から大東市付近にあった深野池や新開地にも近く、広大な大江御厨縁辺部でもある。このため、この地域は各地との交易が盛んで多量の物資が流通したといわれる。しかし、遺物類を見る限り、畿内の一般的な中世遺跡から出土する遺物類との差異はそれほど認められない。唯一、大和

型瓦器椀が生駒西麓に濃密に分布することが最近の調査で確認されるようになり、大和との交易が活発であったことが指摘される。

さて、このような脚付き土師質鍋の分布にほぼ一致する鎌倉時代の手工業者集団がある。記録では河内北西部から摂津南西部にかけて鎌倉時代に活動した集団として蔵人所檜物座が知られている。檜物座は朝廷などの書籍・文書・記録類をいれる「納殿御所櫃」を蔵人所に貢納することを条件に、蔵人所から特定の地域内で独占的に檜物を販売する特権を与えられた。貞応2年（1223）の「蔵人所牒案」によると、豊中市の王家領椋橋荘檜物を中心に、北は川西市の久代荘今市・豊島市、西は武庫川に沿う西宮・小松など、東では東大阪市の河内国若江郡蒲田新開と守口市の茨田郡榎並・高瀬で活動していた。この檜物座の活動範囲と脚付き土師質鍋の分布と重なることは図2に示したとおりである。とくに、守口市と東大阪市の場合は記録と遺跡の位置が極めて接近していることがわかる。このため檜物と土師質鍋という異なる製品であるが、淀川を挟んで河内から摂津にかけて共通する物資の交易圏あるいは生活圏が存在していたものとみられる。記録にみられる檜物座についてはいろいろと解釈することができる。つまり、椋橋荘に住む檜物師が単独で交易したものかどうかということである。脇田晴子は各地の檜物師達が連合して、蔵人所檜物師

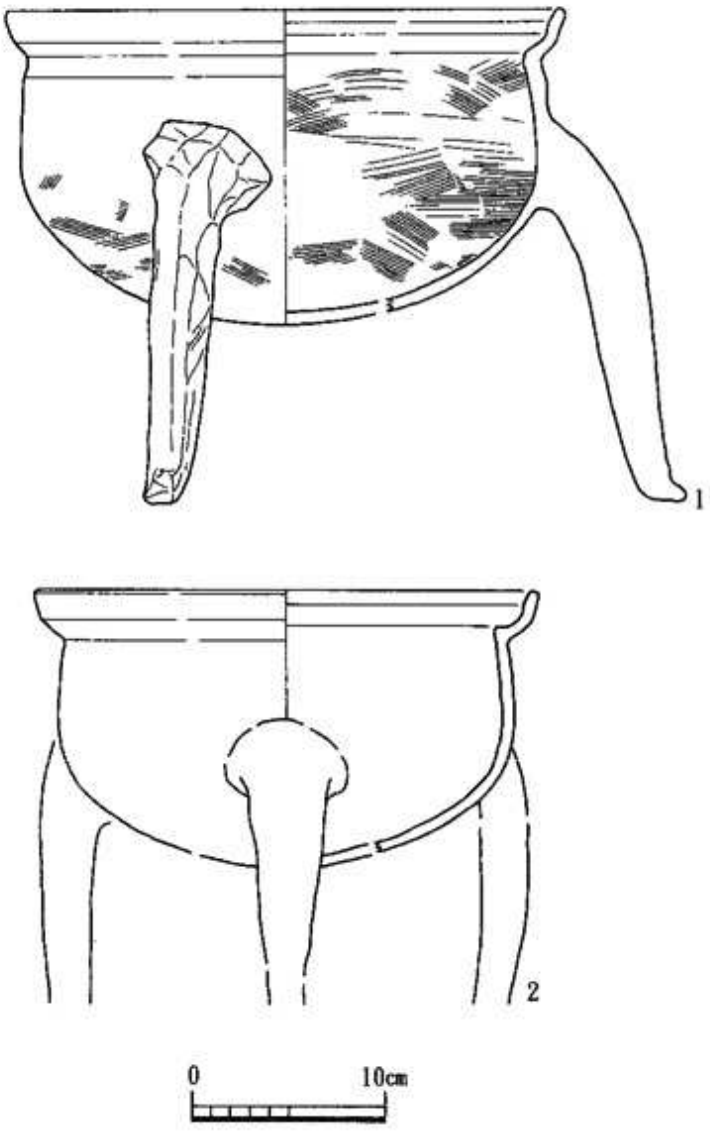


図1　脚付き土師質鍋

図2　主な出土遺跡と市

の身分を獲得したものとみている（脇田晴子「中世の商品流通と独占権」『中近世土器の基礎研究VI』1990年）。このような、手工業生産のありかたが土器についても認められるのであろうか。

畿内のこの時代の土器には東播系須恵器のように西日本一帯の広域に供給され生産地の限定できるものがある一方で、同一の製作手法をもつとはいえ瓦器椀・皿、土師器皿・杯などの生産地と分布域を知ることは至難の技である。従来から、楠葉型瓦器椀の生産地が枚方市楠葉東遺跡にあり、京都周辺から淀川流域に分布していることが知られ、最近生駒西麓地域に大和型瓦器椀が分布していることが知られるようになったが、在地の和泉型瓦器椀をみると質の精粗や内底面のヘラ磨きに多様性がみられる。それが、同一の遺跡や地域でみられることがしばしばある。このような現象は生産が小規模で、生産された瓦器椀が一定地域だけでなく広範囲に移動するためとみられる。

脚付き土師質鍋はどうであろうか。現状では資料が少なく、比較検討も不十分であるが、形態は類似しているものの同一の生産地とはみられず、消費地である各遺跡周辺で小規模に生産されたものとみられる。このため、この土師質鍋自体に商品として流通したという評価をあたえることは不適切であるが、中世前期の淀川流域や旧河内湖周辺では小規模な手工業生産とそれを流通させる組織・媒体の存在したことを想像することができる。このような小規模流通圏の解明は中世手工業生産をかんがえるうえで重要な作業といえる。

編集後記

平成4年度は、鴨上郡衙跡の正倉推定地で充実した調査をおこなったのをはじめ、郡家今城遺跡での古墳時代初頭の大規模な土壙墓群、さらには高槻城跡での『高槻城下図』所載の舟入川の検出など、多くの貴重な成果が得られました。その一方で、あまり目立たない発掘ではありますが、地道な調査も積みかさねられてきました。郡家本町遺跡ではじめてあきらかになった弥生時代後期の集住地区の調査や宮田遺跡で発見された完全な形をした磨製石剣の単独品などはその好例であります。本書ではこれらの成果の一部を掲載していますが、そのほかはさきに報告した『鴨上遺跡群17』に収録しています。あわせて参照していただければ、幸甚です。

また名神高速道路遺跡調査会からは、平成3年度にひきつづいて梶原古墳群と梶原瓦窯跡の調査概要を頂載しました。どちらも桧尾川以東地域で中心的な位置を占める重要な遺跡で、三島の歴史を語るうえで欠かすことができません。

資料紹介、研究ノートは4編をおさめることができました。基礎資料の蓄積と考察は文化財の調査研究をすすめるうえで不可欠であり、今後も継続していきたいとおもいます。とくに今年は徳丸先生から玉稿をいただき、感謝しています。

平成3年に史跡指定された新池埴輪製作遺跡は、4年度から史跡等活用特別事業（『ふるさと歴史の広場』事業）の適用をうけ、3カ年の計画で史跡公園として整備することになりました。現在工事は着々と進められており、平成7年には市民の皆さんに親しまれる歴史公園として公開していきたいとおもっています。

（森田克行）

図　版

図版第1

a．高槻城下図部分（中西家旧蔵文書）

b．高槻城舟入川跡土坑遺物出土状況

c．同左

図版第2

a．古曽部・芝谷遺跡　東側から見た調査区

b．古曽部・芝谷遺跡　竪穴住居跡と環壕

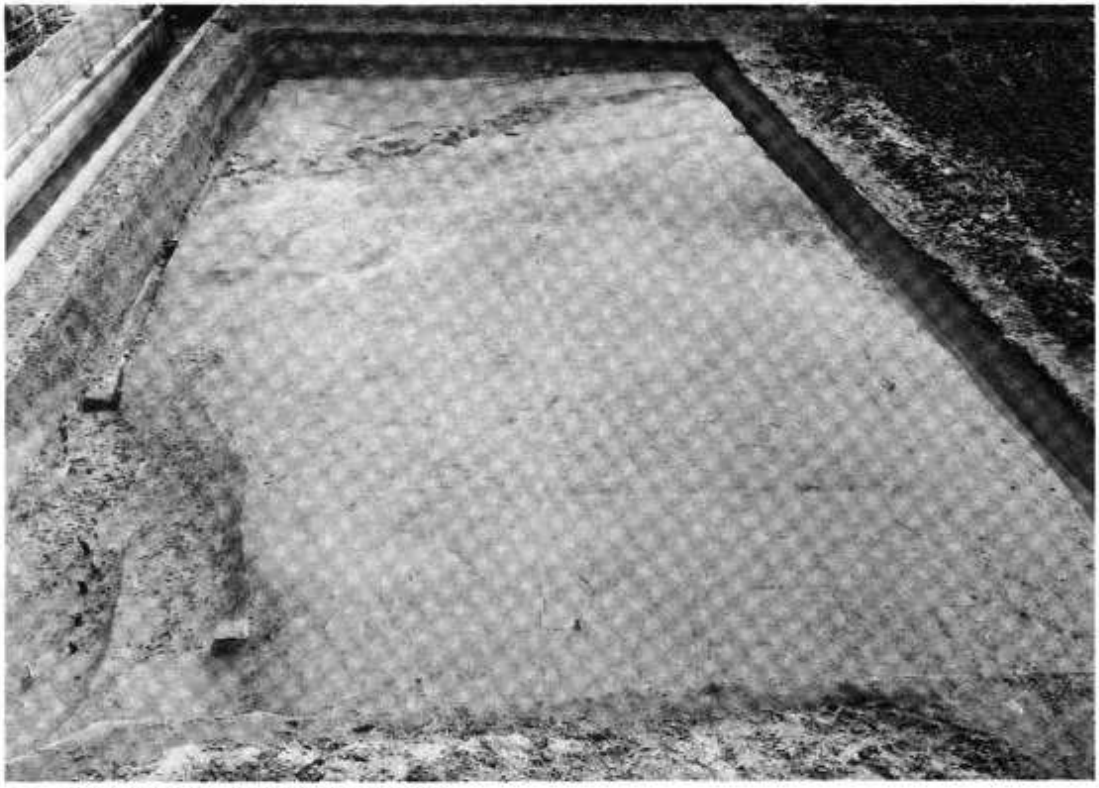
a．梶原古墳群　13号墳玄室（南側から）

b．梶原古墳群　13号墳三累環頭柄頭出土状況

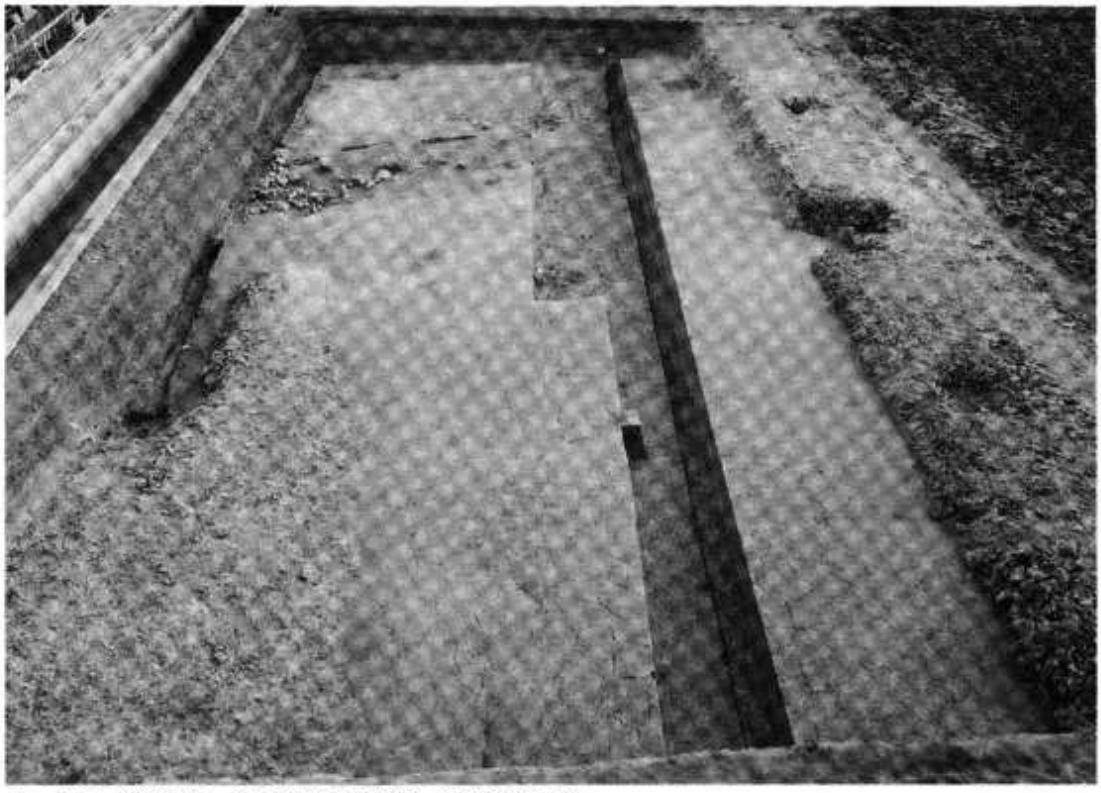
図版第4

a．梶原瓦窯跡　窯1（南側から）

b．梶原瓦窯跡　窯5（西側から）

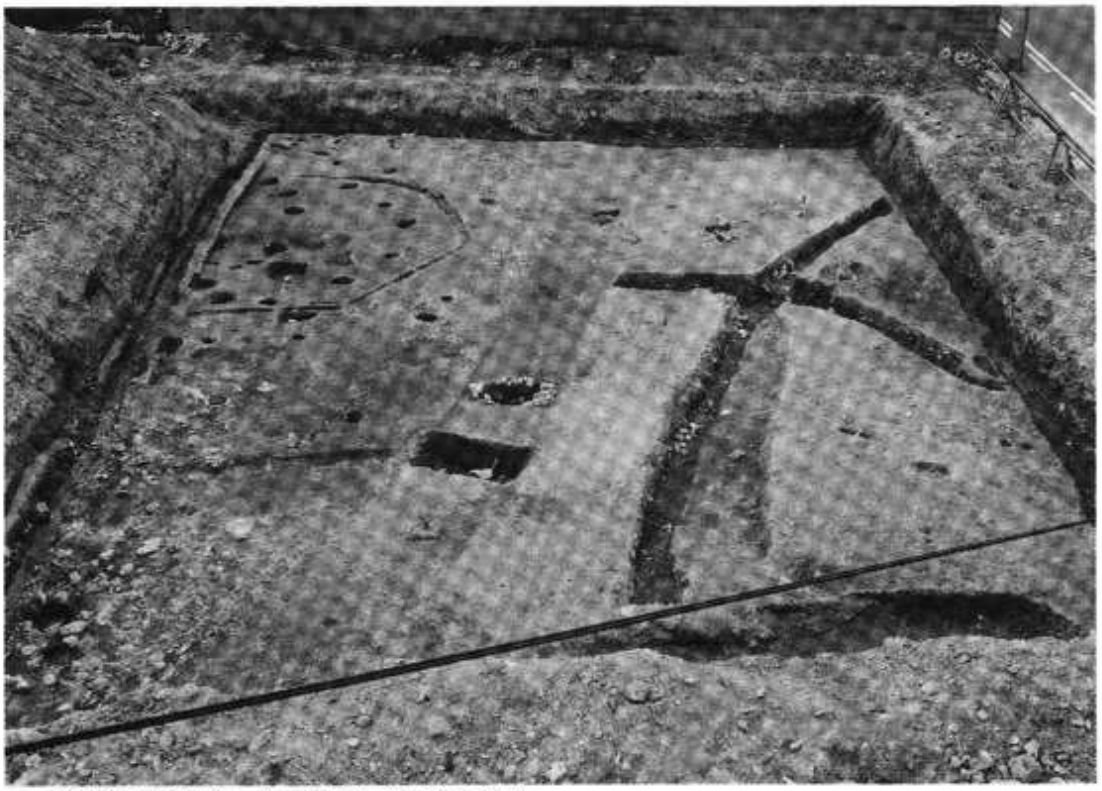


a．嶋上郡衙跡　全景（北側から）

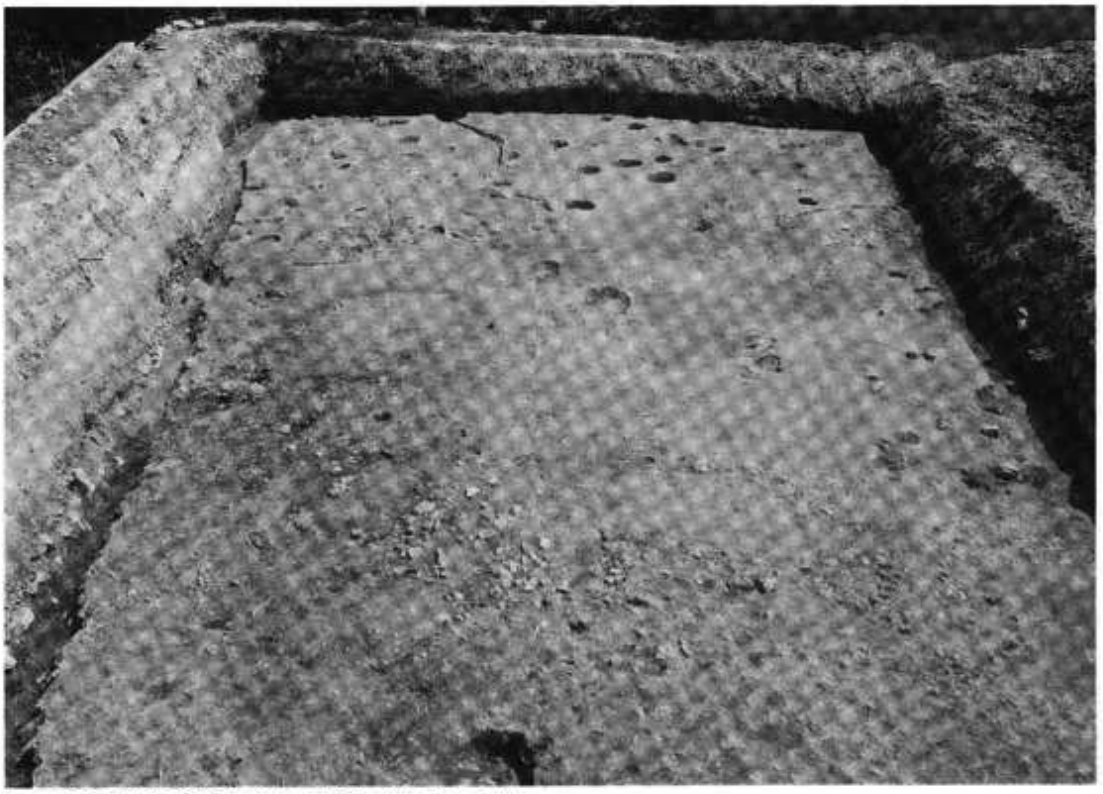


b．嶋上郡衙跡　全景断ち割り後（北側から）

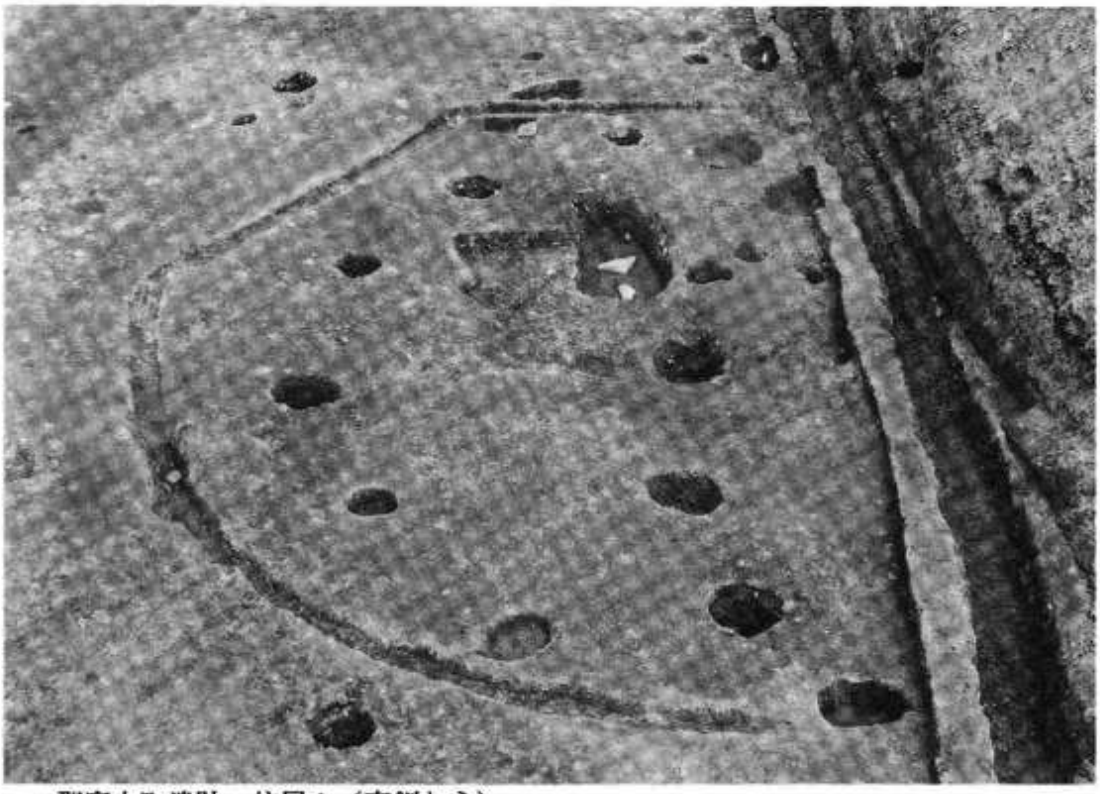
図版第6



a．郡家本町遺跡　全景西側（北側から）



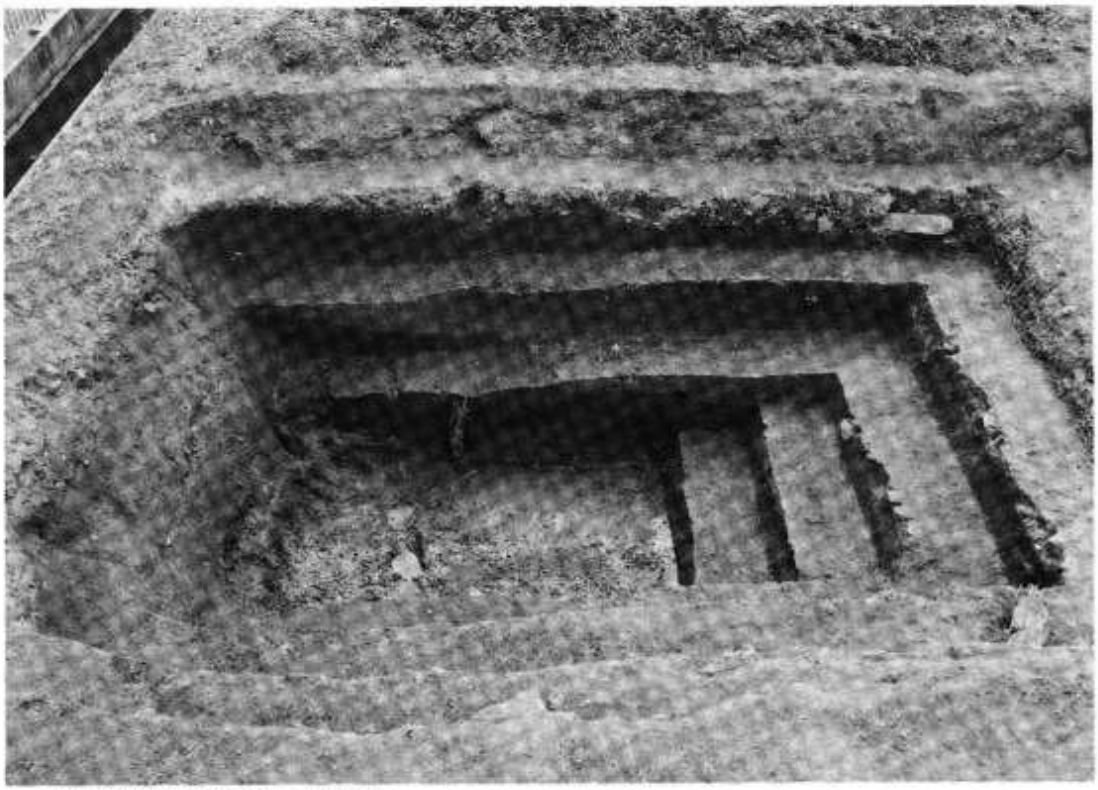
b．郡家本町遺跡　全景東側（北側から）



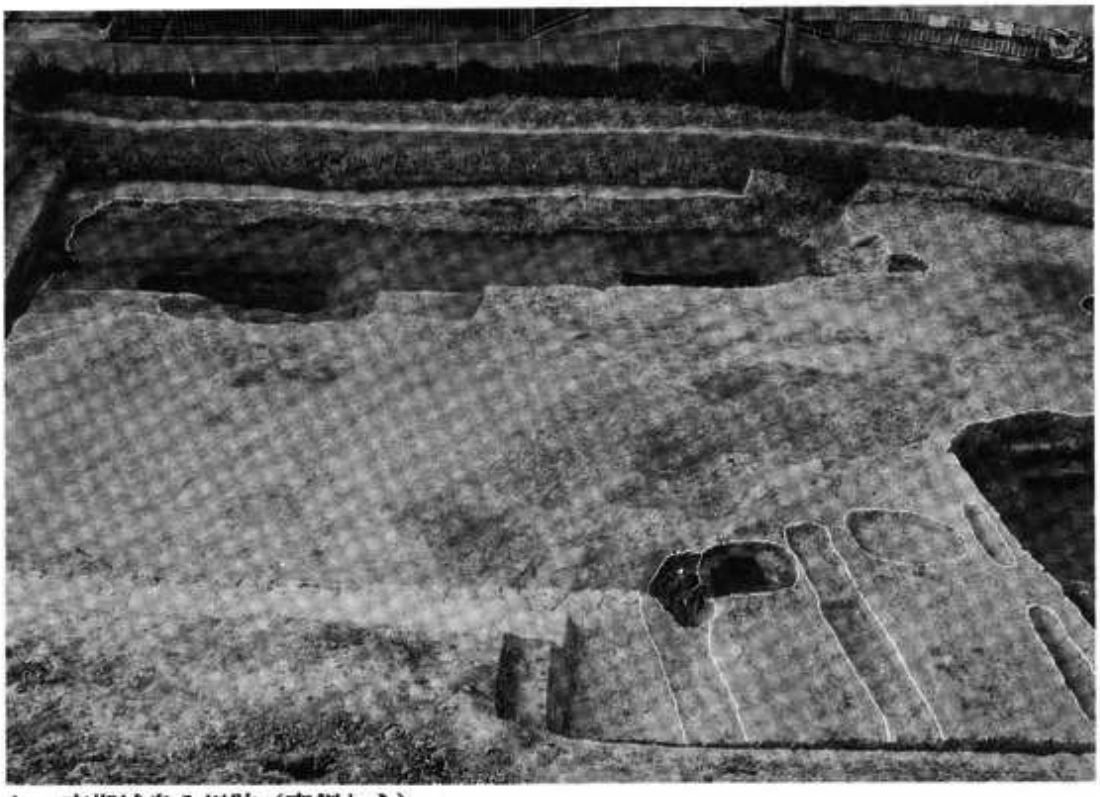
a．郡家本町遺跡　住居1（南側から）

b．郡家本町遺跡　住居1（東側から）

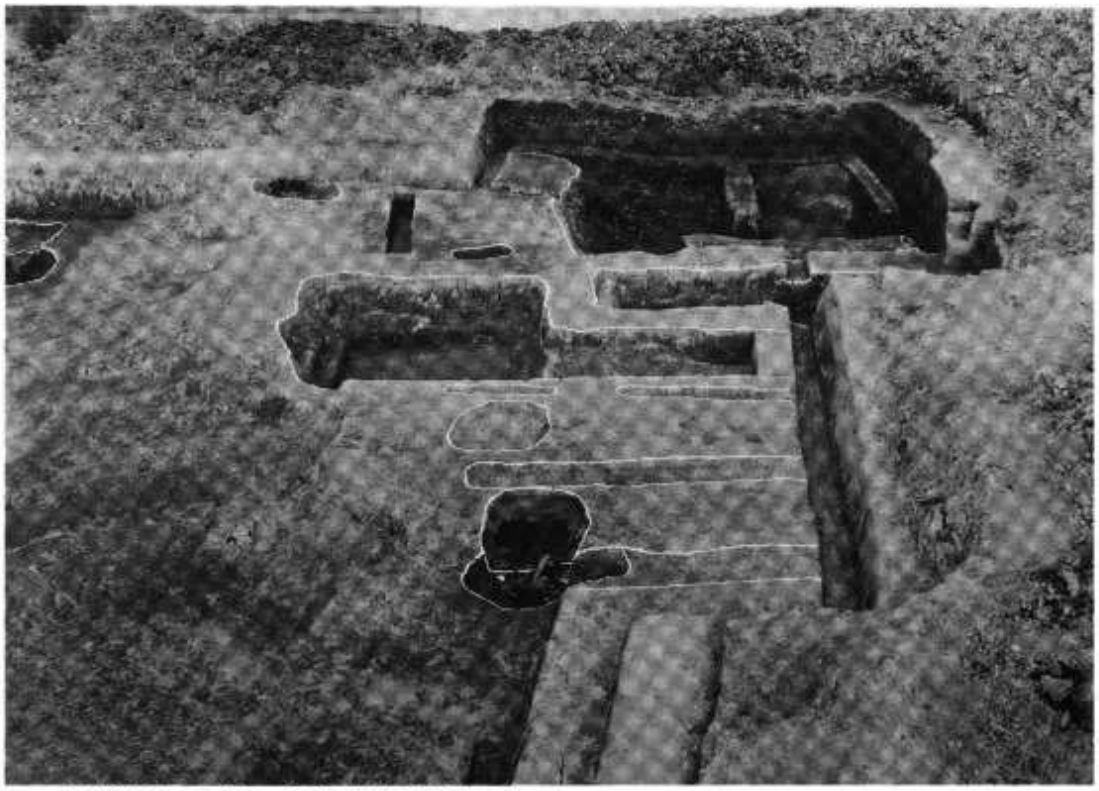
図版第8



a．高槻城外堀跡（東側から）



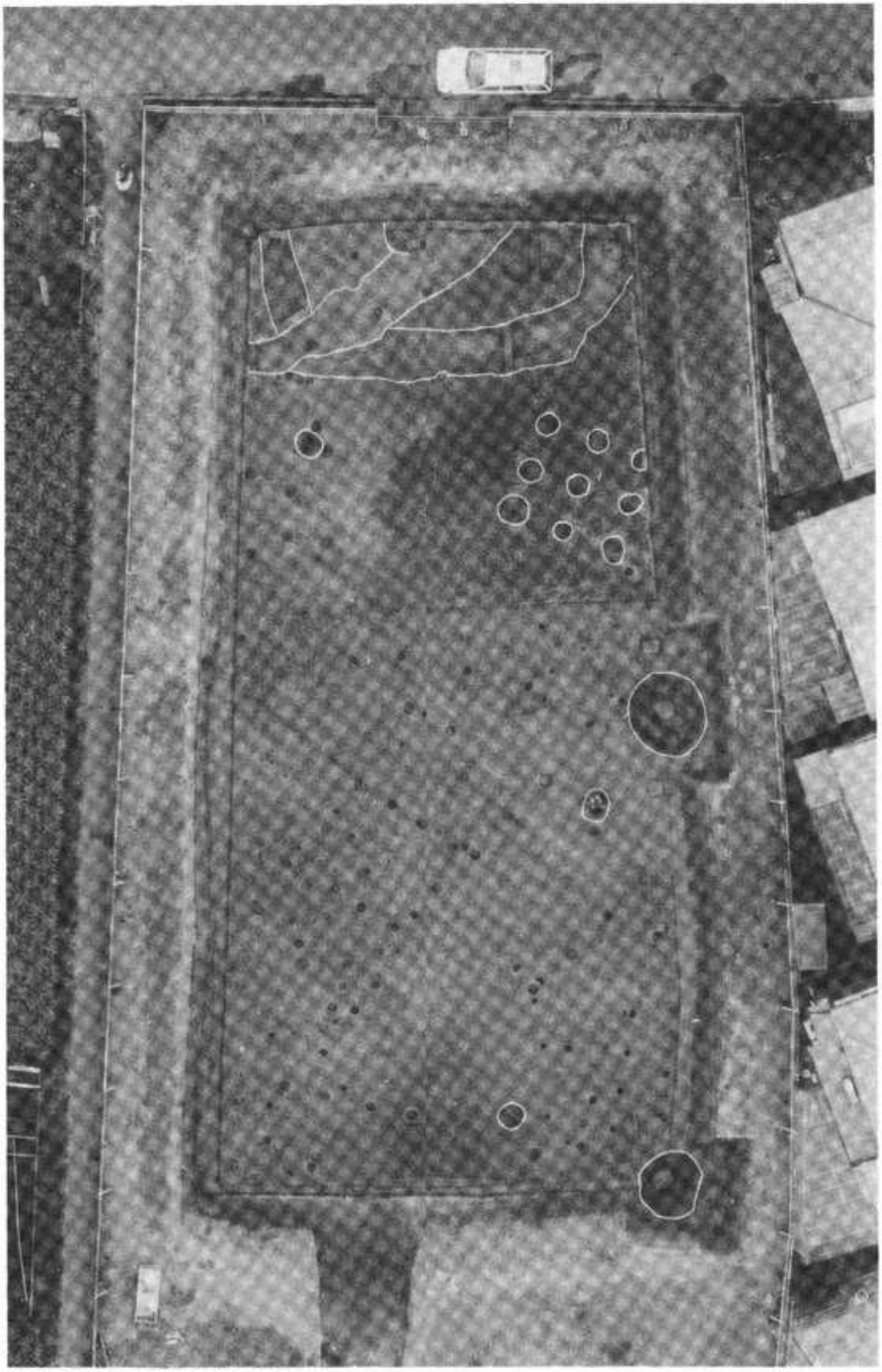
b．高槻城舟入川跡（南側から）



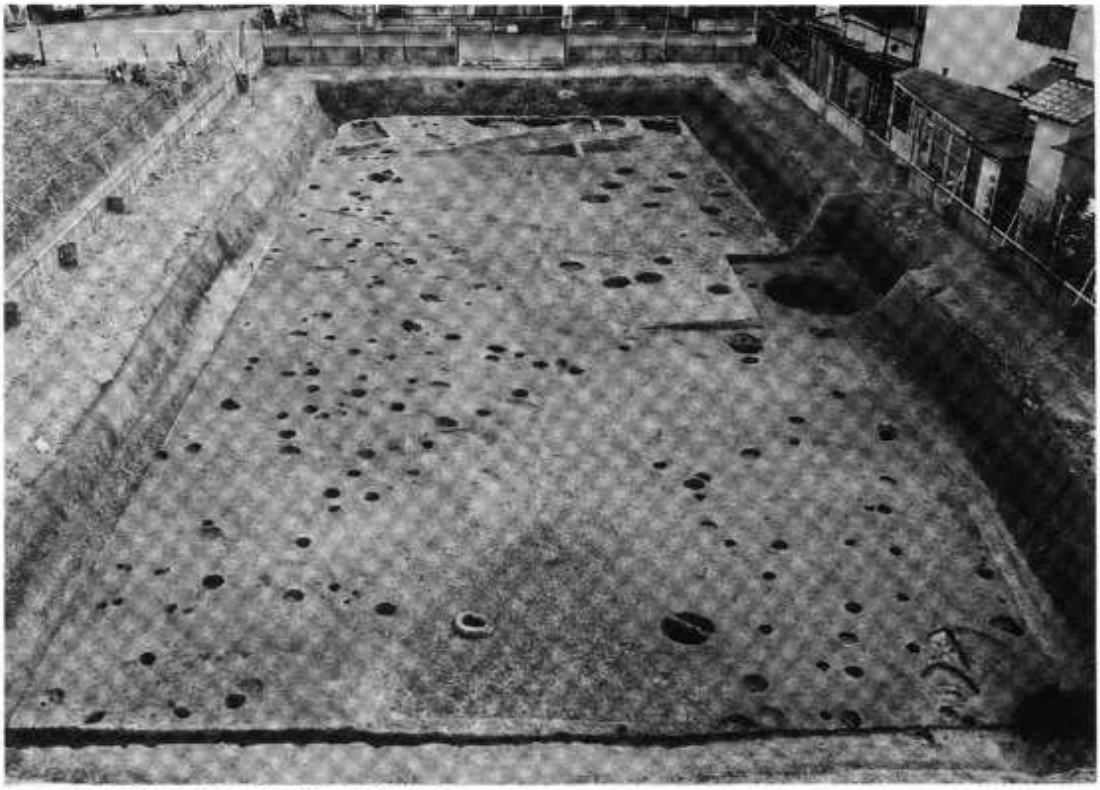
a．高槻城舟入川跡　土坑群（西側から）

b．高槻城舟入川跡　土坑出土遺物

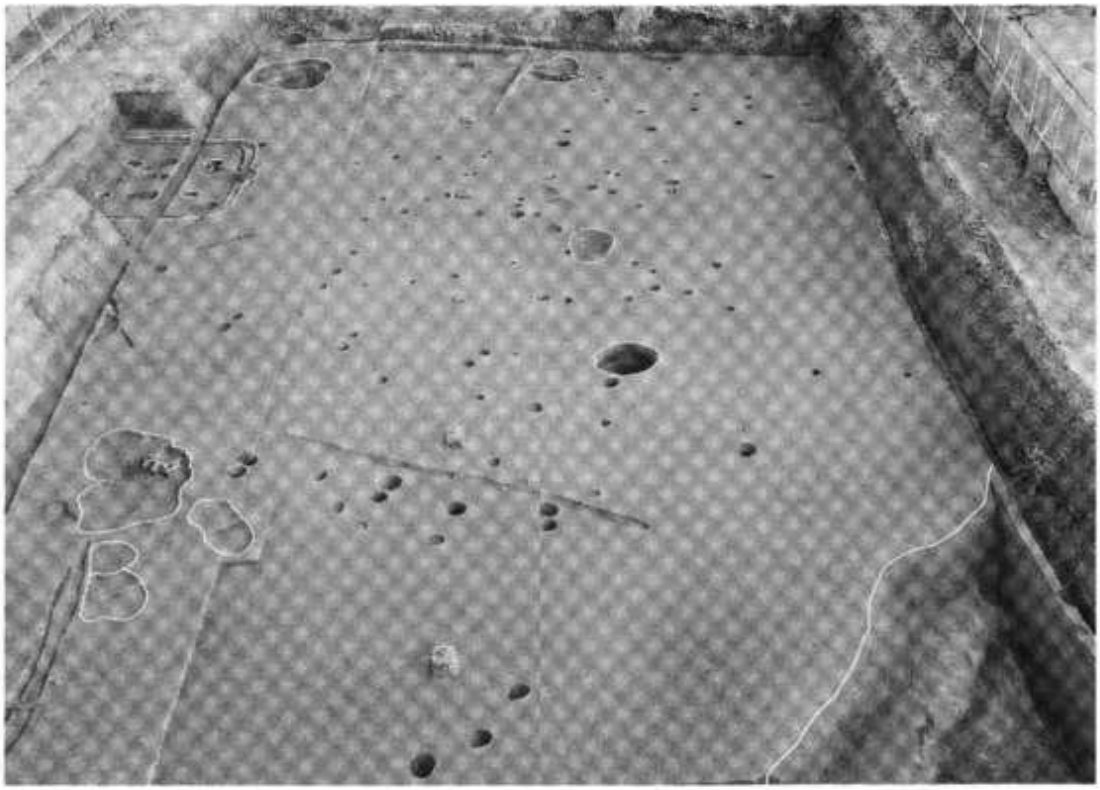
図版第10



安満遺跡A区東側空中写真

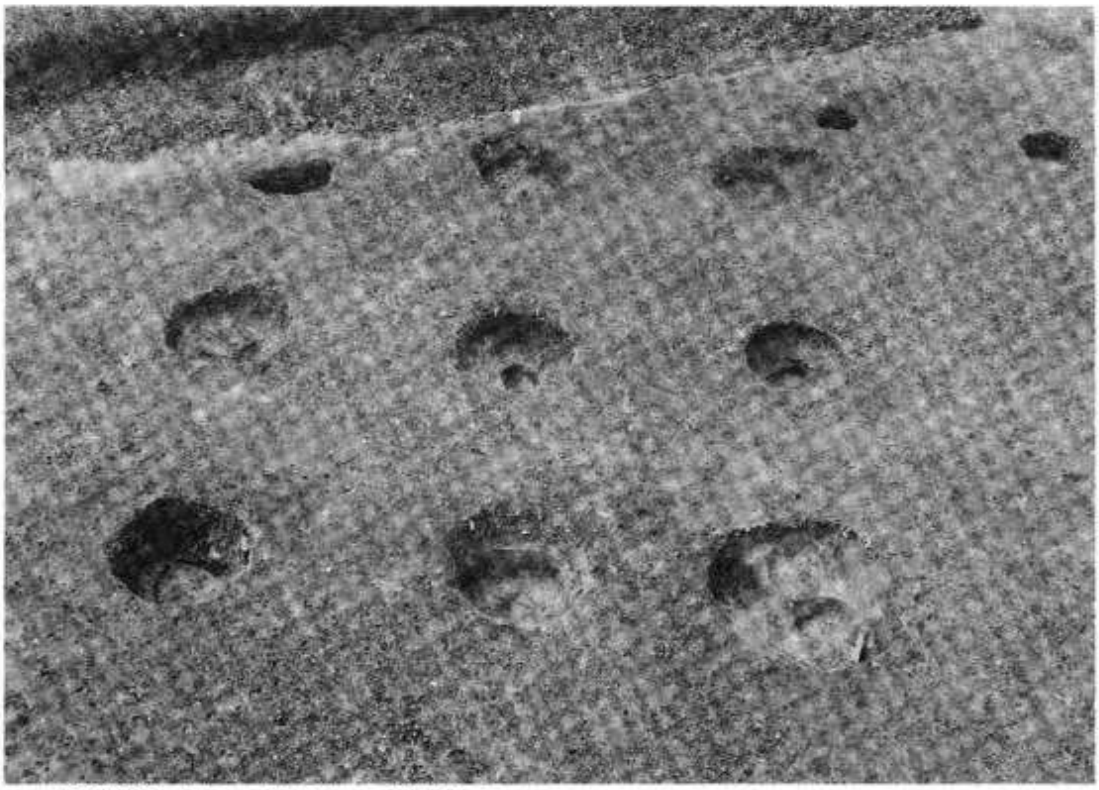


a．安満遺跡A区　東側（西側から）

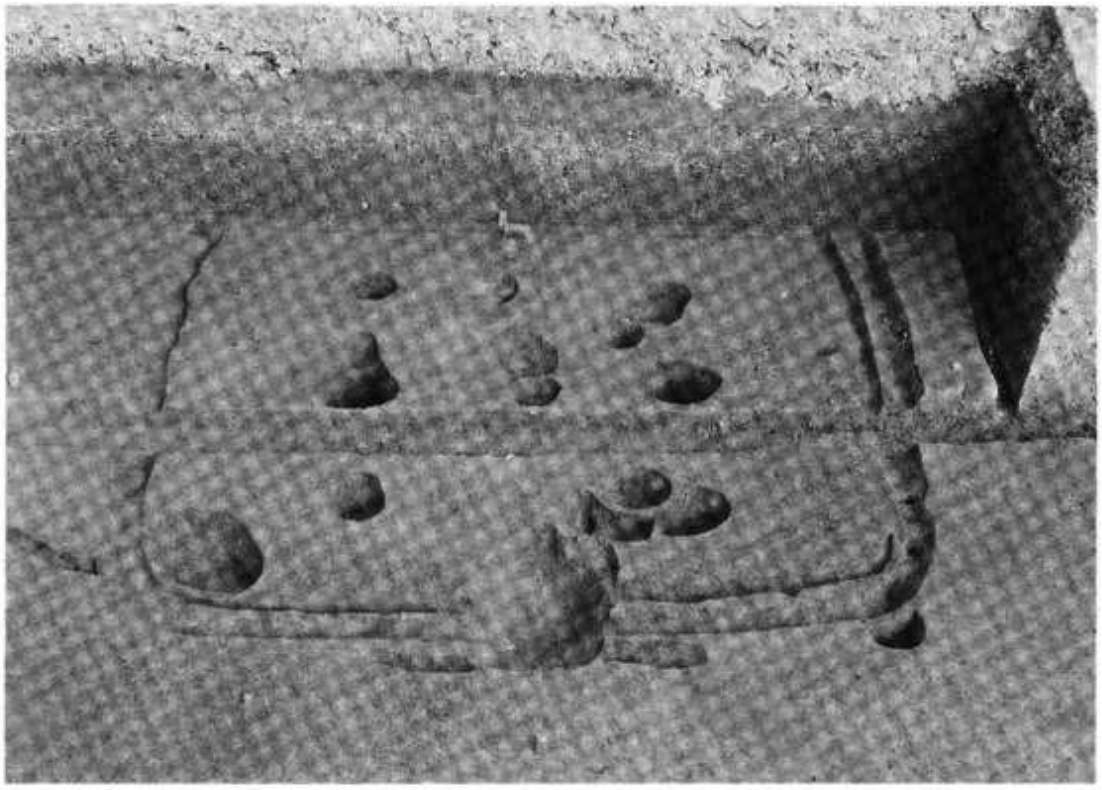


b．安満遺跡A区　西側（西側から）

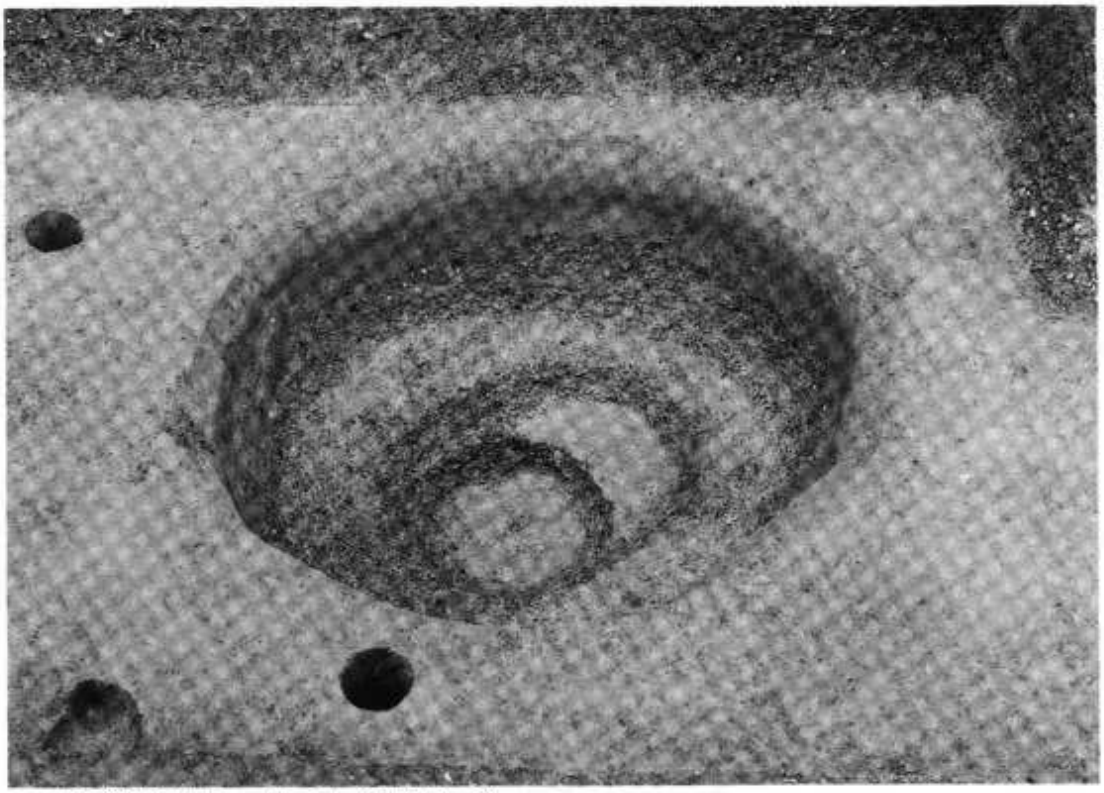
図版第12



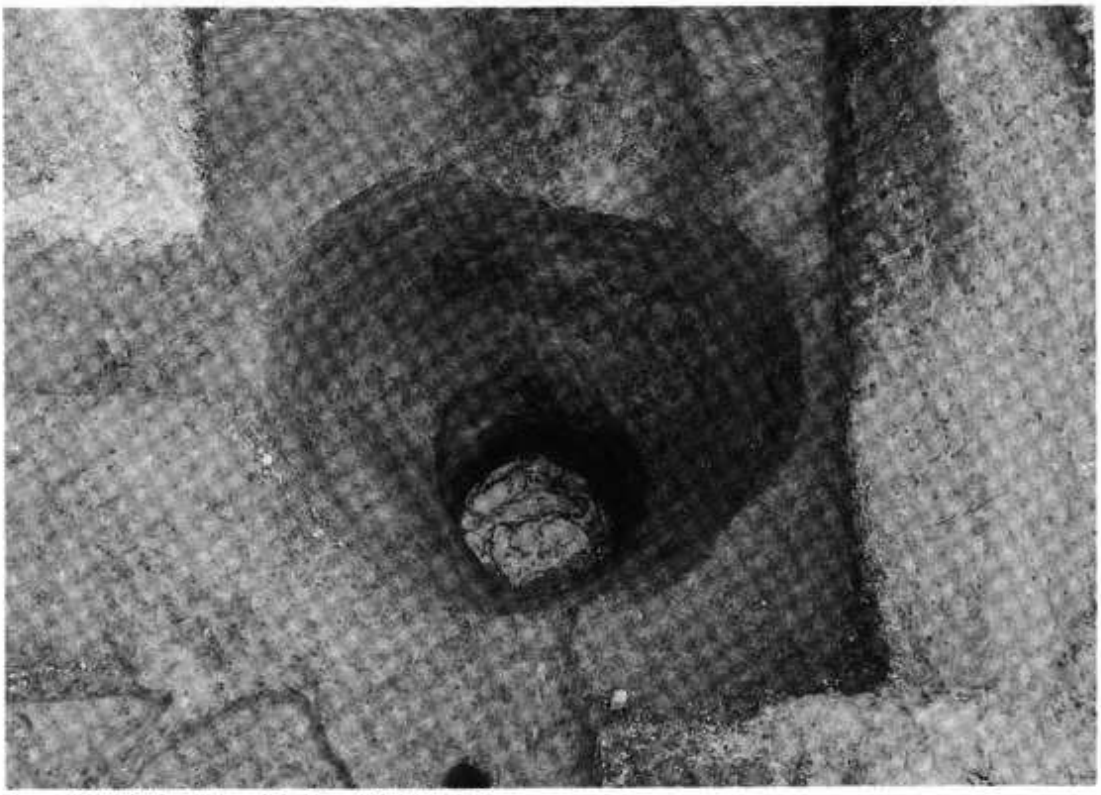
a．安満遺跡A区　建物跡1（北側から）



b．安満遺跡A区　住居跡1（南側から）

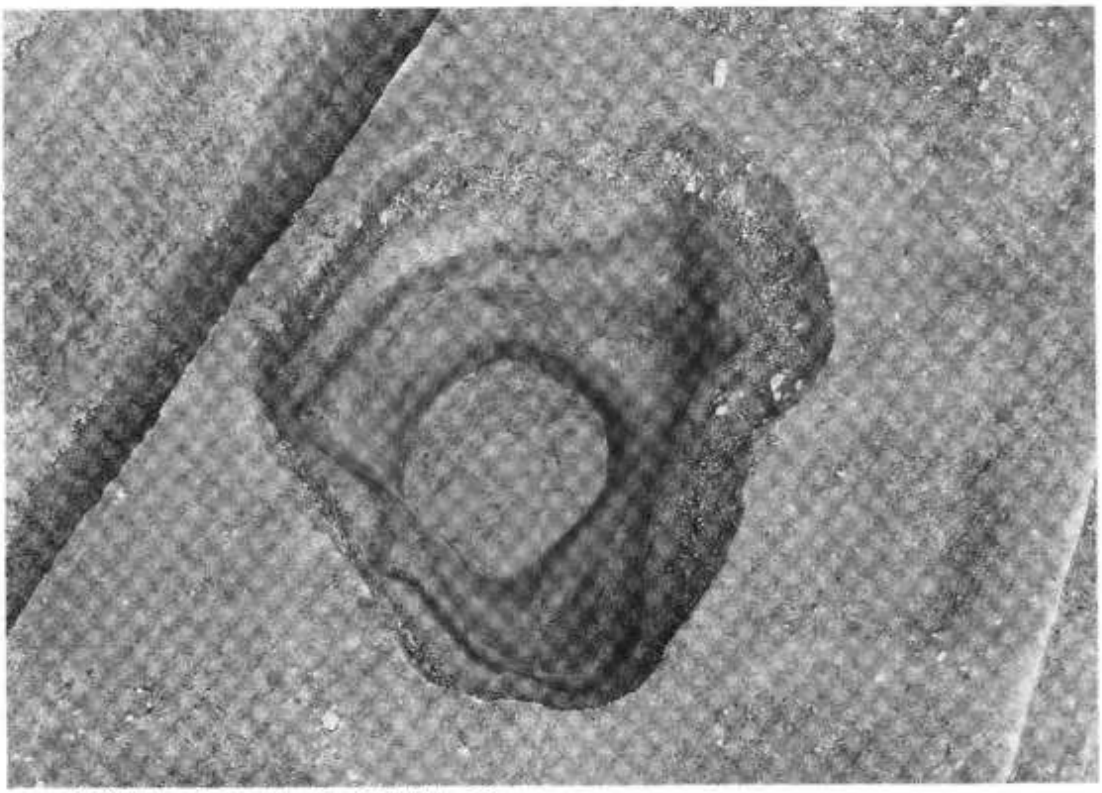


a．安満遺跡A区　井戸1（北側から）

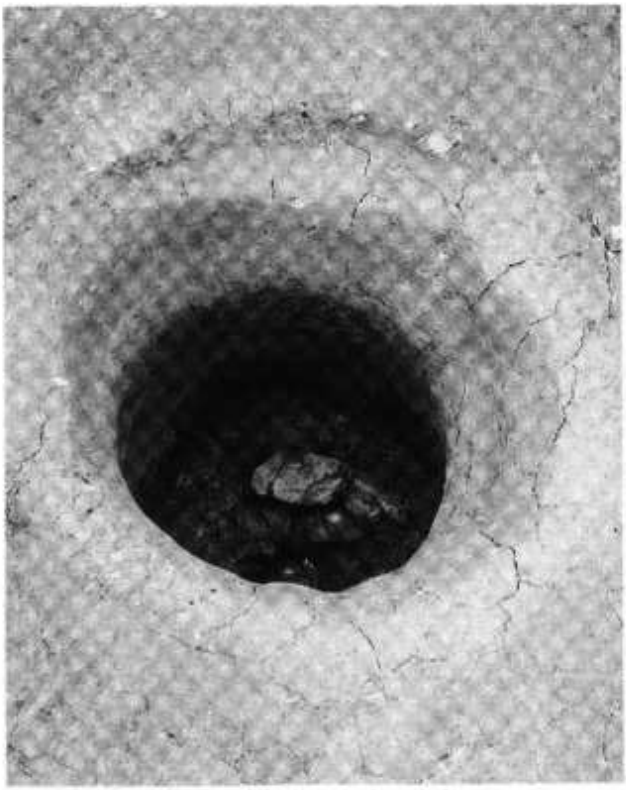


b．安満遺跡A区　井戸2（北側から）

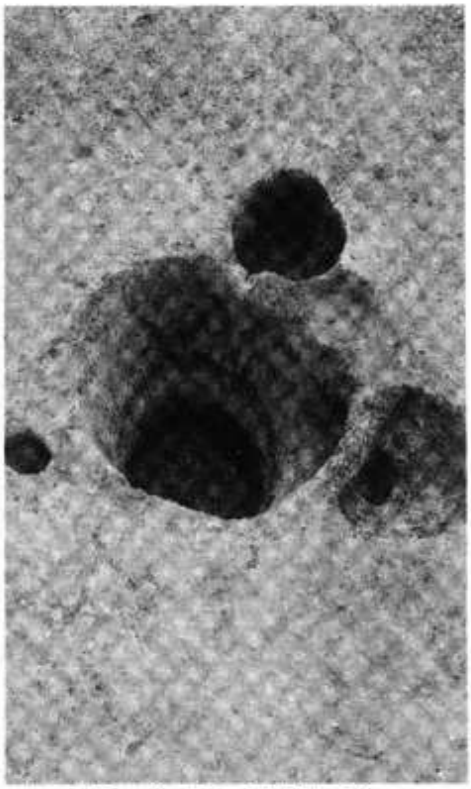
図版第14



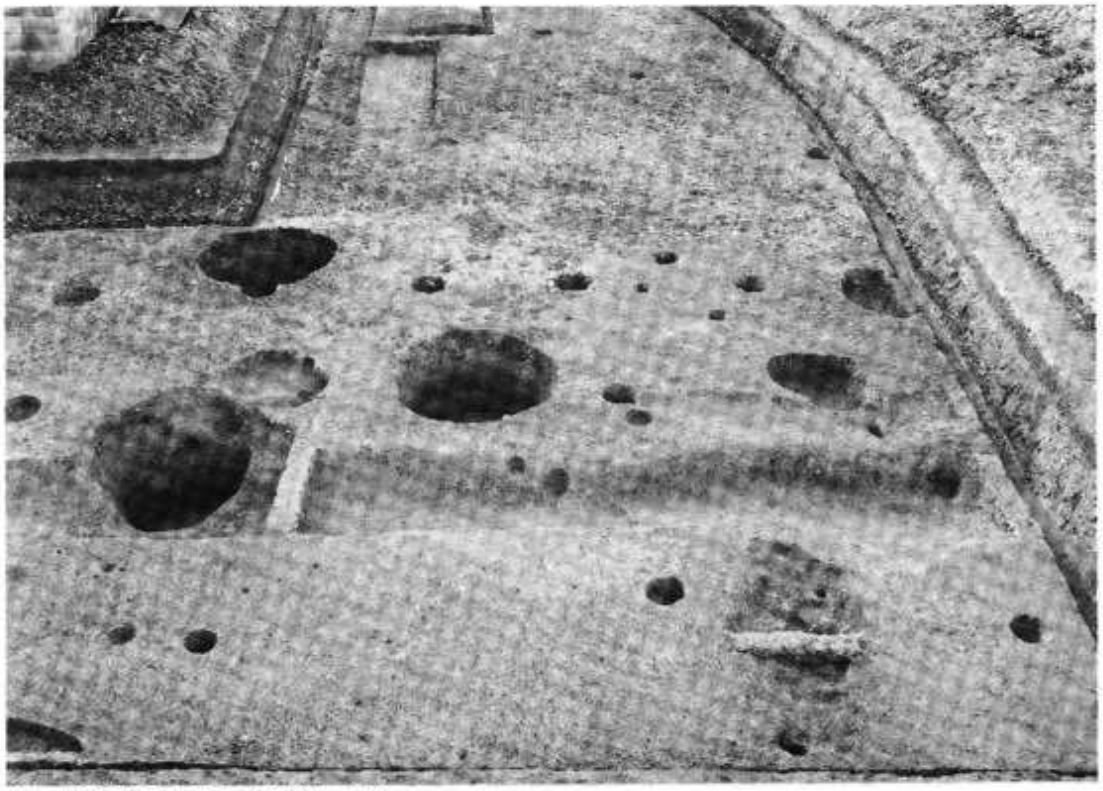
a．安満遺跡A区　井戸4（西側から）



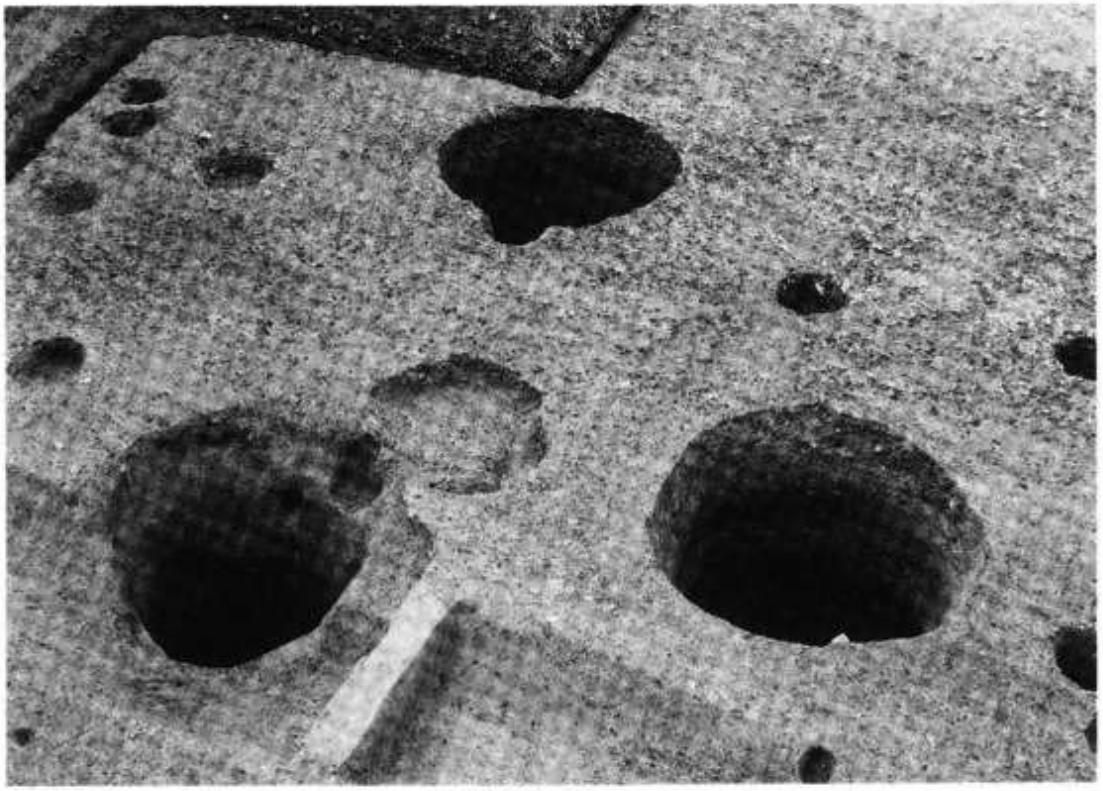
b．A区　井戸5（東側から）



c．A区　井戸3（北側から）



a．安満遺跡B区（東側から）



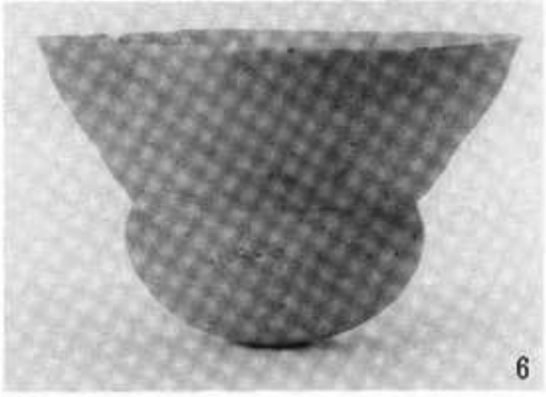
b．安満遺跡B区　井戸1・2・3（東側から）

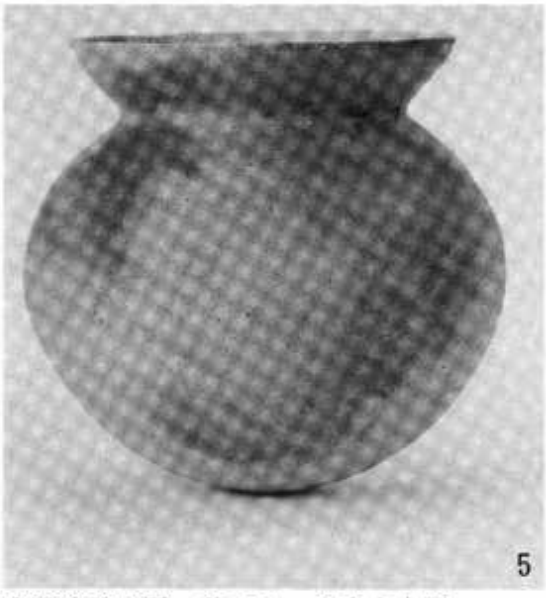
図版第16

2

1

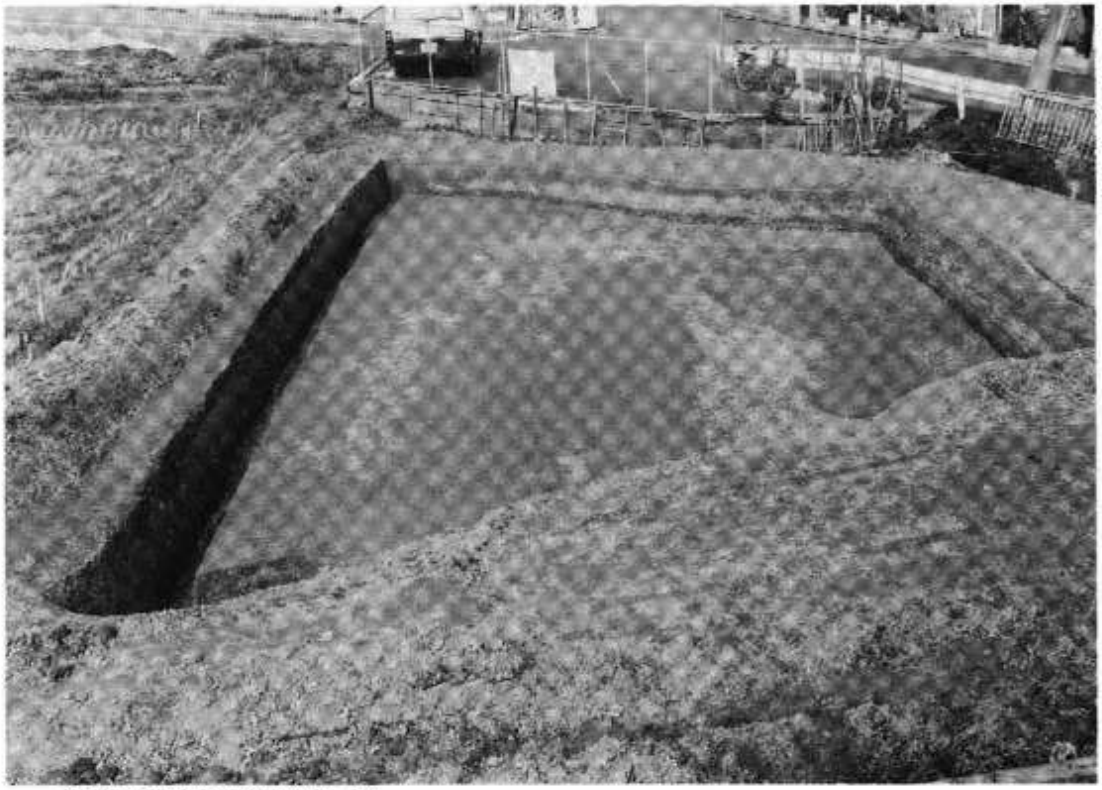
3


6

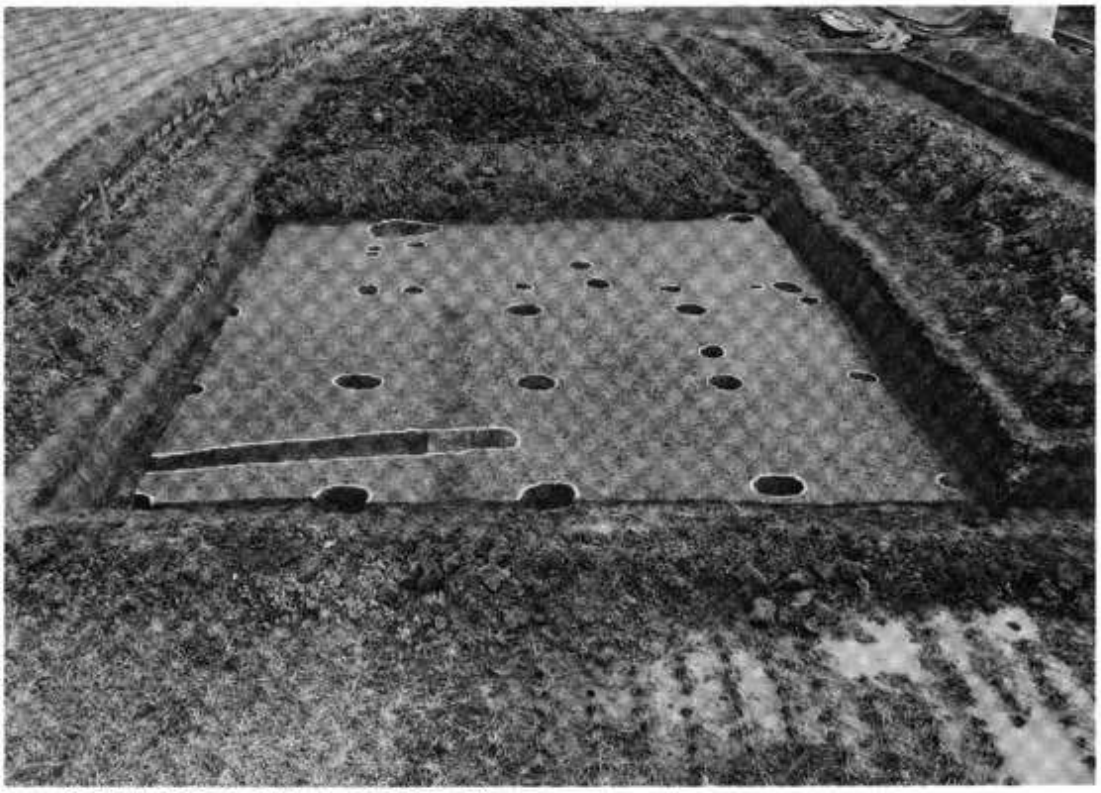

5

4

安満遺跡B区　井戸1・2出土土器



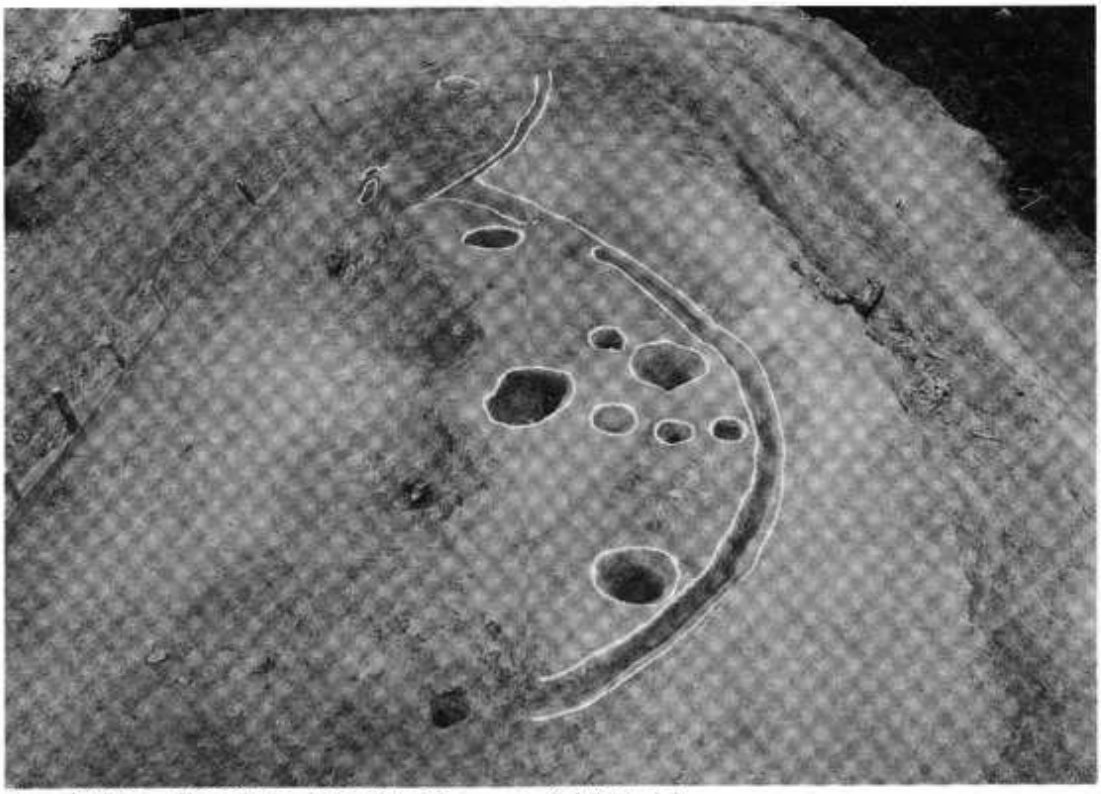
a．安満遺跡C区（南側から）



b．安満遺跡D区　建物1（西側から）

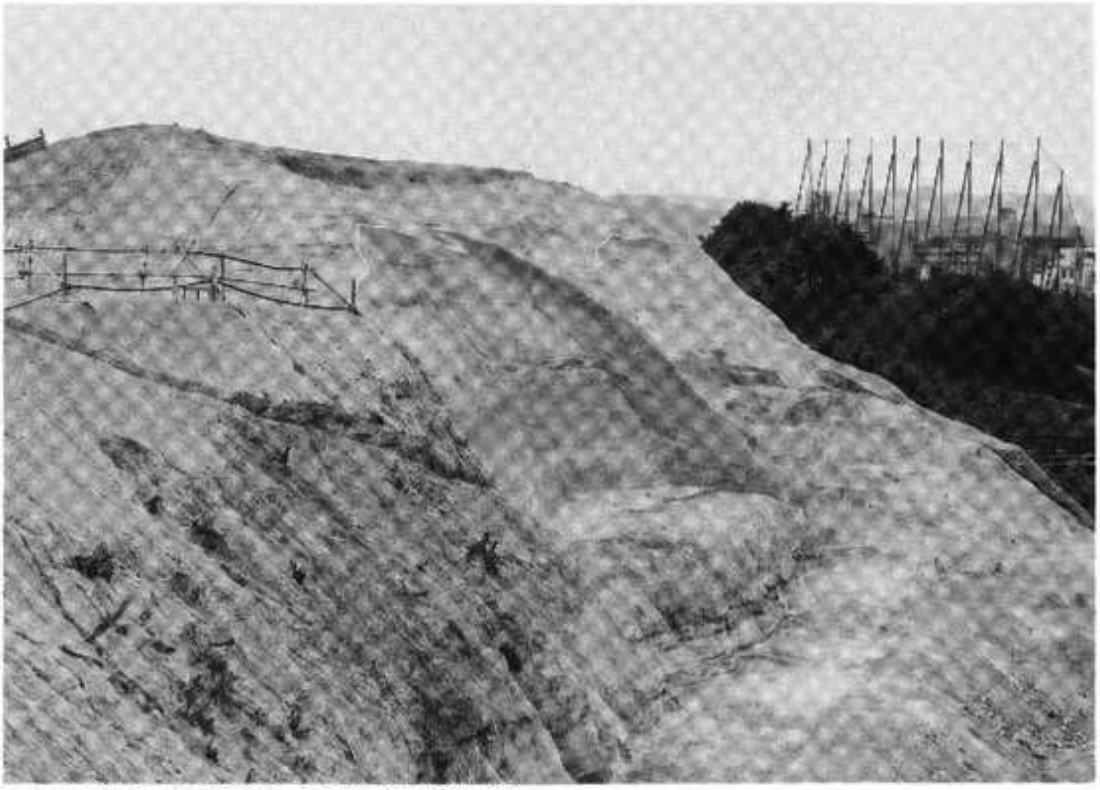
図版第18

a．古曽部・芝谷遺跡　調査区全景（南西側から）



b．古曽部・芝谷遺跡　竪穴住居跡１・２（東側から）

a．古曽部・芝谷遺跡　環壕（西側から）



b．古曽部・芝谷遺跡　環壕（東側から）